Systemwalker

FUJITSU

Systemwalker Centric Manager

12.0

入門ガイド

J2S1-8710-01Z2(A)

Solaris™ Operating Environment

まえがき

本書の目的

本書は、Systemwalker Centric Manager 12.0の評価システムの構築や操作方法の概要について説明しています。

なお、本書は、Solaris OE版を対象としています。

本書の読者

本書は、Systemwalker Centric Manager を使用して分散したシステム(クライアント、サーバ)およびネットワーク(LAN/WAN)内の各システムを運用・管理する方を対象としています。

本書では特に、機能評価や、製品の概要を理解するなどの目的のために、小規模の分散システムを運用・管理する方を対象としています。

また、本書を読む場合、OSやGUIの一般的な操作、およびTCP/IPやSMTPなどの一般的な知識をご理解の上でお読みください。

注意事項

略語表記について

- Microsoft® Windows Server™ 2003, Standard Edition、Microsoft® Windows Server™ 2003, Enterprise EditionおよびMicrosoft® Windows Server™ 2003, Datacenter Editionを“Windows Server™ 2003”と略しています。
- Microsoft® Windows® 2000 Professional operating system 、Microsoft® Windows® 2000 Server operating systemおよびMicrosoft® Windows® 2000 Advanced Server operating systemを“Windows® 2000”と略しています。
- Microsoft® Windows NT® Server network operating system Version 4.0を“Windows NT®”と略しています。
- Microsoft® Windows® XP ProfessionalおよびMicrosoft® Windows® XP Home Editionを“Windows® XP”と略しています。
- Microsoft® Windows® Millennium Editionを“Windows® Me”と略しています。
- Microsoft® Windows® 98 operating system, Microsoft® Windows® 98 Second Editionを“Windows® 98”と略しています。
- Windows NT®、Windows® 2000およびWindows Server™ 2003で動作するSystemwalker Centric Managerを“Windows版 Systemwalker Centric Manager”または“Windows版”と略しています。
- Windows NT®、Windows® 2000、Windows® XPおよびWindows Server™ 2003を“Windows NT系”と略しています。
- Solaris™ Operating Environmentを“Solaris OE”と略しています。
- Systemwalker Centric Manager for Solaris™ Operating Environment

を“Solaris OE版 Systemwalker Centric Manager”または“Solaris OE版”と略しています。

- HP-UX上で動作するSystemwalker Centric Managerを“HP-UX版 Systemwalker Centric Manager”または“HP-UX版”と略しています。
- AIX上で動作するSystemwalker Centric Managerを“AIX版Systemwalker Centric Manager”または“AIX版”と略しています。
- Linux上で動作するSystemwalker Centric Managerを“Linux版 Systemwalker Centric Manager”または“Linux版”と略しています。
- Solaris OE、Linux、HP-UX、AIX上で動作するSystemwalker Centric Managerを、“UNIX版Systemwalker Centric Manager”または“UNIX版”と略しています。
- Microsoft® SQL Server™ を“SQL Server”と略しています。
- Microsoft® Visual C++を“Visual C++”と略しています。

輸出管理規制について

当社ドキュメントには、外国為替および外国貿易管理法に基づく特定技術が含まれていることがあります。特定技術が含まれている場合は、当該ドキュメントを輸出または非居住者に提供するとき、同法に基づく許可が必要となります。

平成17年 1月

平成17年 1月 初 版

お願い

本書を無断で他に転載しないようお願いします。
本書は予告なしに変更されることがあります。

商標について

APC、PowerChuteは、AMERICAN POWER CONVERSION社の登録商標です。

ARCserveは、米国Computer Associates International,Inc.の登録商標です。

Ethernetは、富士ゼロックス株式会社の登録商標です。

HP-UXは、米国Hewlett-Packard社の登録商標です。

IBM、AIX、AIX 5Lは、IBM Corporationの商標です。

LaLaVoice は、株式会社東芝の商標です。

LANDesk はアメリカ合衆国及びその他の国におけるLANDesk Software Ltd.またはその子会社の商標または登録商標です。

Linuxは、Linus Torvalds氏の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

MC/ServiceGuardは、Hewlett-Packard Companyの製品であり、著作権で保護されています。

Microsoft、MS、MS-DOS、Windows、Windows NT、Visual Basic、Visual C++およびMicrosoft Cluster Serverは、米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標です。

NEC、SmartVoiceは、日本電気株式会社の商標または登録商標です。

Netscape、Netscape の Nおよび操舵輪のロゴ、Netscape Navigator、Netscape Communicatorは、米国およびその他の国における Netscape Communications Corporation 社の登録商標です。

Oracleは、米国ORACLE Corporationの登録商標です。

Palm、Palm OS、HotSyncは、PalmSource Inc. の商標です。

Red Hat、RPMおよびRed Hatをベースとしたすべての商標とロゴは、Red Hat,Inc.の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

SMMは、米国インテル社の商標です。

Sun、Sun Microsystems、サンのロゴマーク、Sun/Solaris/Java に関連するすべての商標およびロゴマークは、米国 Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Sun、SunClusterは、米国およびその他の国における米国Sun Microsystems,Inc.の商標または 登録商標です。

Symantec、Symantecロゴ、Norton AntiVirusは、SymantecCorporationの米国における登録商標です。

Tcl/Tkは、カリフォルニア大学、サン・マイクロシステムズ社、Scriptics社他が作成したフリーソフトです。

TRENDMICRO、Trend Micro Control Manager、Trend Virus Control System、TVCS、InterScan、ウイルスバスター、INTERSCAN VIRUSWALL、eManagerは、トレンドマイクロ株式会社の登録商標です。

Turbolinux及びターボリナックスは、ターボリナックス株式会社の商標または登録商標です。

UNIXは、X/Openカンパニーリミテッドが独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

UXP、Systemwalker、Interstage、Symfowareは、富士通株式会社の商標です。

VERITAS、VERITAS SOFTWARE、VERITASロゴ、VERITAS Cluster Serverおよび

その他のVERITAS製品は、米国および各国のVERITAS Software Corporationの商標または登録商標です。
VirusScanおよびNetShieldは、米国Network Associates社および関連会社の商標または登録商標です。
Xiino、Palmscape、イリンクスは、株式会社イリンクスの商標です。
その他の製品名は、各社の商標または登録商標です。

Microsoft Corporationのガイドラインに従って画面写真を使用しています。

All Rights Reserved,Copyright © 富士通株式会社 1995-2005
All Rights Reserved,Copyright © 株式会社PFU 1995-2005
Portions Copyright © Contributors to ISODE Project
Portions Copyright © 1983-1994 Novell,Inc., All Rights Reserved.
JavaChart™ Copyright © 1996-1997 Visual Engineering,Inc.All Rights Reserved
HashJava GNU Library General Public License
Portions © 1994-1996 Attachmate Corporation.All Rights Reserved.

マニュアル体系と読み方

Systemwalker Centric Managerのマニュアル体系

Systemwalker Centric Managerのマニュアルと概要を以下に示します。

Systemwalker技術情報ホームページ

Systemwalker技術情報ホームページでは、最新のSystemwalker Centric Managerのマニュアルが公開されています。クラスタ運用や移行など、特殊な運用方法やマニュアルの補足情報も公開されています。

最初に、Systemwalker技術情報ホームページを参照するようにしてください。URLは以下のとおりです。

http://systemwalker.fujitsu.com/jp/man/

“Systemwalker Centric Manager 解説書”

各機能の概要や動作環境について説明しています。導入前に、Systemwalker Centric Managerの概要や動作環境について調べる場合にお読みください。

“Systemwalker Centric Manager Global Enterprise Edition説明書”

Global Enterprise Editionの固有の機能について、機能概要や設定方法を説明しています。

Global Enterprise EditionはSolaris OE版だけの提供です。

“Systemwalker Centric Manager 導入手引書” (Windows版)

“Systemwalker Centric Manager 導入手引書” (UNIX版)

導入方法および環境構築方法について説明しています。Systemwalker Centric Managerの導入、およびシステムを構成するコンピュータを変更する場合にお読みください。

“Systemwalker Centric Manager 使用手引書 監視機能編”

Systemwalker Centric Managerのシステムの監視に関する機能の、カスタマイズ方法や、毎日の運用方法について説明しています。

“Systemwalker Centric Manager 使用手引書 資源配付機能編”

Systemwalker Centric Managerの資源配付に関連する機能の、カスタマイズ方法や、毎日の運用方法について説明しています。

“Systemwalker Centric Manager リファレンスマニュアル” (Windows版)

“Systemwalker Centric Manager リファレンスマニュアル” (UNIX版)

コマンドおよび各機能のCSVの入出力形式やファイルの形式を説明しています。

“Systemwalker Centric Manager バージョンアップガイド”(Windows版)

“Systemwalker Centric Manager バージョンアップガイド”(UNIX版)

Systemwalker Centric Managerをバージョンアップする場合の移行方法、および注意事項について説明しています。

“Systemwalker Centric Manager 他社データベースの利用ガイド”

Systemwalker Centric Managerで扱う他社データベースの利用方法について説明しています。

“Systemwalker Centric Manager Interstage,Symfoware,ObjectDirectorとの共存ガイド”(Windows版)

“Systemwalker Centric Manager Interstage,Symfoware,ObjectDirectorとの共存ガイド”(UNIX版)

Systemwalker Centric Managerで使用するInterstage、Symfoware、ObjectDirectorまたはそれらを使用する他製品と共存する場合の環境作成、環境の削除および注意事項について説明しています。

“Systemwalker Centric Manager 資源配付のバリエーション”

資源配付機能の運用バリエーションの方法および操作方法について説明しています。

“Systemwalker Centric Manager APIガイド”(Windows版)

“Systemwalker Centric Manager APIガイド”(UNIX版)

Systemwalker Centric Managerが提供するAPIの機能概要、リファレンスについて説明しています。

“Systemwalker Centric Manager スクリプトガイド”

Systemwalker Centric Managerが提供するサンプルスクリプトの機能概要、カスタマイズ、使用方法について説明します。

“Systemwalker Centric Manager メッセージ説明書”

Systemwalker Centric Managerで出力するメッセージについて説明します。

オンラインヘルプ

Systemwalker Centric Managerの各画面のヘルプメニューまたはヘルプボタンから、オンラインヘルプを表示することができます。各画面での操作方法および入力内容は、ヘルプを参照してください。

Systemwalker Centric Manager関連マニュアルの読み方

Systemwalker Centric Managerでは、対象読者とその作業を以下のように仮定しています。それぞれの作業と対象マニュアルについて、以下に説明します。

先に“Systemwalker Centric Manager 解説書”をお読みください。

次に、Systemwalker技術情報ホームページに記載されている運用パターンに該当するかどうかを確認してから、“Systemwalker Centric Manager 導入手引

書”などのマニュアルをお読みください。

作業	対象マニュアル
基本用語を知る システム構成の概要を知る 機能の概要を知る 動作環境を知る 製品のエディションやバージョンの組合せを確認する	解説書
Systemwalker Centric Manager Global Enterprise Editionの概要を知る グローバルサーバを含むシステムの運用を設計/検討する Systemwalker Centric Manager Global Enterprise Editionを導入する Systemwalker Centric Manager Global Enterprise Edition固有機能について知る グローバルサーバを監視する グローバルサーバの構成を管理する グローバルサーバを操作する グローバルサーバに資源を配付する	Global Enterprise Edition説明書
システム構成を設計/検討する 導入手順を設計/検討する 構成変更方法を設計/検討する 環境保全の設計/検討をする 新規に導入する 導入環境を変更する 環境保全の作業を実施する	導入手引書
コマンドの使用方法を確認する ファイル形式を確認する ポート番号を確認する	リファレンスマニュアル
監視機能を使用する ネットワーク構成を管理する システム異常に対応する 障害に対応する 統計をとる	使用手引書 (監視機能編)
インベントリ情報を収集する 資源配付方法を検討する 資源を配付する	使用手引書 (資源配付機能編)
バージョンアップする	バージョンアップガイド
他社DBを利用する(ヘルプデスク/インベントリ)	他社データベースの利用ガイド
SymfowareやInterstageと同時に使用する	Interstage,Symfoware,ObjectDirectorとの共存ガイド
大規模システムで資源を配付する	資源配付のバリエーション
APIを使用し、アプリケーションからSystemwalker Centric Managerの機能を利用する	APIガイド

作業	対象マニュアル
サンプルスクリプトをカスタマイズし、Systemwalker Centric Managerの機能を利用する Systemwalkerスクリプトを作成する	スクリプトガイド
Systemwalker Centric Managerで出力するメッセージを確認する	メッセージ説明書
Systemwalker Centric Managerの評価システムを構築する、テスト運用や操作概要を理解する PRIMEPOWERのハードウェア監視を行う Sun Management Centerのアラーム監視を行う Microsoft® Cluster Serverで構築したクラスタシステムを管理する SafeCLUSTERで構築したクラスタシステムを管理する Sun Clusterで構築したクラスタシステムを管理する MC/ServiceGuardで構築したクラスタシステムを管理する SafeLINKで構築したLAN二重化を管理する Interstage Application Serverで構築した業務システムを管理する Network Node Managerと連携する ロードバランサと連携して、Systemwalkerを使用する 以下のウィルス監視製品と連携する ServerProtect Trend Virus Control System InterScan ウィルスバスターコーポレートエディション NetShield VirusScan Norton AntiVirusと連携する 高信頼システムへの適用を検討する Microsoft® Cluster Serverを利用して、運用管理サーバを高信頼化する SafeCLUSTERを利用して、運用管理サーバを高信頼化する Sun Clusterを利用して、運用管理サーバを高信頼化する Microsoft® Cluster Serverを利用して、部門管理サーバを高信頼化する SafeCLUSTERを利用して、部門管理サーバを高信頼化する Sun Clusterを利用して、部門管理サーバを高信頼化する 運用管理サーバを二重化運用する 全体監視サーバを使用し、大規模システムを効率よく管理する 全体監視サーバを高信頼化する DMZ上のシステムを運用管理する BtoBでのシステムを運用管理する DHCP環境でSystemwalkerを使用する RAS接続の環境でSystemwalkerを使用する	Systemwalker 技術情報ホームページ

本書の読み方

本書の構成

本書は、以下の1章～5章および付録から構成されています。1章から順に読むことにより、Systemwalker Centric Managerの概要、インストール方法、機能と操作方法がご理解いただけるよう説明しています。3章から5章については、節単位に独立しており、任意の節から読むこともできます。

第1章 Systemwalker Centric Managerの概要

Systemwalker Centric Managerの機能概要と、本書での記述範囲を説明しています。

第2章 インストールを実施する

Systemwalker Centric Managerのインストール手順と、環境作成手順について説明しています。

第3章 監視する

イベント、ネットワーク、およびシステム性能を監視する基本的な定義手順と操作方法を説明しています。

第4章 資源を配付する

サーバとクライアントへ資源を配付する定義手順と操作方法について説明しています。

第5章 システムの構成情報を収集する

システムの構成情報を収集する定義手順と操作方法について説明しています。

付録A システム環境構築例

導入支援を使用時の各機能でエラーが発生した場合の対処方法について説明します。

エディション・OSによる固有情報の記事について

本書は、Standard EditionおよびEnterprise Editionを中心に説明しています。Global Enterprise Editionでの固有の機能については、Global Enterprise Edition 説明書をお読みください。Global Enterprise Editionは、Solaris™ Operating Environmentだけでサポートされています。

エディション・OSによる固有記事に対しては、以下の記号をタイトルまたは本文につけています。

“Systemwalker Centric Manager Standard Edition”の固有記事:“SE”

“Systemwalker Centric Manager Enterprise Edition”の固有記事:“EE”

固有記事の範囲は、タイトルまたは本文についた場合で以下のように異なります。

- タイトルに付いている場合

  章、節、項や見出しなどのタイトルに付いている場合、タイトルの説明部分全体が、固有記事であることを示します。この場合、タイトルに対して、オンラインマニュアルの場合は色が付き、PDFマニュアルの場合は網かけされます。

- 本文に付いている場合
  固有記事全体に対して、オンラインマニュアルの場合は色が付き、PDFマニュアルの場合は網かけされます。

コマンドで使用する記号について

コマンドで使用している記号について以下に説明します。

記述例

[PARA= {a |b |c |… }]

記号の意味

記号	意味
[ ]	この記号で囲まれた項目を省略できることを示します。
{ }	この記号で囲まれた項目の中から、どれか１つを選択することを示します。
__	省略可能記号“[ ]”内の項目をすべて省略したときの省略値が、下線で示された項目であることを示します。
|	この記号を区切りとして並べられた項目の中から、どれか１つを選択することを示します。
…	この記号の直前の項目を繰り返して指定できることを示します。

マニュアルの記号について

マニュアルでは以下の記号を使用しています。

特に注意が必要な事項を説明しています。

知っておくと便利な情報を説明しています。

理解のヒントとなる情報を説明しています。

知っておくと参考になる情報を説明しています。

参照先に注意が必要な情報を説明しています。

目次

第1章　Systemwalker Centric Managerの概要 1
1.1 Systemwalker Centric Managerとは 2
1.2 機能概要 4
1.3 記述範囲 7
第2章　インストールを実施する 9
2.1 インストール前の作業 11
2.1.1 データベース領域を見積もる 11
2.1.2 データベースパーティションを作成する 13
2.1.3 システムパラメタをチューニングする 13
2.1.4 管理アカウントを作成する 17
2.1.5 SNMPエージェントをインストールする 17
2.1.6 WWWサーバ製品をインストールする 19
2.1.7 LANGを設定する 19
2.2 運用管理サーバのインストール 20
2.2.1 インストール 20
2.2.2 環境作成 24
2.3 運用管理クライアントのインストール 29
2.4 業務サーバのインストール 39
2.5 クライアントのインストール 47
2.6 インストール後の作業 51
2.6.1 運用管理クライアントのセットアップ 51
2.6.2 ネットワークの構成情報(ノード)の自動検出 52
第3章　監視する 55
3.1 ノードのイベントを監視する 58
3.1.1 イベントを監視する 58
3.1.2 イベントの原因を調査する 61
3.1.2.1 リモートコマンドを使用する 61
3.1.2.2 リモートログインを使用する 66
3.1.3 監視イベントを対処済にする 67
3.2 ノードの稼働状況を監視する 69
3.3 ネットワークの性能を監視する 73
3.3.1 ネットワークの性能監視の定義方法 73
3.3.2 ネットワーク性能の監視方法 75
3.4 システムの性能を監視する 77
3.4.1 システムの性能を監視するポリシーの定義方法 77
3.4.2 システムの性能を監視するポリシーの配付 79
3.4.3 システムの性能監視時に通知されるメッセージ 80
3.5 アプリケーションの稼働状況を監視する 81
3.5.1 業務管理ツリーの作成 81
3.5.2 アプリケーションの自動検出 84
3.5.3 アプリケーションに対する稼働監視の設定 92

3.5.4 アプリケーションの稼働監視..... 98
3.6 監視イベントを監視対象からはずす..... 99
3.7 監視イベントの対処を自動実行する..... 102
3.8 WWWブラウザで監視する..... 108
第4章　資源を配付する..... 113
4.1 配付経路を定義する..... 116
4.2 資源を登録する..... 121
4.3 業務サーバの適用先を定義する..... 126
4.4 クライアントの適用先を定義する..... 130
4.5 メンテナンス版数を作成する..... 136
4.6 業務サーバに資源を配付する..... 140
4.7 クライアントに資源を配付する..... 142
4.8 資源の配付状況を確認する..... 143
第5章　システムの構成情報を収集する..... 145
5.1 業務サーバのインベントリ通知スケジュールを定義する..... 147
5.2 クライアントのインベントリ収集スケジュールを定義する..... 151
5.3 通知スケジュール定義を業務サーバとクライアントに配付する..... 156
5.4 インベントリ情報を参照する..... 163
付録A　システム環境構築例..... 165
A.1　データベースパーティション作成例..... 165
索引..... 171

第1章　Systemwalker Centric Managerの概要

Systemwalker Centric Managerの機能概要と本書で想定するシステム構成について説明します。

1.1 Systemwalker Centric Managerとは
1.2 機能概要
1.3 記述範囲

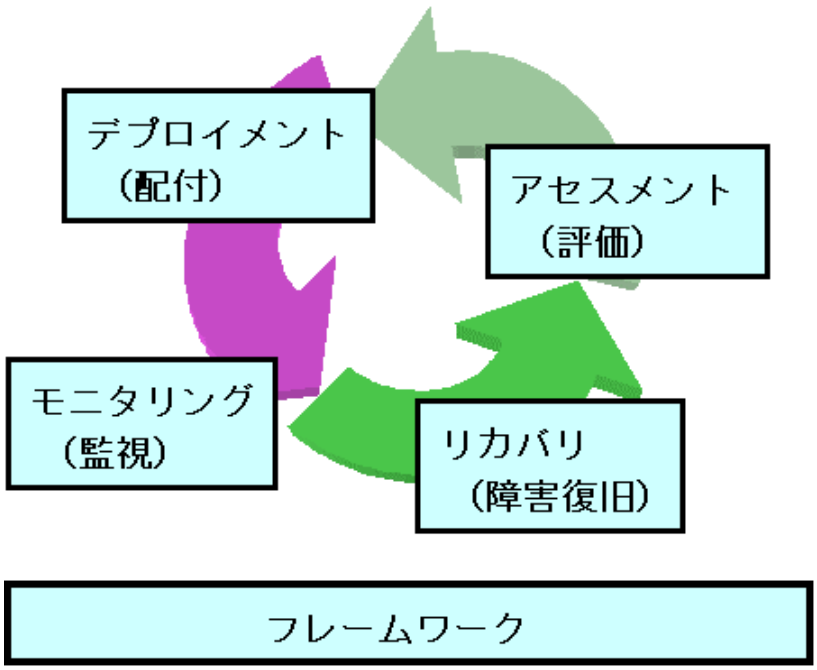
1.1 Systemwalker Centric Managerとは

企業内業務の再編、企業間の統合、そしてグローバルな企業間連携など、企業のビジネスがダイナミックに変化している今、システムの運用管理の複雑さ、困難さはさらに増しつつあります。
また、24時間365日無停止連続運転、ビジネスの継続性、人手によるTCO(Total Cost of Ownership)削減が既に限界にきていることなど、運用管理に求められるハードルはますます高くなっています。

Systemwalker Centric Managerは、情報システムの運用管理を行うための統合基盤となる製品です。Systemwalkerでは、システム構築時に管理者が定義したシステム稼働要件をポリシーといいます。このポリシーに従って、システムを構成するIT資源(ネットワーク、ハードウェア、OS、アプリケーション、利用者など)および業務のライフサイクル・マネージメントを実現します。

ライフサイクル・マネージメント

Systemwalker Centric Managerでは、IT資源のライフサイクルを管理します。IT資源のライフサイクルを次の4つのフェーズにわけ、効率的に運用管理を行います。



- デプロイメント(配付)
  IT資源および業務をシステムへ導入/設定するフェーズです。情報システムで利用する資源の配付・適用を行います。
- モニタリング(監視)
  運用フェーズに入ってからのIT資源や業務の稼働状況、性能などを監視するフェーズです。IT資源の稼働監視、異常監視、性能監視を行い業

務が正しく稼働していることを監視します。

- リカバリ(障害復旧)

  トラブル時の対処、復旧のフェーズです。トラブル発生時に調査や対処を行ったり、障害管理を行います。

- アセスメント(評価)

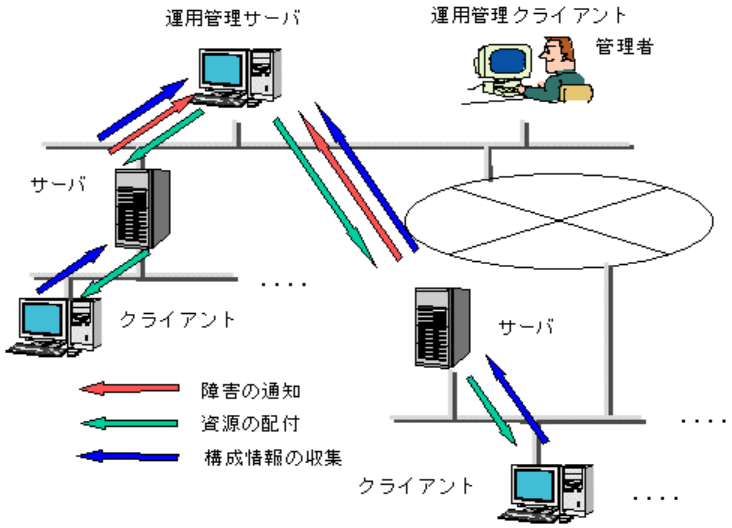
  業務の安定稼働を評価するフェーズです。業務の稼働情報や業務を構成するIT資源の情報から業務のサービスレベルを評価／分析します。業務のボトルネックの検出やキャパシティプランニングを行います。

- フレームワーク

  フレームワークは、ライフサイクル・マネージメント機能間での情報共有とシームレスな機能連携を行う運用管理の基盤です。ネットワーク、ハードウェア、OS、アプリケーションなど情報システム全体の構成情報を収集し一元管理します。

1.2 機能概要

Systemwalker Centric Managerでは、ネットワークの通信負荷を軽減し、管理を効率的にするため、下図のような階層構造による運用管理を実現しています。



Systemwalker Centric Managerで提供する機能の概要を、以下に説明します。

構成情報の管理

ネットワークやシステム全体の構成情報を収集し、運用管理サーバで一元管理します。

- ネットワークの構成情報

  ネットワークに接続されたLAN機器やサーバなどは自動的に検出され、ネットワークの構成情報を一目で把握することができます。

- システムの構成情報

  被監視システムのハードウェアやソフトウェアの情報(インベントリ情報)を収集し、一元管理できます。

資源配付

- アプリケーションやデータの配付

  サーバまたはクライアントで使用するアプリケーションやデータなどの資源を、運用管理サーバで一元管理し、対象のサーバやクライアントに配付することができます。また、回線を使った配付のほかに、媒体経由や通信衛星を使った配付もできます。

  資源は、業務構成に従って配付されるので、業務の環境を効率よく整備できます。また、配付する資源は世代管理され、配付ミスの防止と配付負荷の削減を実現します。

障害監視

ネットワークやシステム、アプリケーションの稼働状況、障害発生、性能状況を集中的に監視します。

ネットワークやシステム、アプリケーションのさまざまな状況を集中的に監視することで、トラブルの未然防止、早期発見、迅速な対処が可能となります。

- 障害の監視
  監視対象ノードが出力するイベントやSNMPトラップを監視します。また、ノードの稼働状況や性能を監視します。
- アプリケーションの監視
  アプリケーションの稼働状況やプロセス単位の性能を監視します。
- 業務の監視
  管理者が設定したルールどおりに稼働していないノードやアプリケーションの状態を監視します。

障害復旧

運用中にネットワークやシステム、業務で発生するさまざまな障害の復旧作業が効率的に行えます。

- 障害の管理
  障害の対処方法をデータベースに登録することで、トラブル発生時にその情報を参照して対処することができます。
- リモートでの操作
  障害が発生したサーバやクライアントの復旧作業を管理者のコンピュータからリモートで対処できます。
- 障害対処の自動化
  障害を対処するコマンドやアプリケーションを登録することで、障害発生時に自動的に対処することができます。

評価

障害の発生情報、性能情報などを収集し、ネットワークやシステムの評価を行うことができます。

- ネットワークの評価
  ノードや回線のトラフィックなどのネットワーク性能を収集し、分析することができます。
- システムの評価
  トラブルの発生情報やシステム性能を収集し、分析することができます。
- 障害内容の評価
  障害の対処状況をデータベースに登録することで、障害の履歴管理や障害を分析することができます。

ポリシー運用

Systemwalker Centric Managerでは、ポリシー運用による環境設定の一元管理を行うことができます。ポリシー運用とは、管理者が決定した方針を管理対象のサーバおよびクライアントへ一斉に適用することです。

サーバやクライアントへの一斉適用は、運用管理サーバでポリシー(定義)を作成し、そのポリシーをオンラインで配付/適用する事で実現します。

ただし、ポリシーの配付方法は、2種類あります。資源配付機能、インベントリ管理機能は、資源配付の配付経路を使って配付/適用します。そのほかの

機能については、Systemwalkerコンソールからの配付指示で、即時または次回システム起動時に適用されます。

1.3 記述範囲

本書は、機能検証を目的とした評価システムなど、数台で構成されるシステムに導入する手順を説明しています。そのため、定義手順や操作手順は一部の機能に限定して記述しています。定義項目も、ほとんど初期値を使って説明しています。このため、記述範囲外の機能や定義項目の詳細については、“Systemwalker Centric Manager 導入手引書”を参照してください。

なお、運用管理サーバ1台ですべてのノードを監視することも可能ですが、WAN接続された部門(拠点)数が多い場合には、部門管理サーバを導入して、ネットワークトラフィックを軽減することが可能です。また、被監視ノードが多い場合に、部門管理サーバを導入して、運用管理サーバの負荷を減らすことも可能です。部門管理サーバを導入する場合の定義方法などについては、本書では説明しません。部門管理サーバを導入する場合は、“Systemwalker Centric Manager 導入手引書”および“Systemwalker Centric Manager使用手引書 監視機能編”を参照してください。

以下に記述範囲を説明します。

構成情報の管理

- ネットワークの構成情報

  本書では、Systemwalker Centric Managerの初回起動時の収集定義だけ記述しています。定義方法は、“2.6.2 ネットワークの構成情報(ノード)の自動検出” を参照してください。

- システムの構成情報

  定義方法は、“第5章 システムの構成情報を収集する” を参照してください。

資源配付

- アプリケーションやデータの配付

  定義方法は、“第4章 資源を配付する” を参照してください。

障害監視

- ネットワーク/システムの監視

  定義方法は、“第3章 監視する” を参照してください。。

- アプリケーションの監視

  定義方法は、“3.5 アプリケーションの稼働状況を監視する” を参照してください。

- 業務の監視

  “Systemwalker Centric Manager使用手引書 監視機能編”を参照してください。

障害復旧

- 障害の管理

  “Systemwalker Centric Manager導入手引書”および“Systemwalker Centric Manager使用手引書 監視機能編”を参照してください。

- リモートでの操作

  定義方法、リモートでの操作によりイベントに対処する方法は、

“3.1.2 イベントの原因を調査する” を参照してください。

- 障害対処の自動化

  定義方法は、“3.7 監視イベントの対処を自動実行する” を参照してください。

- 障害の対処のフロー化

  “Systemwalker Centric Manager使用手引書 監視機能編”を参照してください。

評価

- ネットワークの評価

  定義方法は、“3.3 ネットワークの性能を監視する” を参照してください。

- システムの評価

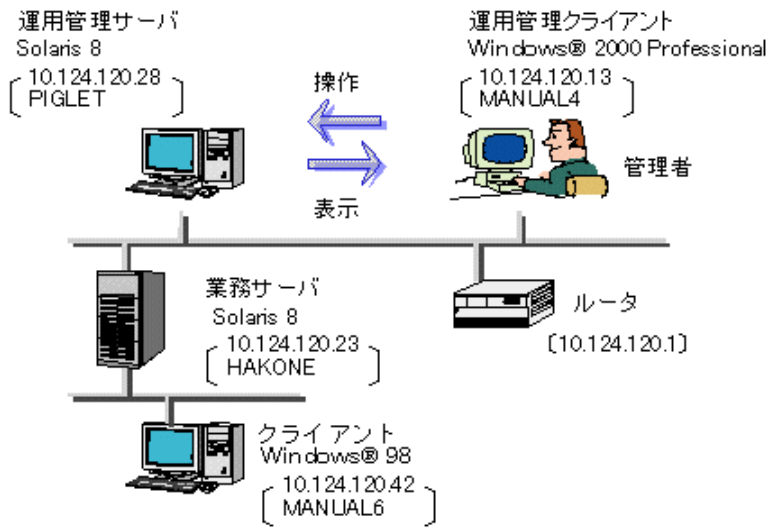
  “Systemwalker Centric Manager使用手引書 監視機能編”を参照してください。

- 障害内容の評価

  “Systemwalker Centric Manager使用手引書 監視機能編”を参照してください。

第2章　インストールを実施する

本章では、以下のコンピュータ構成を例として、Systemwalker Centric Managerをインストールする手順をインストール種別ごとに説明します。



- 運用管理サーバ
- 運用管理クライアント
- 業務サーバ
- クライアント

インストールに必要なハードウェア資源およびソフトウェア資源については、“Systemwalker Centric Manager 解説書”を参照してください。

本書では、すでにSystemWalker/CentricMGR、Systemwalker CentricMGR、およびSystemwalker Centric Managerがインストールされている場合や、アンインストールする手順については説明していません。これらの場合については、各製品の導入手引書を参照してください。

2.1 インストール前の作業
2.2 運用管理サーバのインストール
2.3 運用管理クライアントのインストール

2.4 業務サーバのインストール
2.5 クライアントのインストール
2.6 インストール後の作業

2.1 インストール前の作業

Systemwalker Centric Managerをインストールする前に必要な以下の作業について説明します。

- 2.1.1 データベース領域を見積もる(運用管理サーバ)
- 2.1.2 データベースパーティションを作成する(運用管理サーバ)
- 2.1.3 システムパラメタをチューニングする(運用管理サーバ)
- 2.1.4 管理アカウントを作成する(運用管理サーバ、業務サーバ)
- 2.1.5 SNMPエージェントをインストールする(業務サーバ、クライアント)
- 2.1.6 WWWサーバ製品をインストールする(運用管理サーバ)
- 2.1.7 LANGを設定する(運用管理サーバ)

2.1.1 データベース領域を見積もる

データベース領域のサイズは、およそ管理対象とする機器の数と管理対象とする情報数に依存します。

Systemwalker Centric Managerでは、運用管理サーバ上にフレームワークのデータベースを作成する場合、以下の3つのモデルからデータベースの規模を選択することができます。

- 300ノードモデル
- 1000ノードモデル
- 3000ノードモデル

それぞれのモデルで必要となるデータベース領域の見積もりを以下に示します。

3000ノードモデルより大規模なシステムの場合やデータベース領域をより厳密に見積もりたい場合、および利用する機能により必要なデータベース領域は、“Systemwalker Centric Manager 導入手引書”を参照してください。

モデル別ディスク容量

[すべての領域にローデバイスを作成する場合]

データベース領域	見積もりサイズ(MB)		
	300ノード	1,000ノード	3,000ノード
RDB管理情報パーティション	150	150	150
RDBディクショナリ用パーティション	100	100	100
RDBログファイル用パーティション	150	150	150
データベーススペース用パーティション	147	315	829
合　　計	547	715	1229

［RDBログファイル用の領域にレギュラーファイルを指定する場合］

データベース領域	見積もりサイズ(MB)		
	300ノード	1,000ノード	3,000ノード
RDB管理情報パーティション	300	300	300
RDBディクショナリ用パーティション	100	100	100
データベーススペース用パーティション	147	315	829
合　　計	547	715	1229

［RDB管理情報用の領域およびRDBログファイル用の領域にレギュラーファイルを指定する場合］

データベース領域	見積もりサイズ(MB)		
	300ノード	1,000ノード	3,000ノード
RDBディクショナリ用パーティション	100	100	100
データベーススペース用パーティション	147	315	829
合　　計（注）	547	715	1229

注:　専用パーティションとして必要なのは上記の2つのパーティションだけですが、RDB管理情報用としてユーザが指定した任意のディレクトリに300Mbyte(RDB管理情報用＋RDBログファイル用)の空き容量が必要になります。

データベーススペース用パーティションの容量は、リポジトリ領域、オブジェクトログ領域、監視メッセージログ領域、監視イベントログ領域の容量の合計です。それぞれの領域の見積もりを以下に示します。

データベーススペースのモデル別見積もり

データベース領域		見積もりサイズ(MB)		
		300ノード	1,000ノード	3,000ノード
リポジトリ領域		63	140	360
ログ領域	オブジェクトログ	35	35	35
	監視メッセージログ	35 平均保持件数： 20,000件	98 平均保持件数： 60,000件	308 平均保持件数： 180,000件
	監視イベントログ	14 平均保持件数： 5,000件	42 平均保持件数： 15,000件	126 平均保持件数： 45,000件
合　　計		147	315	829

オブジェクトログ、監視メッセージログおよび監視イベントログはサイクリックに利用され、すべての領域を使用すると古いものから順に上書きされます。

2.1.2 データベースパーティションを作成する

Systemwalker Centric Managerを運用するためには、運用管理サーバに以下の4つのデータベースパーティションが必要です。

- RDB管理情報専用パーティション
- RDBディクショナリ用パーティション
- RDBログファイル用パーティション
- データベーススペース用パーティション

基本的には、上記の4パーティションを使用しますが、どうしてもパーティションが足りない場合は、RDB管理情報専用パーティションおよびRDBログファイル用パーティションをレギュラーファイルとして作成することにより、パーティションを削減することができます。また利用する機能によって別途パーティションが必要になります。詳細については、“Systemwalker Centric Manager導入手引書”を参照してください。

本書ではRDBログファイル用パーティションをレギュラーファイルとして作成する場合の例を記載しています。この場合、運用管理サーバに以下のデータベース領域が必要になります。

- RDB管理情報専用パーティション
- RDBディクショナリ用パーティション
- データベーススペース用パーティション

作成方法については、“A.1 データベースパーティション作成例”を参考にしてください。

パーティションの作成について

パーティションはシステムにより異なるため、付録例をそのまま使用するとシステムを破壊してしまうことがあります

2.1.3 システムパラメタをチューニングする

インストール種別が運用管理サーバ、部門管理サーバ、業務サーバ、またはヘルプデスクサーバの場合は、システムパラメタのチューニングが必要です。

ここでは、運用管理サーバと部門管理サーバ/業務サーバのチューニングが必要なシステムパラメタとその値について示します。その他のインストール種別のチューニングが必要なシステムパラメタとその値については、“Systemwalker Centric Manager導入手引書”を参照してください。

運用管理サーバのシステムパラメタのチューニング

運用管理サーバのチューニングが必要なシステムパラメタとその値については、以下の表を参照してください。運用管理サーバとヘルプデスクサーバを

兼用する場合も以下の表を参照してください。
パラメタにより、既に設定されている値(設定されていなければSolaris OEのデフォルト値)に加算する場合と、既に設定されている値と比較し大きい方の値を設定する場合があります。(加算の場合、設定のシステム上限値も確認してください。)各パラメタがどちらにあたるかは、表の“種別”を参照してください。詳細はSolaris OEのマニュアル等を参照してください。

表:システムパラメタのチューニング値(運用管理サーバ)

［共有メモリ］

パラメタ	説明	値	種別
shmsys:shminfo_shmmax	共有メモリセグメントの最大サイズ	620756992	最大
shmsys:shminfo_shmmni	システム全体で作成できる共有メモリセグメントの最大数	512	加算
shmsys:shminfo_shmseg	プロセスごとのセグメント数（注1)	512	最大

［メッセージキュー］

パラメタ	説明	値	種別
msgsys:msginfo_msgmap	message マップ内のエントリ数(注2)	式1	加算
msgsys:msginfo_msgmax	メッセージの最大サイズ	16384	最大
msgsys:msginfo_msgmnb	待ち行列上の最大byte数	32768	最大
msgsys:msginfo_msgmni	メッセージ待ち識別子の数	1024	加算
msgsys:msginfo_msgtql	メッセージのヘッダ数（注3)	式2	加算
msgsys:msginfo_msgseg	メッセージセグメント数（注4)	32767	加算

［セマフォ］

パラメタ	説明	値	種別
semsys:seminfo_semmap	セマフォマップ内のエントリ数(注4)	2050	加算
semsys:seminfo_semmni	セマフォ識別子の数	2048	加算
semsys:seminfo_semmns	システム内のセマフォ数	2048	加算
semsys:seminfo_semmnu	システム内のundo構造体の数	2048	加算
semsys:seminfo_semmsl	セマフォ識別子ごとの最大セマフォ数	256	最大
semsys:seminfo_semopm	セマフォコールごとの最大操作数	100	最大
semsys:seminfo_semume	プロセスごとの最大undoエントリ数	2048	最大

［入出力］

パラメタ	説明	値	種別
rlim_fd_max	ファイル記述子数限度	1024	最大
rlim_fd_cur	ファイル記述子数	1024	最大

注1) Solaris 9 OE以降では設定不要です。

注2) Solaris 8 OE以降では設定不要です。式1の詳細は、以下のとおりです。

式1＝msgtqlのチューニング値+2

注3) 式2の詳細は、以下のとおりです。

式2＝資源配付の通信宛先数＋20＋msgmnbのチューニング値/100

注4) Solaris 8 OE以降では設定不要です。

システムパラメタを編集するには、/etc/systemファイルにチューニングのためのレコードを以下のように追加します。

なお，表にあるパラメタが既に設定されている場合、Solaris OEの各バージョンのマニュアルを参照し、チューニングを行ってください。

［システムパラメタの編集例(運用管理サーバ)］

Solaris 8 OE上に運用管理サーバのみを導入し、資源配付の通信宛先数が128の場合

```
set shmsys:shminfo_shmmax = 620756992
set shmsys:shminfo_shmmni = 612
set shmsys:shminfo_shmseg = 512

set msgsys:msginfo_msgmax = 16384
set msgsys:msginfo_msgmnb = 31468
set msgsys:msginfo_msgmni = 1074
set msgsys:msginfo_msgtql = 516

set semsys:seminfo_semmni = 2058
set semsys:seminfo_semmns = 2108
set semsys:seminfo_semmnu = 2078
set semsys:seminfo_semmsl = 256
set semsys:seminfo_semopm = 100
set semsys:seminfo_semume = 2048

set rlim_fd_max = 1024
set rlim_fd_cur = 1024
```

システムパラメタを変更した後は、システムの再起動が必要です。再起動のコマンドを以下に示します。

```
# cd /
# /usr/sbin/shutdown -y -i6 -g0
```

部門管理サーバ/業務サーバのシステムパラメタのチューニング

部門管理サーバ/業務サーバのチューニングが必要なシステムパラメタとその値については、以下の表を参照してください。

パラメタにより、既に設定されている値(設定されていなければSolaris OEのデフォルト値)に加算する場合と、既に設定されている値と比較し大きい方の値を設定する場合があります。(加算の場合、設定のシステム上限値も確認してください。)各パラメタがどちらにあたるかは、表の“種別”を参照してください。詳細はSolaris OEのマニュアル等を参照してください。

表:システムパラメタのチューニング値(部門管理サーバ/業務サーバ)

[共有メモリ]

パラメタ	説明	値	種別
shmsys:shminfo_shmmax	共有メモリセグメントの最大サイズ	42240(SE版) 81921(EE版)	最大
shmsys:shminfo_shmmni	システム全体で作成できる共有メモリセグメントの最大数	4	加算

[メッセージキュー]

パラメタ	説明	値	種別
msgsys:msginfo_msgmap	message マップ内のエントリ数 (注1)	式1	加算
msgsys:msginfo_msgmax	メッセージの最大サイズ	4096	最大
msgsys:msginfo_msgmnb	待ち行列上の最大byte数	16384	最大
msgsys:msginfo_msgmni	メッセージ待ち識別子の数	7	加算
msgsys:msginfo_msgtql	メッセージのヘッダ数 (注2)	式2	加算
msgsys:msginfo_msgseg	メッセージセグメント数 (注3)	16385	加算

[セマフォ]

パラメタ	説明	値	種別
semsys:seminfo_semmap	セマフォマップ内のエントリ数 (注3)	10	加算
semsys:seminfo_semmni	セマフォ識別子の数	8	加算
semsys:seminfo_semmns	システム内のセマフォ数	8	加算
semsys:seminfo_semmnu	システム内のundo構造体の数	12	加算

注1) Solaris 8 OE以降では設定不要です。式1の詳細は、以下のとおりです。

式1＝msgtqlのチューニング値+2

注2) 式2の詳細は、以下のとおりです。

式2＝資源配付の通信宛先数＋20＋msgmnbのチューニング値/100

注3) Solaris 8 OE以降では設定不要です。

システムパラメタを編集するには、/etc/systemファイルにチューニングのためのレコードを以下のように追加します。

なお，表にあるパラメタが既に設定されている場合、Solaris OEの各バージョンのマニュアルを参照し、チューニングを行ってください。

[システムパラメタの編集例(部門管理サーバ/業務サーバ)]

Solaris 8 OE上に部門管理サーバ/業務サーバだけを導入し、資源配付の通信宛先数が128の場合(Systemwalker Centric Managerで使用しているパラメタであっても、Solaris OEのデフォルト値で問題のないパラメタは記述していません。)

```
set shmsys:shminfo_shmmni = 104

set msgsys:msginfo_msgmax = 4096
set msgsys:msginfo_msgmnb = 16384
set msgsys:msginfo_msgmni = 57
set msgsys:msginfo_msgtql = 352

set semsys:seminfo_semmni = 18
set semsys:seminfo_semmns = 68
set semsys:seminfo_semmnu = 42
```

システムパラメタを変更した後は、システムの再起動が必要です。再起動のコマンドを以下に示します。

```
# cd /
# /usr/sbin/shutdown -y -i6 -g0
```

2.1.4 管理アカウントを作成する

運用管理サーバ、業務サーバには、管理アカウントとして使用するユーザアカウントの作成が必要です。管理アカウントの詳細については、“Systemwalker Centric Manager 導入手引書”を参照してください。
ここでは、運用管理サーバと業務サーバに、ユーザアカウントとして“swcm”(パスワードは“unyou”)を作成します。

Solaris OEでのユーザ登録は、以下の手順で行います。

1. スーパ・ユーザ(root)でログインします。
2. コマンド“/usr/bin/admintool”でadmintool画面を起動します。
3. [ブラウザ]メニューから[ユーザ]を選択します。
4. [編集]メニューから[追加]を選択します。
5. ユーザ名やホームディレクトリなど必要最小限の項目を設定し、新規ユーザを登録します。スーパ・ユーザの権限(root権限)を与える必要はありません。

※ユーザ登録は、admintool画面からの登録以外にコマンドで登録することもできます。

2.1.5 SNMPエージェントをインストールする

監視対象ノードにSNMPエージェントをインストールする方法を説明します。また、SNMPエージェントをインストールする場合としない場合の監視内容の違いについて説明します。

SNMPエージェントのインストール方法

Solaris OEの場合

SNMPエージェントをインストールする場合、以下のパッケージをインストールします。

- SUNWsacom
- SUNWsasnm
- SUNWsadmi
- SUNWmibii

インストール時に選択したソフトウェアグループが以下のどれかの場合、OSと共にインストールされるため、別途、インストールする必要はありません。

- “エンドユーザーシステムサポート”ソフトウェアグループ
- “開発者システムサポート”ソフトウェアグループ
- “全体ディストリビューション”ソフトウェアグループ
- “全体ディストリビューションと OEM サポート”ソフトウェアグループ

使用するコマンドについて

- パッケージをインストールするときは、pkgaddコマンドを使います。
- パッケージを削除するときは、pkgrm コマンドを使います。
- パッケージがインストールされていることを確認するためには、pkginfo コマンドを使います。

その他のOSへのSNMPエージェントインストール方法については、“Systemwalker Centric Manager 導入手引書”を参照してください。

SNMPエージェントをインストールする場合としない場合の監視内容

監視対象ノードにSNMPエージェントをインストールするとしないとでは、監視内容に以下の違いがあります。

SNMPエージェントをインストールする場合

MIB情報を採取することができます。このため、“ノード検出”時にベンダー種別やOS種別を自動判別したり、MIB情報を利用した性能監視を行うことができます。また、SNMPトラップを監視することができます。

- ノード検出
  IPアドレスやホスト名に加え、ベンダー種別やOS種別、インタフェースの詳細情報等が追加されます。
- ノード状態の表示
  ノードの起動/停止の状態確認に加え、一部インタフェースの停止までの状態が確認できます。
- MIBの監視
  MIB情報を利用した監視ができます。
- 性能監視
  ネットワーク/サーバの性能監視ができます。
- SNMPトラップ監視

管理サーバに通知されるSNMPトラップを監視することができます。

SNMPエージェントをインストールしない場合

IPアドレスだけの管理となります。“ノード状態の監視”の設定を行うことにより、SNMPエージェントがインストールされていないノードの状態の変化(UP/DOWN)を監視することができます。

- ノード検出
  IPアドレスやホスト名だけが追加されます。
- ノード状態の表示
  ノードの起動/停止の状態が確認できます。

2.1.6 WWWサーバ製品をインストールする

Systemwalker Webコンソールを利用するには、WWWサーバ製品のインストールが必要です。インストール手順については、各製品のマニュアルを参照してください。

2.1.7 LANGを設定する

Systemwalker Centric Manager の出力メッセージを日本語で出力する場合、Systemwalker Centric Manager をインストールする前に、以下の作業を行ってください。

1. /etc/default/init ファイルに以下の記述があるかを確認します。

   ```
   LANG=ja (EUCの場合)
   LANG=ja_JP.PCK (SHIFT－JISの場合)
   ```

2. 上記の記述がない場合、システム管理者(スーパ・ユーザ)のアカウントで vi などのエディタを使用し、システムの動作環境に合わせて上の記述を追加してください。

/etc/default/initファイルに、LANG指定を追加することにより、Systemwalker Centric Manager以外のアプリケーションの表示に影響があることがあります。

2.2 運用管理サーバのインストール

2.2.1 インストール

運用管理サーバのインストール手順を以下に示します。

CD-ROMがローカルのファイルシステムにマウントされていない場合は、ログイン後に、ローカルのファイルシステムをマウントしてください。

1. ログインします。

   Systemwalker Centric Managerをインストールするコンピュータにログインします。インストールする時は、スーパ・ユーザでログインしてください。

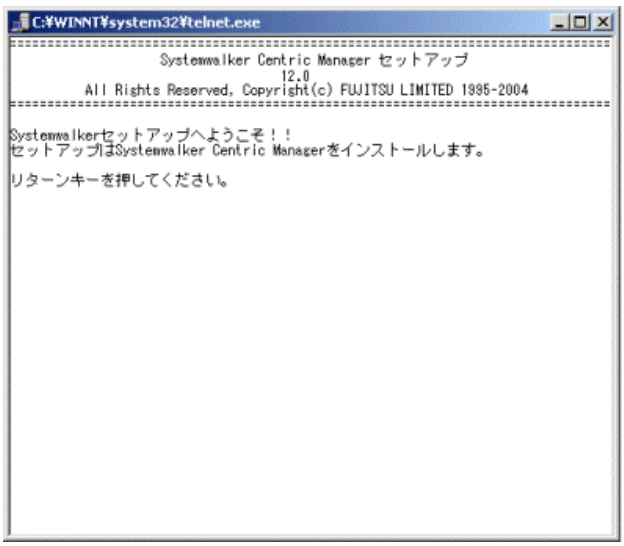
2. インストールコマンドを起動します。

   “Systemwalker Centric Manager”のCD-ROMを用意し、以下のインストールコマンドを起動します。

   — ローカルインストールで行うときは、CD-ROMから起動します。
   — ネットワークインストールで行うときは、ネットワーク接続したマウントポイントから起動します。

```
# cd CD-ROMのマウントポイント/unx32
# ./swsetup
```

   以下のメッセージが表示されます。



3. インストール種別を指定します。
   ここでは、“1”を入力します。

4. インストールするオプション機能を確認します。
   インストールするオプション機能が表示されます。ここでは、リターンキーを押します。

5. インストール先を確認します。
   インストール先ディレクトリが表示されます。ここでは、リターンキーを押します。

6. 管理アカウント名を指定します。
   Systemwalker管理アカウントとして使用するアカウント名とパスワードを指定します。既存アカウント名(スーパ・ユーザ以外)とパスワードを入力してください。
   ここでは、“2.1.4 管理アカウントを作成する”で作成したアカウント“swcm”とそのパスワード“unyou”を指定します。

7. インストール処理継続を確認します。
   インストールの開始を確認する問い合わせがあります。ここでは、“y”を入力します。

8. インストール処理が行われます。
   インストールが正常に完了すると、以下のメッセージが出力されます。
   メッセージを確認後、リターンキーを押します。

9. システムを再起動します。
   再起動のコマンドを以下に示します。

```
# cd /
# /usr/sbin/shutdown -y -i6 -g0
```

2.2.2 環境作成

運用管理サーバのインストールを行った後、運用管理サーバを動作させるための環境作成が必要です。環境作成を行うためには、システム管理者(スーパ・ユーザ)でログインする必要があります。

運用管理サーバの環境作成の手順を以下に示します。

1. 以下のコマンドにより、Systemwalker Centric Manager 12.0 運用管理サーバの環境作成を開始します。

   セットアップメニューで指定できるDBモデル以外で環境作成を行う場合は、MpFwSetupコマンドにオペランドを指定してセットアップを起動します。MpFwSetupコマンドの詳細については、“Systemwalker Centric Managerリファレンスマニュアル”を参照してください。

   ```
   # /opt/systemwalker/bin/MpFwSetup
   ```

   セットアップメニューが表示されます。ここでは、“1”(Systemwalker Centric Manager環境作成) を入力します。

   ```
   ////////////////////////////////////////////////////////////////////////////
        Systemwalker Centric Manager 12.0 運用管理サーバ     on piglet
                              セットアップメニュー
   ////////////////////////////////////////////////////////////////////////////

          1 : Systemwalker Centric Manager環境作成
          2 : Systemwalker Centric Manager環境削除
          3 : Systemwalker Centric Manager起動
          4 : Systemwalker Centric Manager停止
          5 : 保守
          q : 終了

          SELECT ==> 1
   ```

2. 環境作成を続行することを確認します。

   フレームワークのデータベースを作成する準備が完了していることを確認する問い合わせが表示されます。ここでは、“y”を入力します。

```
------------< Systemwalker Centric Manager 環境作成 >------------| 設 定 |

  +-----------------------------------------------------------------+
  |                        【   注 意   】                           |
  | ================================================================ |
  | Systemwalker Centric Manager環境を作成する前に、以下の準備が     |
  | 必要です。                                                       |
  |                                                                  |
  | - システムパラメタのチューニング                                 |
  | - DB用パーティションの作成                                       |
  |   1)  RDB管理情報専用パーティション                              |
  |   2)  RDBディクショナリ用パーティション (raw)                    |
  |   3)  RDBログファイル用パーティション (raw)                      |
  |   4)  データベーススペース用パーティション (raw)                  |
  |                                                                  |
  | ※ 上記パーティションは、DB見積もりを行った上で作成してください。|
  |    1)は、任意のディレクトリ配下に作成することが可能です。       |
  |    3)は、1)のファイルシステム上のファイルとすることが可能です。 |
  |    4)は、フレームワーク機能のリポジトリ/ログ用です。             |
  |                                                                  |
  +-----------------------------------------------------------------+
    処理を続けますか？ [y/n]  y
```

通信環境チェック結果画面について

過去に通信環境を構築していた場合には、通信環境チェック結果の確認画面が表示されます。問題がなければ“y”を入力し、処理を続けます。

3. Systemwalker Centric Managerの管理ドメイン名を設定します。

   管理ドメイン名は、以下の条件を満たす必要があります。

   — 英数字だけである。

   — 128文字以内の文字列である。

   — 空白を使用していない。

   ここでは、“FUJITSU”を入力します。

   省略した場合、管理ドメイン名にはホスト名を指定したものとみなされます。ホスト名に英数字以外の文字が含まれている場合は、省略できません。

```
[ 管理ドメイン名設定 ]

    管理ドメイン名 (Default : HostName)を入力してください。

            ENTER ==> FUJITSU
```

4. データベース用デバイスの詳細を設定します。

   以下のデータベースを作成するパーティションのデバイス名を入力します。

RDBログファイル用ローデバイス名の設定について

ここでは、RDBログファイル用パーティションをレギュラーファイルとして作成する手順を説明しています。

RDBログファイル用パーティションをローデバイスに作成する場合は、その他のパーティションの設定と同様に、プロンプト“ENTER ==> /dev/rdsk/”が表示されたところで、“c?t?d?s?”を入力します。

— RDB管理情報デバイス名

プロンプト“ENTER ==> /dev/dsk/”が表示されたところで、“c?t?d?s?”を入力します。

— RDBディクショナリ用ローデバイス名

プロンプト“ENTER ==> /dev/rdsk/”が表示されたところで、“c?t?d?s?”を入力します。

— RDBログファイル用ローデバイス名

1- プロンプト“ENTER ==> /dev/rdsk/”が表示されたところで、リターンキーを押下します。

2- その後、プロンプト“ENTER ==>”が表示されたところで、“r”を入力します。

— データベーススペース用ローデバイス名

プロンプト“ENTER ==> /dev/rdsk/”が表示されたところで、“c?t?d?s?”を入力します。

```
[ データベース用デバイス設定 ]

+-----------------------------------------------------------------+
|  通常のデバイス形式( /dev/(r)dsk/c?t?d?s? )以外のデバイスを、設定 |
|  する場合は、一度 ENTER KEY を入力してフルパスで設定してください。|
+-----------------------------------------------------------------+

    RDB管理情報デバイス名を入力してください。
            ( format : /dev/dsk/c?t?d?s? )


             ENTER ==> /dev/dsk/c0t1d0s3


    RDBディクショナリ用ローデバイス名を入力してください。
            ( format : /dev/rdsk/c?t?d?s? )

            ENTER ==> /dev/rdsk/c0t1d0s4


    RDBログファイル用ローデバイス名を入力してください。
            ( format : /dev/rdsk/c?t?d?s? )

             ENTER ==> /dev/rdsk/

            "r"と入力するとﾚｷﾞｭﾗｰﾌｧｲﾙ"/SWFWDB/swlog"の指定となります。
            ENTER ==> r


    データベーススペース用ローデバイス名を入力してください。
            ( format : /dev/rdsk/c?t?d?s? )

             ENTER ==> /dev/rdsk/c0t1d0s5
```

5. データベースの大きさを設定します。

   作成するデータベースのサイズを入力する。データベースの大きさについては、“Systemwalker Centric Manager導入手引書”を参照してください。ここでは、“1”を入力します。

```
 [ データベースサイズ設定 ]

     1 : 簡易設定 ( 300ノードモデル)
     2 : 簡易設定 (1000ノードモデル)
     3 : 簡易設定 (3000ノードモデル)
     4 : 直接設定
     r : 前画面に戻る
     q : 終了

     SELECT ==> 1
```

6. 設定情報を確認します。
   設定画面で入力した情報を確認し、“y”を入力します。

```
-------------< Systemwalker Centric Manager 環境作成 >-------------| 確 認 |


 [ 管理ドメイン名 ]                 :  FUJITSU

 [ データベース用デバイス(専用) ]
    RDB管理情報用                  :  /dev/dsk/c0t1d0s3
    RDBディクショナリ用 (raw)      :  /dev/rdsk/c0t1d0s4
    RDBﾛｸﾞﾌｧｲﾙ用 (raw/ﾚｷﾞｭﾗｰﾌｧｲﾙ) :  /SWFWDB/swlog
    データベーススペース用 (raw)   :  /dev/rdsk/c0t1d0s5

 [ データベースサイズ設定 ]         :  簡易設定(300ノードモデル)
 +-----------------------------------------------------------------+
 |    処理を開始すると、Systemwalker Centric ManagerのDB環境および   |
 |    通信環境を作成しシステム情報の書き換えも行います。             |
 |     実行可能な環境にあることを充分確認して続行してください。      |
 +-----------------------------------------------------------------+

    環境作成処理を開始しますか? [ y:開始 n:中止 r:修正 ]

    SELECT ==> y
```

7. 環境が作成されます。正常に終了すると以下のメッセージが表示されます。リターンキーを押します。

```
Systemwalker Centric Manager環境作成は正常終了しました。

処理が完了しました。ENTER キーで初期メニューに戻ります。
```

8. 初期メニューが表示されます。
   “q”を入力します。

```
------------------------< 初期メニュー >-------------------------| 選 択 |

     1 : Systemwalker Centric Manager環境作成
     2 : Systemwalker Centric Manager環境削除
     3 : Systemwalker Centric Manager起動
     4 : Systemwalker Centric Manager停止
     5 : 保守
     q : 終了

     SELECT ==>q
```

2.3 運用管理クライアントのインストール

運用管理クライアントのインストール時には、インストールする機能を選択してインストールすることができます。

インストールできる機能とその概要については、“Systemwalker Centric Manager導入手引書” を参照してください。

Autorunによるインストール

Systemwalker Centric ManagerのCD-ROMをCD-ROMドライブに挿入すると、インストールコマンドを実行しなくてもAutorunによりインストール画面が表示されます。

FATファイルシステムでフォーマットされているドライブにインストールする場合

FATファイルシステムのドライブにインストールする場合、FATファイルシステムの特性によりNTFSファイルシステムでフォーマットされているドライブより多くのディスク容量が必要となります。このため選択したドライブによって必要なディスク容量が異なるので注意してください。

1. ログオンします。

   Systemwalker Centric Managerをインストールするコンピュータにログオンします。

   Windows® 2000、またはWindows® XPにインストールする場合は、以下のどちらかでログオンしてください。

   — ローカルログオンでインストールする場合

   ローカルグループのAdministratorsグループに所属するユーザ名で、ログオンしてインストールします。

   — ドメインログオンでインストールする場合

   以下の条件をともに満たしているユーザ名でログオンしてインストールします。属性を変更した場合は、再度ログオンし直す必要があります。

   - ローカルグループのAdministratorsグループに所属している
   - ユーザの権利として、“オペレーティングシステムの一部として機能”が与えられている

2. インストールコマンドを起動します。

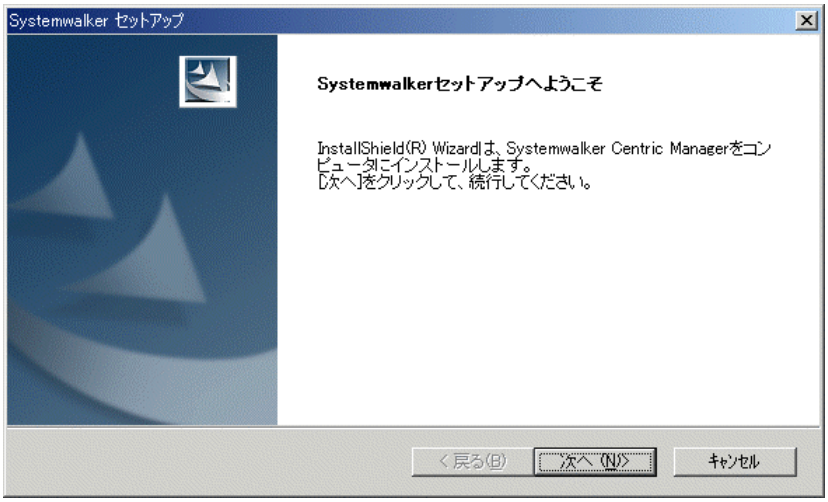
   a) ローカルインストールで行うときは、CD-ROMから、ネットワークインストールで行うときは、ネットワーク接続したドライブから起動します。

インストールコマンドを以下に示します。

```
CD-ROMまたはネットワーク接続したドライブ
¥swsetup.exe
```

b) 以下の画面が表示されたら、“インストール”をクリックします。

3. 以下の画面が表示されます。[次へ]ボタンをクリックします。

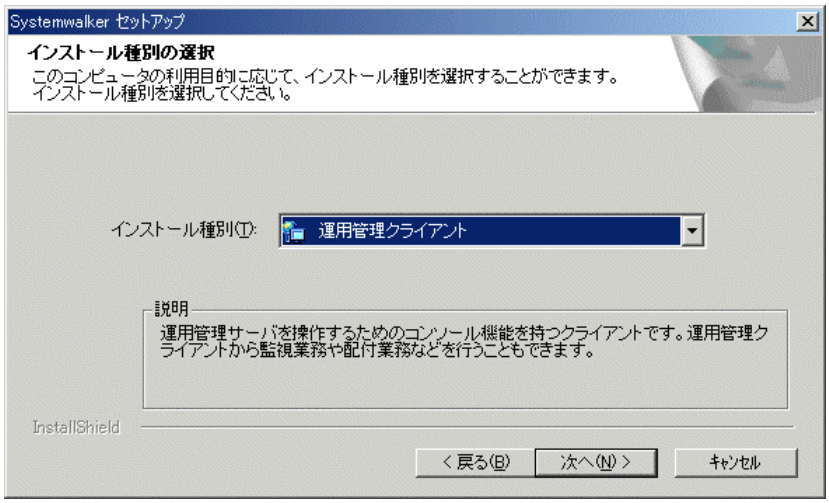


4. インストール種別を選択します。

以下の画面で、インストール種別を選択し、[次へ]ボタンをクリックします。アップグレードインストールの場合には、すでにインストール済みの種別が表示され、種別を変更することはできません。

ここでは、以下のように指定します。

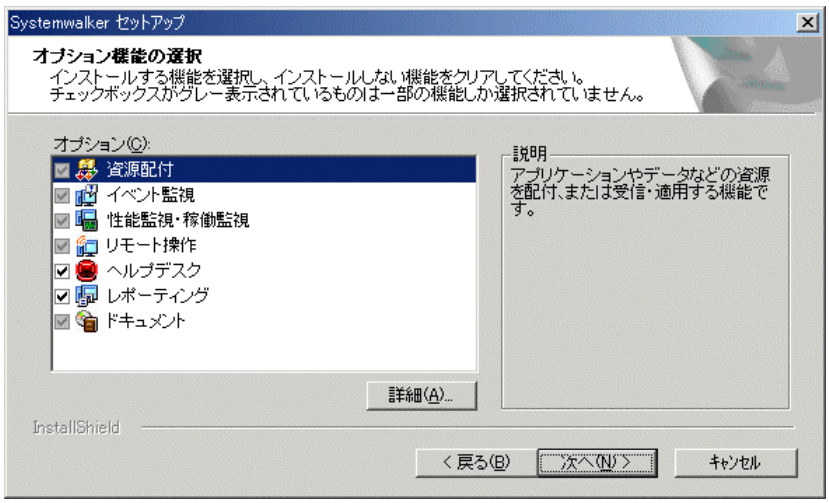
― ［インストール種別］：［運用管理クライアント］



5. 以下の画面でインストールする機能を選択します。

   ここでは、“資源配付”、“イベント監視”、“性能監視・稼働監視”について、詳細機能を選択します。

   アップグレードインストールの場合は、すでにインストール済みの機能がチェック状態で表示され、チェックを外すことはできません。



   a) “オプション機能の選択”の画面でインストールする機能を選択し、［詳細］ボタンをクリックします。

      ここでは、以下のように選択します。

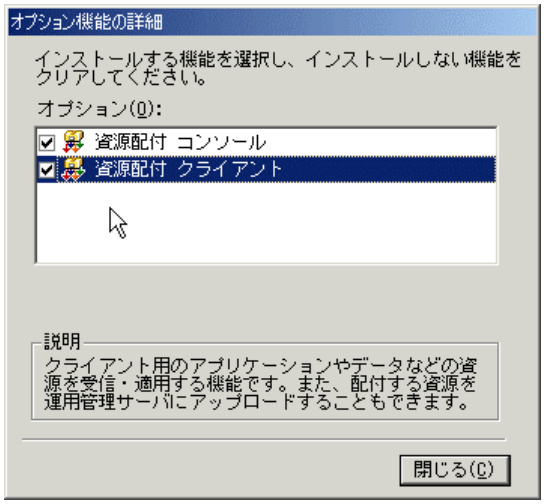
      - ［オプション］：［資源配付］

   b) ［オプション機能の詳細］画面でインストールする機能の詳細を選択し、［閉じる］ボタンをクリックします。

      ここでは、以下のように選択します。

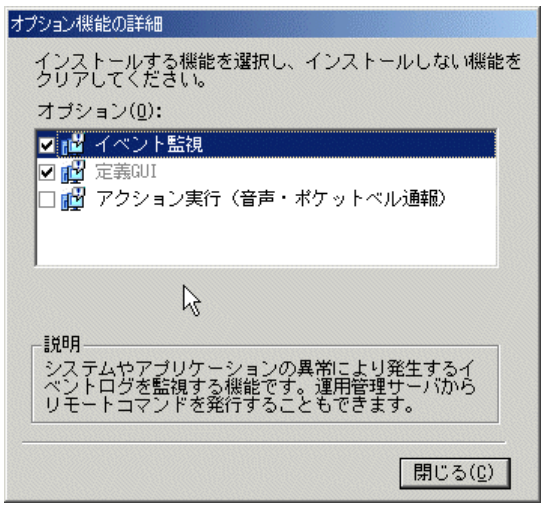
      - ［オプション］：［資源配付コンソール］、［資源配付クライ

アント]



c) “オプション機能の選択”の画面でインストールする機能を選択し、[詳細]ボタンをクリックします。
ここでは、以下のように選択します。
- [オプション]:[イベント監視]

d) [オプション機能の詳細]画面でインストールする機能の詳細を選択し、[閉じる]ボタンをクリックします。
ここでは、以下のように選択します。
- [オプション]:[イベント監視]
- そのほかの項目：初期値

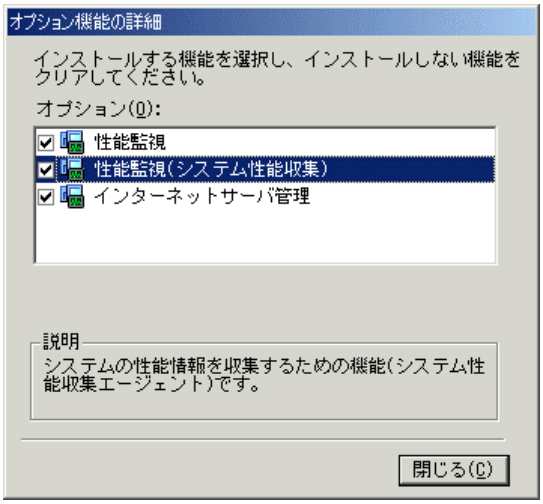


e) “オプション機能の選択”の画面でインストールする機能を選択し、[詳細]ボタンをクリックします。
ここでは、以下のように選択します。

- ［オプション］:［性能監視・稼働監視］

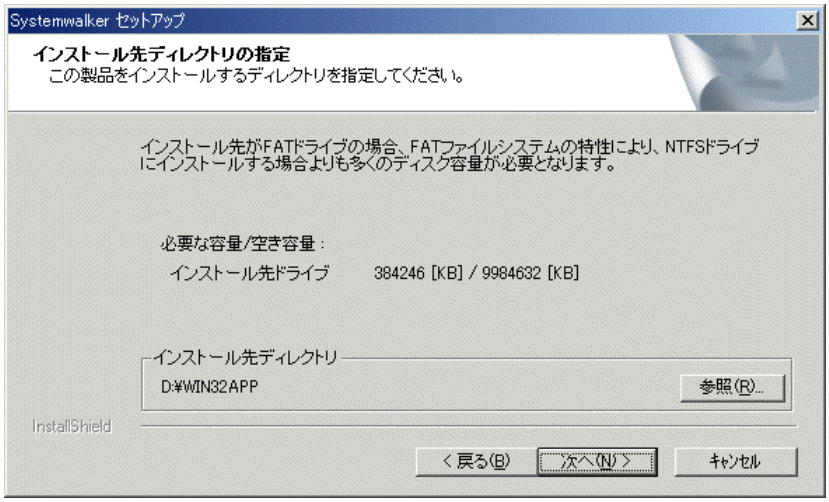
f) ［オプション機能の詳細］画面でインストールする機能の詳細を選択し、［閉じる］ボタンをクリックします。
ここでは、以下のように指定します。

- ［オプション］:［性能監視］、［性能監視(システム性能収集)］
- そのほかの項目：初期値



g) “オプション機能の選択”の画面で、［次へ］ボタンをクリックします。

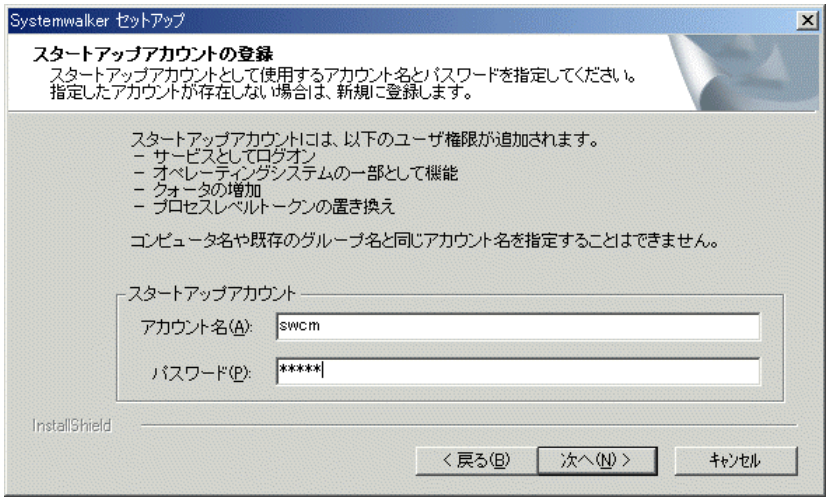
6. インストール先を指定します。
以下の画面でインストール先ディレクトリを確認し、［次へ］ボタンをクリックします。必要な容量が空き容量よりも大きい場合は、インストール先を変更してください。



7. サービスのスタートアップアカウントを指定します。

以下の画面で、Systemwalker Centric Managerのサービスプログラムを起動する時の[アカウント名]と[パスワード]を指定し、[次へ]ボタンをクリックします。
ここでは、以下のように指定します。

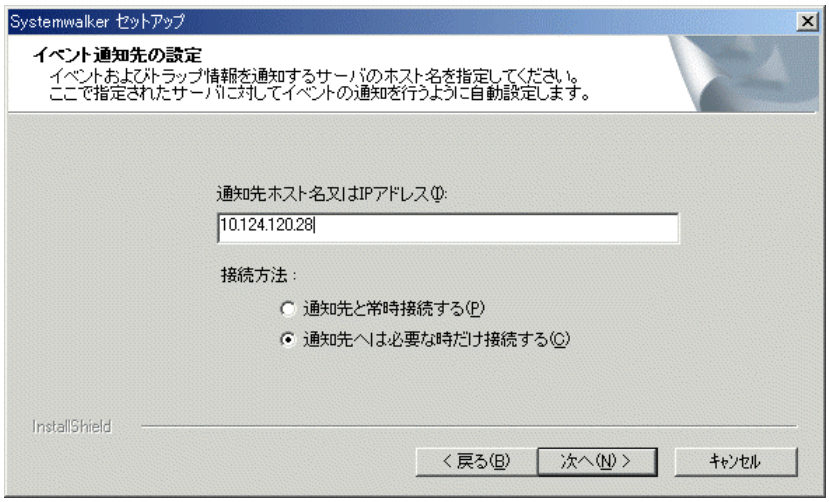
— [アカウント名]：“swcm”
— [パスワード]：“unyou”



新規にアカウント名を登録する場合は、[スタートアップアカウントの登録]画面が表示されます。パスワードを再度入力します。

8. イベント通知先を設定します。
以下の画面でイベントの通知先と、通知先への接続方法を指定し、[次へ]ボタンをクリックします。
ここでは、以下のように指定します。
通知先は、“10.124.120.28”の運用管理サーバです。

— [通知先ホスト名またはIPアドレス]：“10.124.120.28”
— [接続方法]：[通知先へは必要な時だけ接続する]

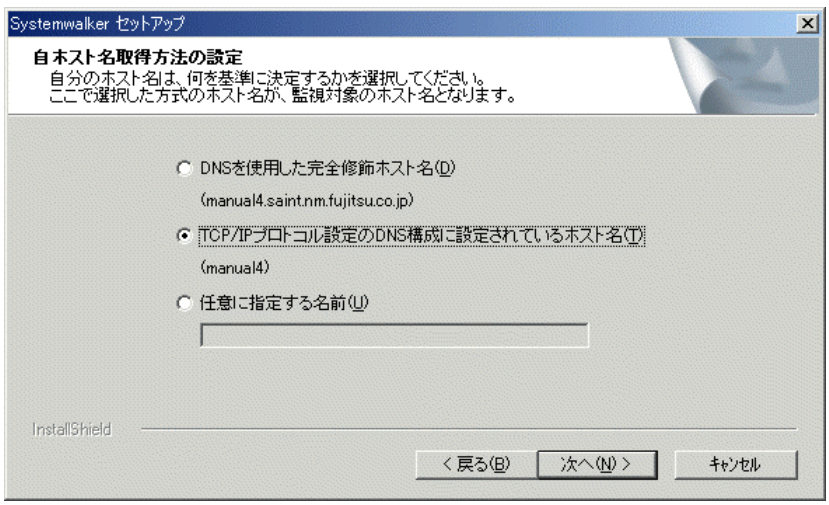


9. 以下の画面で、自分のホスト名を何を基準に決定するか選択し、[次へ]ボタンをクリックします。

   上位のシステムは、ここで選択したホスト名を監視対象のホスト名として認識します。

   ここでは、以下のように指定します。

   ― [TCP/IPプロトコル設定のDNS構成に設定されているホスト名]

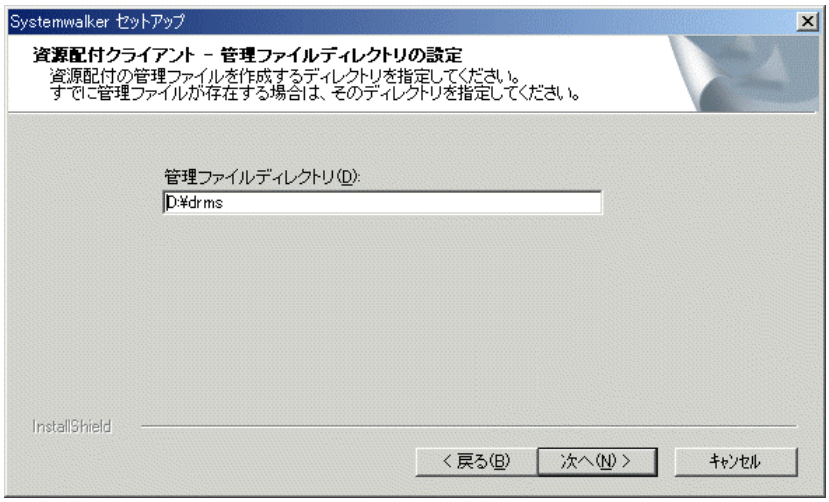


10. 資源配付クライアントの設定を行います。

    以下の画面で、資源配付クライアントの管理ファイルディレクトリ名（DRMS管理ファイル格納ディレクトリ）を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

    ここでは、以下のように指定します。

    ― [管理ファイルディレクトリ]："D:¥drms"



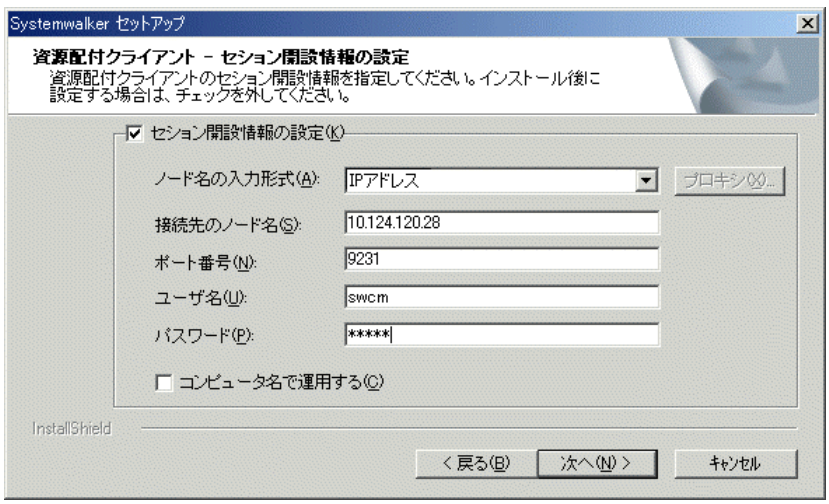
11. 資源配付のセッション開設のための情報を指定します。

以下のの画面で、資源配付のサーバへ接続する時に必要な情報を指定し、[次へ]ボタンをクリックします。

ここでは、以下のように指定します。

接続先は、“10.124.120.28”の運用管理サーバです。

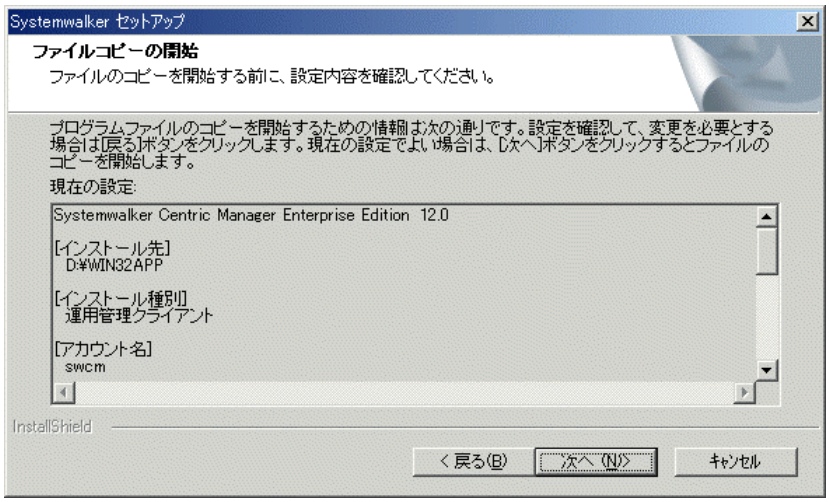
- ［ノード名の入力形式］:［IPアドレス］
- [接続先のノード名]:“10.124.120.28”
- ［ポート番号］:初期値
- [ユーザ名］:“swcm”
- ［パスワード］:“unyou”



12. セットアップ情報を確認します。

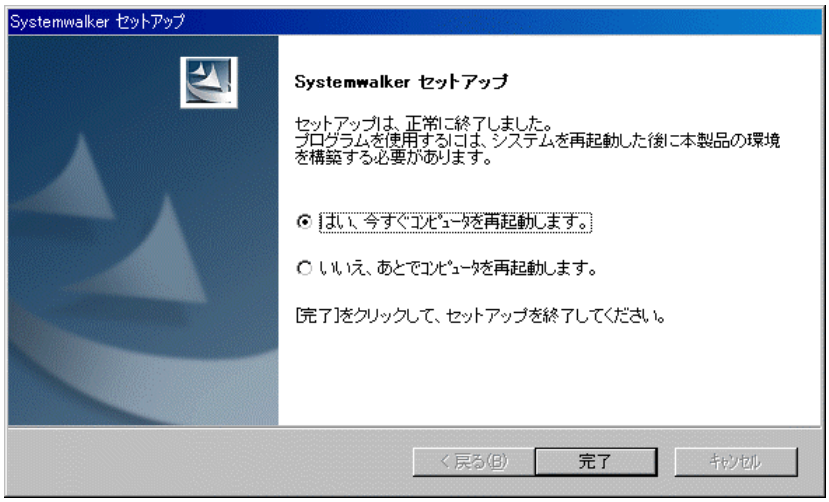
以下の画面で、設定内容を確認します。[次へ]ボタンをクリックします。

インストールを開始します。



13. システムを再起動します。

以下の画面で、コンピュータを今すぐ再起動するかどうかを選択し、[完了]ボタンをクリックします。



注意 **“通知先へは必要な時だけ接続する”（必要時接続）を選択した場合の注意事項**

業務サーバまたは“イベント監視”機能をインストールしたクライアントの導入時に運用管理サーバが未起動であった場合やイベント通知先のシステムとの通信が不可能であった場合、運用管理サーバから被監視システムに対してリモートコマンドが投入できない場合があります。このような場合、以下のコマンドを被監視システムから実行し、運用管理サーバと被監視システムの間の通信経路を確立させてください。

```
opaconstat -a
```

opaconstatコマンドの詳細については、“Systemwalker Centric

Manager リファレンスマニュアル”を参照してください。

ポイント スタートアップアカウントとは

システムの各種サービスプログラムを起動する時に使用されるアカウントを、スタートアップアカウントといいます。

システムに登録されていないアカウント名を入力した場合は、新規アカウントとしてシステムに新しく登録します。このとき、新規に登録するアカウントに対して、自動的に無期限パスワードを設定し、ローカルコンピュータのAdministratorsグループに所属させます。また、以下のユーザの権利を自動的に設定します。

- サービスとしてログオン
- オペレーティングシステムの一部として機能
- クォータの増加
- プロセスレベルトークンの置き換え

2.4 業務サーバのインストール

CD-ROMがローカルのファイルシステムにマウントされていない場合は、ログイン後に、ローカルのファイルシステムをマウントしてください。

1. ログインします。

   Systemwalker Centric Managerをインストールするコンピュータにログインします。インストールする時は、スーパ・ユーザでログインしてください。

2. インストールコマンドを起動します。

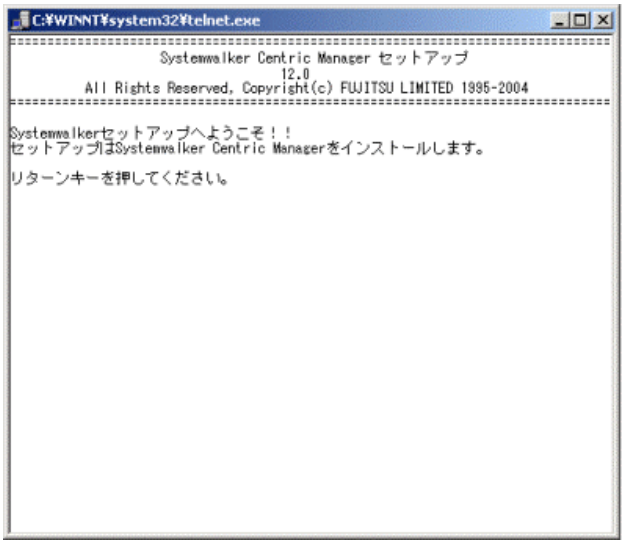
   “Systemwalker Centric Manager”のCD-ROMを用意し、以下のインストールコマンドを起動します。

   — ローカルインストールで行うときは、CD-ROMから起動します。

   — ネットワークインストールで行うときは、ネットワーク接続したマウントポイントから起動します。

```
# cd CD-ROMのマウントポイント/unx32
# ./swsetup
```

以下のメッセージが表示されます。



3. インストール種別を選択します。
   インストール種別の問い合わせが表示されます。ここでは、業務サーバをインストールするため“3”を入力します。

4. インストールするオプション機能を確認します。
   インストールするオプション機能が表示されます。ここでは、リターンキーを押します。

5. 以下のメッセージが表示されます。ここでは、リターンを押します。

6. インストール先を確認します。

   インストール先ディレクトリが表示されます。ここでは、リターンキーを押します。

7. イベント通知先を確認します。

   a) イベント通知先を確認します。

      システムで発生したイベントを通知するための初期状態の設定情報が表示されます。以下の設定情報を変更する場合は、“y”を入力するか、リターンキーを押します。変更しない場合は、“n”を入力します。

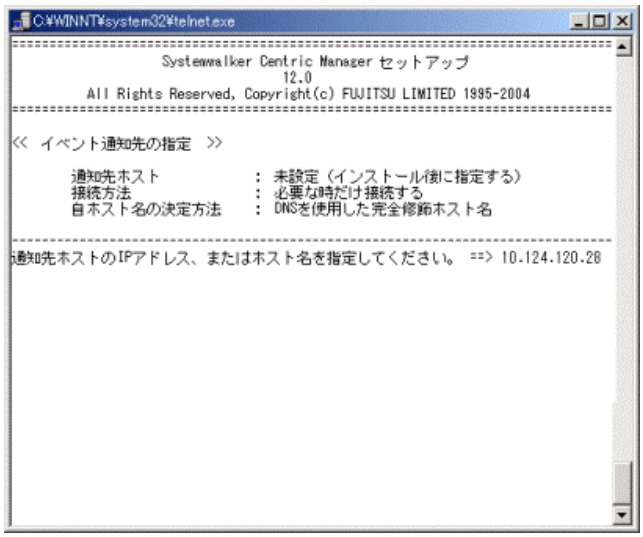
      ここでは、リターンキーを押します。

b) メッセージ送信先システムを設定します。

メッセージ送信先システムのホスト名またはIPアドレスを指定してください。IPアドレスは、DNSなどのネームサーバまたはhostsファイルに定義されている必要があります。

メッセージ送信先システムは、インストール後に変更することもできます。

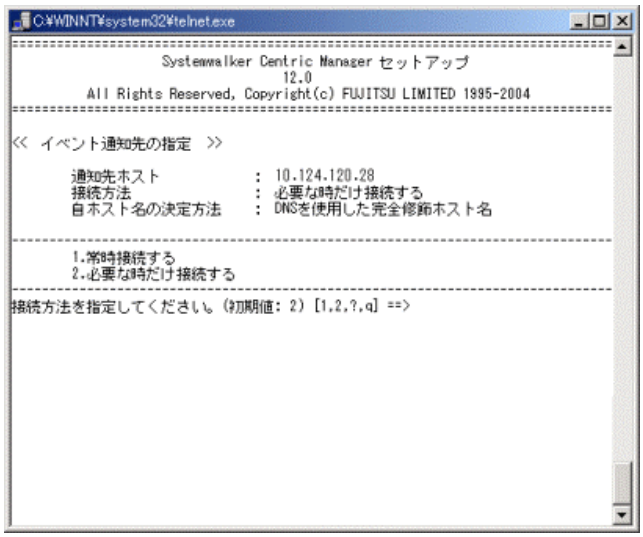
ここでは、“10.124.120.28”(運用管理サーバのIPアドレス)を指定します。



c) 接続方法を指定します。

常時接続(Full－time)または必要時接続(On－Demand)を指定します。通常、Systemwalker Centric Managerでは必要時接続を指定します。

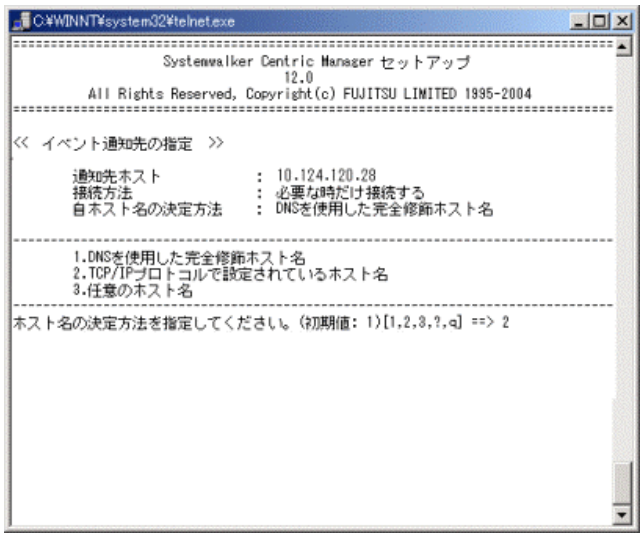
ここでは、リターンキーを押します。



d) 自ホスト名の決定方法を指定します。

自ホスト名として何を使用するかを指定します。

ここでは、“2”を指定します。



e) イベント通知先を再確認します。

確認のメッセージに対して、再度変更する場合には、“y”を入力します。再度変更しない場合は、“n”を入力するか、またはリターンキーを押します。

ここでは、リターンキーを押します。

8. 管理アカウント名を指定します。

   Systemwalker管理アカウントとして使用するアカウント名とパスワードを指定します。既存アカウント名(スーパ・ユーザ以外)とパスワードを入力してください。

   ここでは、“2.1.4 管理アカウントを作成する”で作成したアカウント“swcm”と、パスワード“unyou”を指定します。

9. インストール処理継続を確認します。

   インストールを継続する場合は、“y”を入力します。インストールを中止する場合は、“n”を入力します。

   ここでは、“y”を入力します。

10. インストール処理が行われます。
    インストールが正常に完了すると、以下のメッセージが出力されます。

    リターンキーを押します。

11. システムを再起動します。
    再起動のコマンドを以下に示します。

```
# cd /
# /usr/sbin/shutdown －y －i6 －g0
```

旧バージョンがインストールされている場合

業務サーバでは、旧バージョンがインストールされている場合、インストール時に移行処理が自動的に行われます。詳細については、

“Systemwalker Centric Manager 導入手引書”を参照してください。

2.5 クライアントのインストール

クライアントをWindows® 98にインストールする手順を説明します。そのほかのOSにインストールする手順については、“Systemwalker Centric Manager 導入手引書”を参照してください。

クライアントのインストール時には、インストールする機能選択してインストールすることができます。

インストールできる機能については、“Systemwalker Centric Manager 導入手引書”を参照してください。また、インストールの手順は、運用管理クライアントのインストールとほぼ同じです。図は省略しているところがありますので、必要に応じて“2.3 運用管理クライアントのインストール”を参照してください。

1. Windows® 98にログオンします。
2. インストールを開始します。

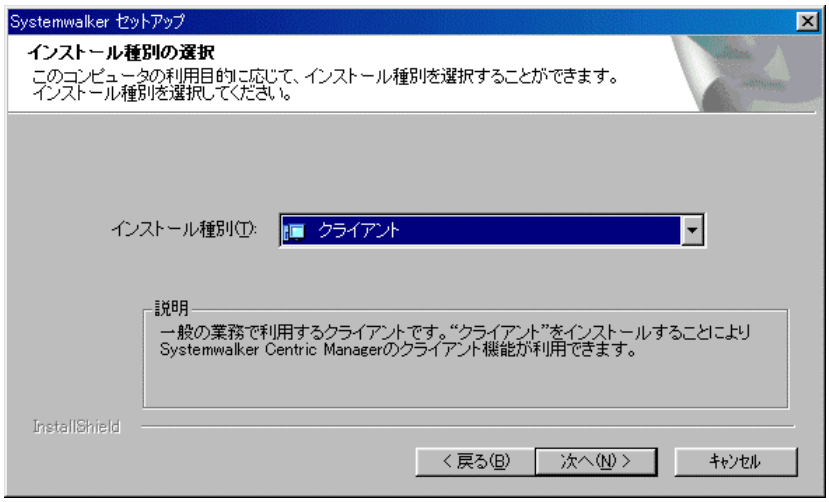
   Systemwalker Centric ManagerのCD-ROMを装置にセットすると、インストールプログラムが自動的に起動されます。セットアップ画面で“インストール”を選択し、“Systemwalkerセットアップへようこそ”の画面が表示されたら、[次へ]ボタンをクリックします。
3. インストール種別とオプションを選択します。

   a) 以下の画面で、インストールする種別を選択し、[次へ]ボタンをクリックします。

   インストール種別とインストールされる機能については、“Systemwalker Centric Manager導入手引書”を参照してください。

   ここでは、以下のように指定します。

   - [インストール種別]:[クライアント]

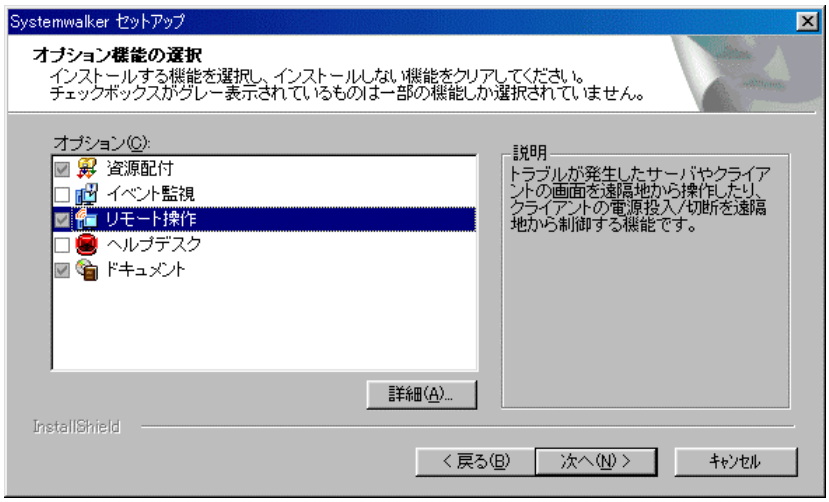


   b) 以下の画面でインストールする機能を選択し、[詳細]ボタンをクリックします。

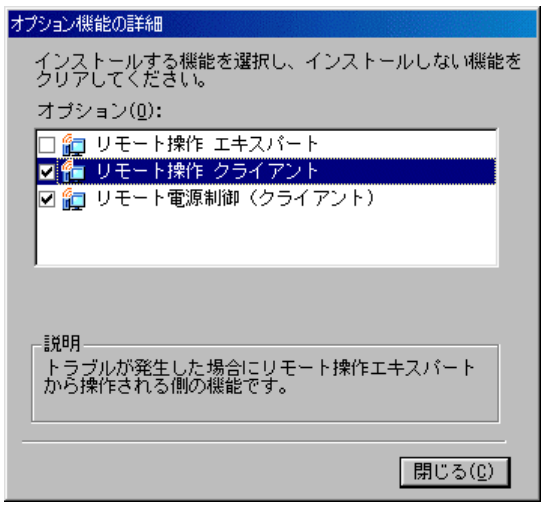
   ここでは、以下のように指定します。

   - [オプション]:[リモート操作]

- そのほかの項目：初期値
  なお、Windows® 98の場合は、性能監視・稼働監視は、インストールすることができません。そのため画面にも表示されません。



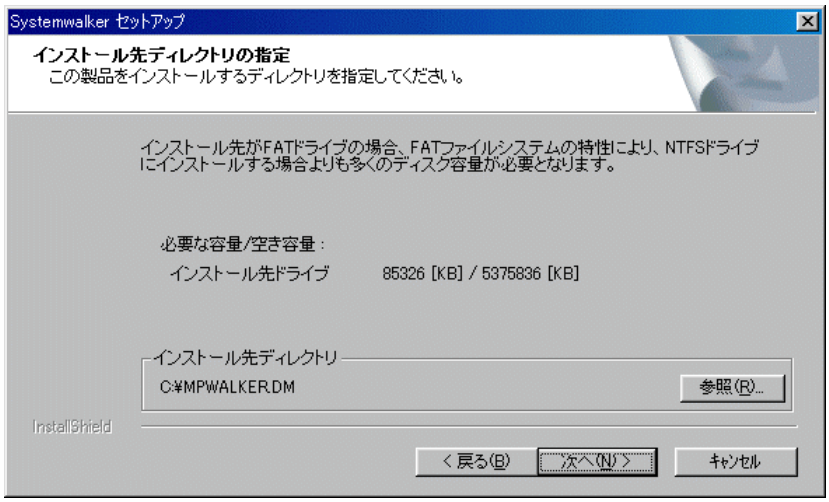
c) 以下の画面でインストールする機能の詳細を選択し、[閉じる]ボタンをクリックします。
ここでは、以下のように指定します。
- [オプション]：[リモート操作クライアント]
- そのほかの項目：初期値



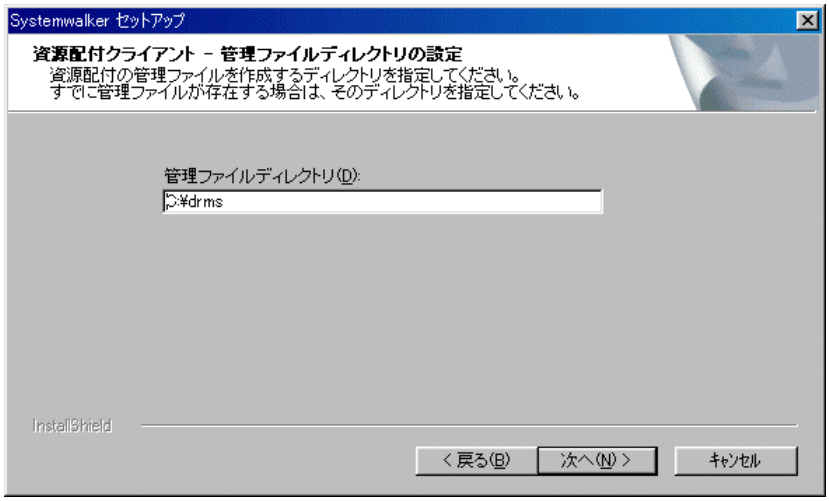
d) “オプション機能の選択”の画面で、[次へ]ボタンをクリックします。

4. インストール先を指定します。
“インストール先ディレクトリの指定”の画面でインストール先を確認し、[次へ]ボタンをクリックします。必要な容量が空き容量よりも大

きい場合は、インストール先を変更してください。

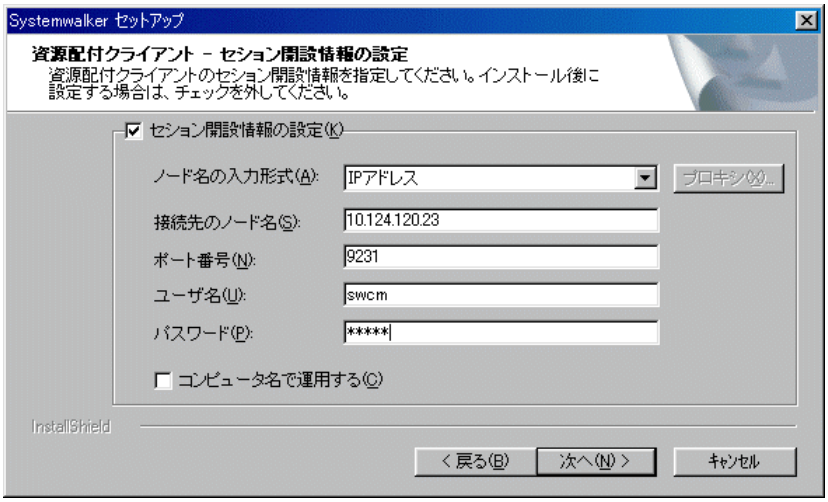


5. サービスのスタートアップアカウントを指定します。(Windows® 2000またはWindows® XPにインストールする場合)
6. 資源配付クライアントの管理ファイルのパスを指定します。
   以下の画面で、管理ファイルのディレクトリのパスを指定します。
   ここでは、以下のように指定します。
   — ［管理ファイルディレクトリ］：初期値（C:¥drms）



7. 資源配付のセッション開設のための情報を指定します。
   以下の画面で、資源配付のサーバへ接続する時に必要な情報を指定し、[次へ]ボタンをクリックします。
   ここでは以下のように指定します。
   接続先は、“10.124.120.23”の業務サーバです。
   — ［ノード名の入力形式］：［IPアドレス］
   — [接続先のノード名]：“10.124.120.23”
   — ［ポート番号］：初期値

— [ユーザ名]：“swcm”
— ［パスワード］：“unyou”



8. ファイルコピー前の確認をします。
“ファイルコピーの開始”の画面が表示されます。指定した内容を確認し、[次へ]ボタンをクリックします。
インストールを開始します。
9. コンピュータを再起動します。
コンピュータの再起動を行うかどうかの確認画面が表示されます。再起動を行ってください。[完了]ボタンをクリックし、インストールを終了します。

2.6 インストール後の作業

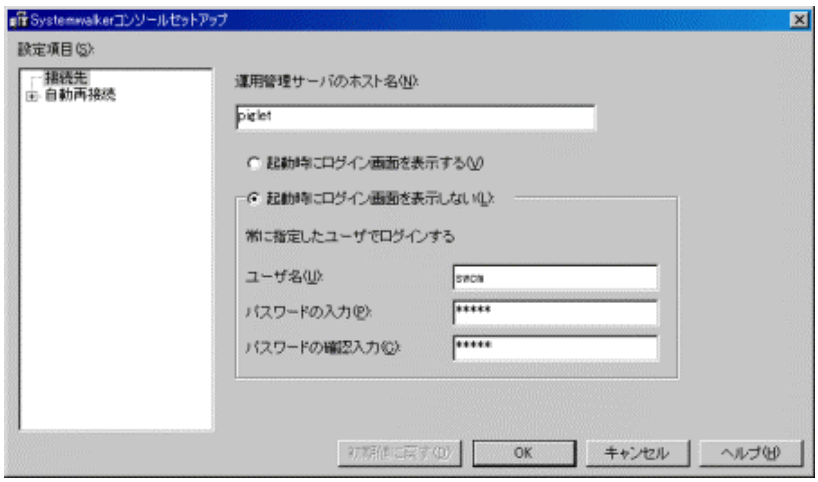
Systemwalker Centric Managerをインストールした後に行う、以下の作業について説明します。

- 2.6.1 運用管理クライアントのセットアップ
- 2.6.2 ネットワークの構成情報（ノード）の自動検出

2.6.1 運用管理クライアントのセットアップ

運用管理クライアントをインストールした後に、運用管理クライアントから接続する運用管理サーバを指定する必要があります。以下に操作手順を説明します。

1. 運用管理クライアントで[スタート]メニューから[プログラム]-[Systemwalker Centric Manager]-[環境設定]-[Systemwalkerコンソールセットアップ]を選択し、[Systemwalkerコンソールセットアップ]画面を表示します。
2. [Systemwalkerコンソールセットアップ]画面で、接続する運用管理サーバのホスト名と接続方法を指定し、[OK]ボタンをクリックします。
   ここでは、以下のように指定します。
   - [運用管理サーバのホスト名]：“piglet”
   - [起動時にログイン画面を表示しない]：選択
     - [ユーザ名]：swcm
     - [パスワードの入力]：unyou
     - [パスワードの確認入力]：unyou



注意

運用管理サーバのホスト名設定での注意事項

運用管理サーバのホスト名を設定する場合、以下の点に注意してくだ

さい。

― Systemwalker Centric Managerの画面が動作している場合には、接続する運用管理サーバを変更しないでください。

― 運用管理サーバ上で、hostnameコマンドを実行したときに表示されるホスト名を、運用管理クライアントのlmhostsファイルまたはhostsファイルに登録してください。

Windows 98/Meの場合:

Windowsディレクトリ配下

Windows NT系の場合:

Windowsディレクトリ¥system32¥drivers¥etc配下

― ホスト名の入力域にIPアドレス、DNS名を指定することはできません。

運用管理クライアントから接続する運用管理サーバを変更する場合は、運用管理クライアントのセットアップを再度実行してください。

2.6.2 ネットワークの構成情報(ノード)の自動検出

Systemwalker Centric Managerをインストールした後の、ネットワークの構成情報(ノード)について以下の手順を説明します。

- ノードの自動検出を行う
- ノードに表示名を定義する

ノードの自動検出を行う

Systemwalker Centric Managerをインストール後、運用管理クライアントで、[Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウを表示すると、初回だけ[ノード検出]画面が表示され、ノードの自動検出を行うことができます。

ここでは、インストール直後のノードの自動検出手順について説明します。随時にノードの自動検出を行う方法については、“Systemwalker Centric Manager 使用手引書 監視機能編”を参照してください。

1. 運用管理クライアントで[スタート]メニューから[プログラム]－[Systemwalker Centric Manager]－[Systemwalkerコンソール]を選択します。
2. [自動再接続]画面が表示されます。ここでは[はい]のボタンをクリックします。
3. Systemwalkerコンソールで[機能選択]ボックスから[監視]を選択し、[Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウを表示します。
4. [ノード検出]画面を表示します。
   [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウの起動時に、インストール後の初回だけ[ノード検出]画面が表示されます。
5. ノードの自動検出を行います。
   a) [ノード検出]画面で、[一般]タブを選択し、[OK]ボタンをクリックします。

ここでは、以下のように指定します。

- ［検出範囲］：初期値
- ［検出モード］：初期値

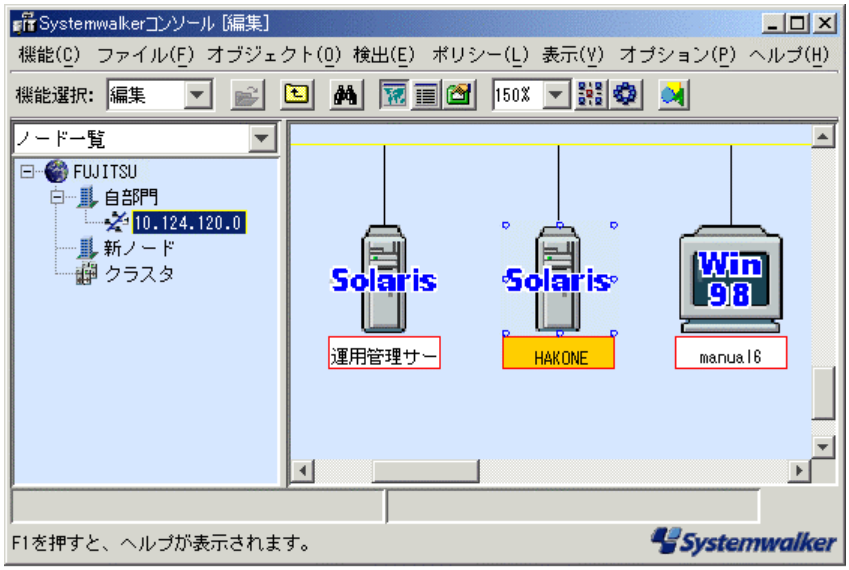
b) 自動検出されます。

ノードを手動で定義する場合は、［ノード検出］画面で［キャンセル］を選択し、［Systemwalkerコンソール［編集］］ウィンドウの［オブジェクト］メニューから［プロパティ］を選択して定義します。

ノードに表示名を定義する

検出されたノードに、表示名を定義する方法について説明します。

1. 運用管理クライアントで、Systemwalkerコンソールを起動します。
2. ［機能選択］ボックスから［編集］を選択し、［Systemwalkerコンソール［編集］］ウィンドウにします。
3. ［ノードプロパティ］画面を表示します。
   a) ［Systemwalkerコンソール［編集］］ウィンドウで表示名を定義するノードを選択します。
   ここでは、以下のように選択します。
   - 監視ツリー：［FUJITSU］－［自部門］－［10.124.120.0］
   - 監視マップ：［HAKONE］



b) [オブジェクト]メニューから[プロパティ]を選択します。

4. 表示名を設定します。

[ノードプロパティ]画面の[基本情報]タブを選択します。各項目に値を設定し、[OK]ボタンをクリックします。

ここでは、以下のように設定します。

— [表示名]:“業務サーバ”

— そのほかの項目:初期値

第3章　監視する

Systemwalker Centric Managerをインストールすると、システムを監視できます。

本章では、Systemwalkerコンソールウィンドウより行う、基本的な監視機能や操作方法について説明します。本書で取り上げない機能や操作方法については、“Systemwalker Centric Manager 使用手引書 監視機能編”および“Systemwalker Centric Manager 導入手引書”を参照してください。

[Systemwalkerコンソール]を使用するときの共通事項として、以下の事項について説明します。

- Systemwalkerコンソールを起動する
- Systemwalkerコンソールの画面構成
- [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウを表示する
- [Systemwalkerコンソール[編集]]ウィンドウを表示する

Systemwalkerコンソールを起動する

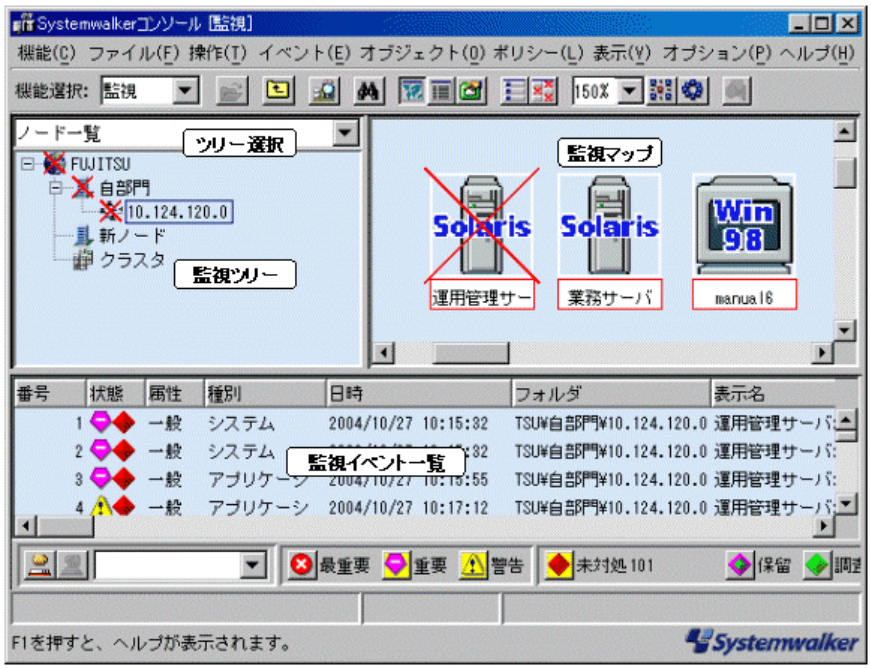
運用管理クライアントで[スタート]メニューから[プログラム]－[Systemwalker Centric Manager]－[Systemwalkerコンソール]を選択します。
[自動再接続]ダイアログボックスを表示します。
ここでは、[はい]のボタンをクリックします。

Systemwalkerコンソールの画面構成

Systemwalkerコンソールは、以下の3つのサブウィンドウと2つのオプションウィンドウから構成されます。

Systemwalkerコンソールは、[機能選択]メニューなどにより、[Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウまたは[Systemwalkerコンソール[編集]]ウィンドウに切り替えて使用します。

なお、[Systemwalkerコンソール[編集]]ウィンドウに切り換えた場合は、オプションウィンドウや[監視イベント一覧]サブウィンドウは表示されません。



- サブウィンドウ
  - — 監視ツリー

    監視ツリー上部の[ツリー選択]で監視、または編集するツリーの種類を選択します。[ツリー選択]で選択された情報をツリー型式で表示します。以下の6種類のツリーが表示できます。
    - ノード一覧ツリー：システムに必ず一つ存在し、ネットワークの構成情報(ノード)の構成を表すツリーです。ノードの状態を監視する時などに使用します。
    - ノード管理ツリー：地区別、業務別などの目的に応じて、特定のノードの構成を表すツリーです。本書では使用しません。
    - 業務管理ツリー：業務に応じて、アプリケーションやデータベース、管理者などの関係を表すツリーです。アプリケーションや業務を監視する時などに使用します。
    - アプリケーション一覧ツリー(編集機能のみ表示)：アプリケーションの定義およびグルーピングを行うためのツリーです。
    - データベース一覧ツリー(編集機能のみ表示)：データベースの定義およびグルーピングを行うためのツリーです。
    - 管理者一覧ツリー(編集機能のみ表示)：管理者の定義およびグルーピングを行うためのツリーです。
  - — 監視マップ

監視ツリーで選択されているグループに所属するオブジェクトを表示します。マップ形式とリスト形式が選択できます。マップ形式とリスト形式は排他的に表示されます。必要に応じて[表示]メニューで切り替えて使ってください。本書では、マップ形式を使った操作を記述します。

— 監視イベント一覧
監視ツリーで選択中のグループに直接所属するノード、アプリケーションなどで発生したイベントの一覧を表示します。

● オプションウィンドウ
オプションウィンドウは、[オプション]メニューから表示することができます。以下のウィンドウがあります。

— [監視イベント種別]ウィンドウ
監視イベント種別を選択するために使用します。

— [操作]ウィンドウ
[操作]メニューと同様の機能を持ちます。

[Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウを表示する

以下のどれかの方法により、[Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウを表示することができます。

● [機能選択]ボックスから[監視]を選択する。
● [機能選択]ボックスから[機能一覧]、機能名で[監視]を選択し、[起動]ボタンをクリックする。
● [機能]メニューから[機能選択]－[監視]を選択する。

なお、[Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウの起動時に初回だけ、ネットワークの構成情報(ノード)の自動検出を開始します。詳細については、“2.6.2 ネットワークの構成情報(ノード)の自動検出”を参照してください。

[Systemwalkerコンソール[編集]]ウィンドウを表示する

以下のどれかの方法により、[Systemwalkerコンソール[編集]]ウィンドウを表示します。

● [機能選択]ボックスから[編集]を選択する。
● [機能選択]ボックスから[機能一覧]、機能名で[編集]を選択し、[起動]ボタンをクリックする。
● [機能]メニューから[機能選択]－[編集]を選択する。

ここでは、以下の処理を行う方法について説明します。

3.1 ノードのイベントを監視する
3.2 ノードの稼働状況を監視する
3.3 ネットワークの性能を監視する
3.4 システムの性能を監視する
3.5 アプリケーションの稼働状況を監視する
3.6 監視イベントを監視対象からはずす
3.7 監視イベントの対処を自動実行する
3.8 WWWブラウザで監視する

3.1 ノードのイベントを監視する

[Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウでは、ノードやネットワークで発生したイベントやSNMPトラップを監視できます。

ここでは、イベントの内容を確認し、イベントに対処するまでの手順について、以下の順序で説明します。ここで説明する以外の操作方法や定義方法については、“Systemwalker Centric Manager 使用手引書 監視機能編”または“Systemwalker Centric Manager 導入手引書”を参照してください。

- 3.1.1 イベントを監視する
- 3.1.2 イベントの原因を調査する
- 3.1.3 監視イベントを対処済にする

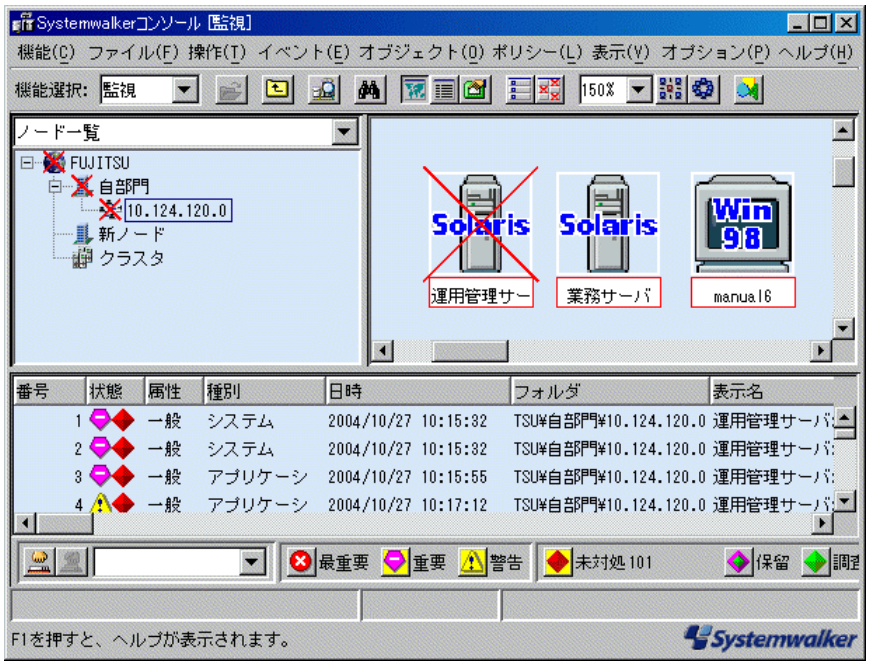
3.1.1 イベントを監視する

イベントを監視する方法に関連し、以下の項目を説明します。

- イベントの監視方法
- 監視イベント種別の絞り込み
- 通知されたイベントの見方

イベントの監視方法

1. 運用管理クライアントで、Systemwalkerコンソールを起動します。
2. [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウにします。
3. [ツリー選択]で[ノード一覧]を選択し、ノード一覧ツリーを表示します。



監視イベント種別の絞り込み

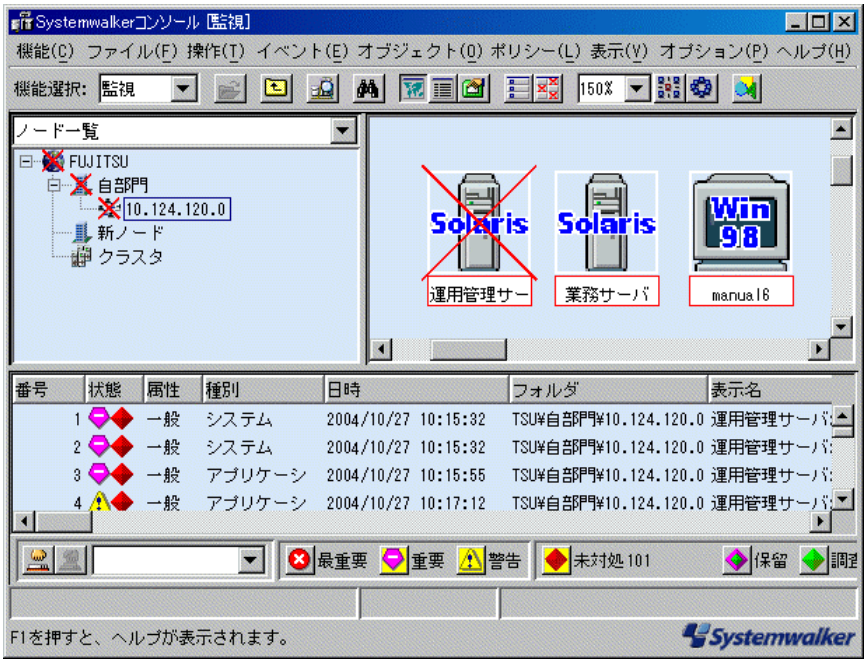
1. 運用管理クライアントでSystemwalkerコンソールを起動します。
2. [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウにします。
3. [ツリー選択]で[ノード一覧]を選択し、ノード一覧ツリーを表示します。
4. [オプション]メニューから[監視イベント種別ウィンドウの表示]を選択し、[監視イベント種別]ウィンドウを表示します。

5. 監視イベント種別を選択します。
   [監視イベント種別]ウィンドウ上のボタンをクリックすると、選択されたイベントの絞り込みができます。

通知されたイベントの見方

イベントが発生した場合

イベントが発生すると、監視しているツリー内でトラブルの発生したフォルダに“×”マークが表示されます。監視マップ内のノードにも“×”マークが表示されます。また、[監視イベント種別]ウィンドウでは、発生したイベントの種別に応じて“×”マークを表示します。



監視イベントの対処状況を判断する方法

イベントが発生すると、監視イベント一覧にイベントが表示されます。監視イベント一覧に表示されたイベントを監視イベントといいます。監視イベント一覧の“状態”欄は色分けして表示され、各監視イベントの状態を知ることができます。

- 未対処：監視イベントが確認されていない、または対処されていない状態
- 保留：監視イベントが確認されたが、対処を保留にした状態
- 調査中：監視イベント対処ウィンドウを開き、監視イベントを調査している状態
- 対処済：監視イベントが対処された状態
- 返答済：監視イベントが返答された状態

監視イベント詳細の参照

[監視イベント一覧]のイベント詳細を参照します。参照方法には、以下のどれかの方法があります。

- [監視イベント一覧]の水平スクロールバーを操作し、内容を参照する。
- [イベント]メニューから[監視イベントの対処]を選択し[監視イベント:対処]ウィンドウの内容を参照する。
- [監視イベント一覧]でイベントを右クリックし、ポップアップメニューから[監視イベントの対処]を選択し[監視イベント:対処]ウィンドウの内容を参照する。
- [監視イベント一覧]でイベントをダブルクリックし、[監視イベント:対処]ウィンドウの内容を参照する。

3.1.2 イベントの原因を調査する

[Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウのイベント一覧で、イベント詳細に表示されたメッセージに応じて、以下のような調査を行い、メッセージの詳細な意味、対処方法を調べます。

- 被監視サーバがWindows NT®、Windows® 2000または、Windows Server™ 2003の場合は、リモートコマンドまたはリモート操作を使用し、イベントの原因を調査します。
- 被監視サーバがUNIXの場合は、リモートコマンドまたはtelnetにより、イベントの原因を調査します。
- トラブルが発生しているノードのシステムの構成情報(インベントリ情報)を調べ、ディスク状況やソフトウェアのインストール状態を確認します。
- ネットワークの管理情報テーブルであるMIB情報を収集し、ネットワークに関する各種状況を把握します。例えば、単位時間当たりにノードが受信したipパケット数のカウンタを収集する情報を取得し、ネットワークの負荷を調査します。
- トラブル発生のノードを中心としたトラフィック状況を調査し、負荷の高い回線やノードの詳細情報を調査します。
- ヘルプデスク機能を使用していれば、障害票を検索し、過去に類似のトラブルが発生していないか調査できます。

ここでは、以下の機能を使用した調査方法について説明します。

- リモートコマンド
- リモートログイン

3.1.2.1 リモートコマンドを使用する

リモートコマンドを使用すると、監視対象のノードに対してコマンドを実行することができ、実行したコマンドの結果を確認することができます。

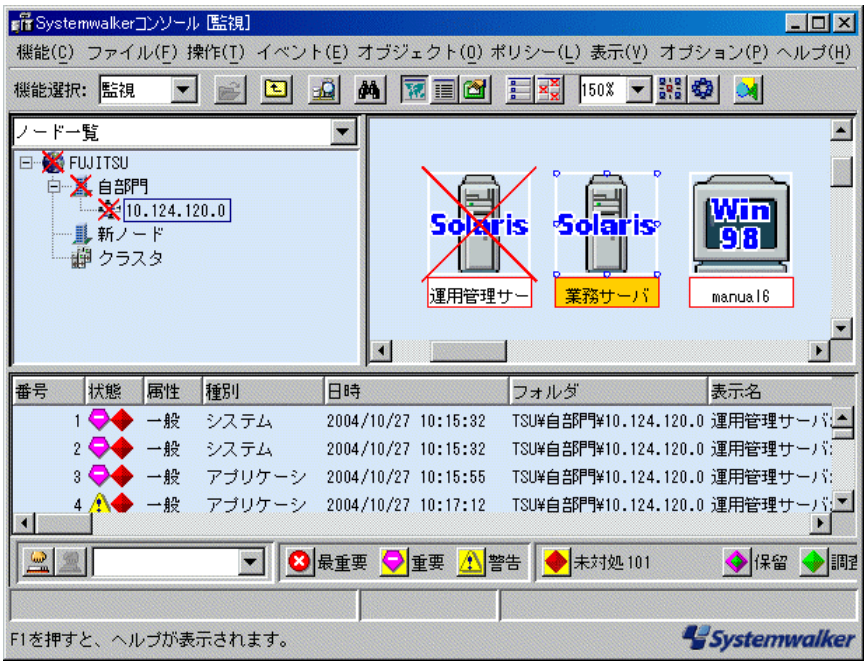
ここでは、“set”コマンドを使用して、業務サーバ上の環境変数を調べる手順について、以下の順序で説明します。

- 任意のコマンドを実行する場合
- 定型的にコマンドを実行する場合
  - リモートコマンドの登録
  - リモートコマンドの実行

任意のコマンドを実行する場合

1. 運用管理クライアントで、Systemwalkerコンソールを起動します。
2. [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウにします。
3. [ツリー選択]で[ノード一覧]を選択し、ノード一覧ツリーを表示します。
4. リモートコマンドの実行先を選択します。
   a) リモートコマンドを実行するサーバを[監視マップ]から選択します。ここでは、以下のように指定します。
      - 監視マップ：[業務サーバ]
   b) [操作]メニューから[指定オブジェクト]－[リモートコマンド]

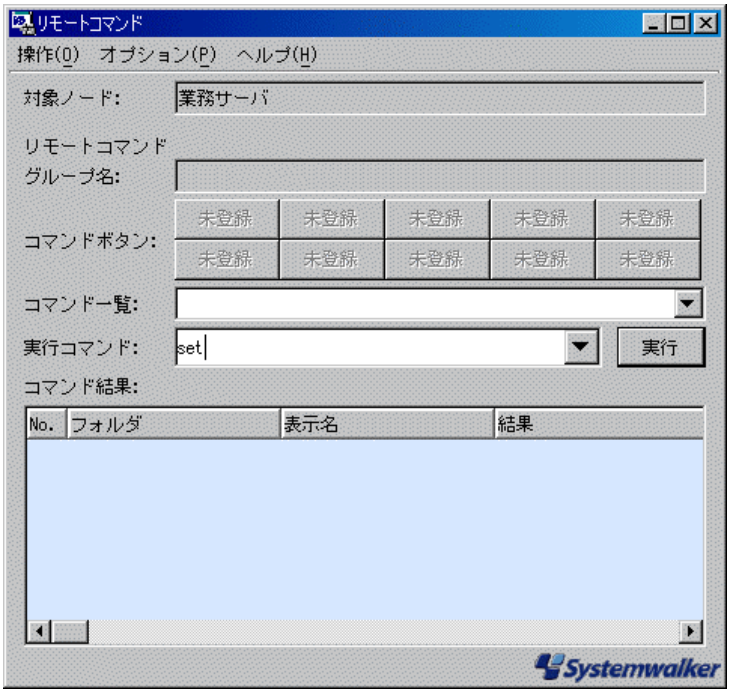
を選択します。



5. リモートコマンドを実行します。

   a) [リモートコマンド]ウィンドウの[実行コマンド]ボックスに実行するコマンドを直接指定し、[実行]ボタンをクリックします。
   ここでは、以下のように指定します。

   - [実行コマンド]：“set”

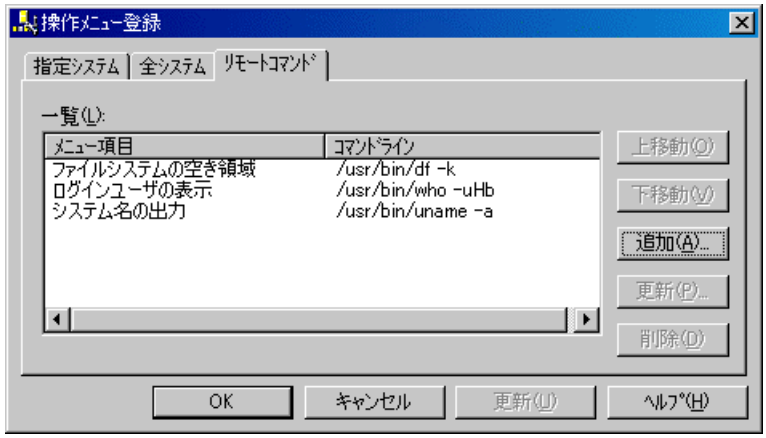


6. リモートコマンドを終了します。
   a) [リモートコマンド]ウィンドウの[コマンド結果]で結果を確認し、[操作]メニューから[終了]を選択します。
   b) [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウの[機能]で[Systemwalkerコンソール終了]を選択し、終了します。

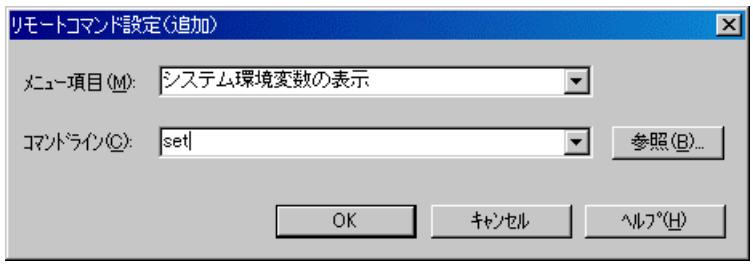
定型的にコマンドを実行する場合

リモートコマンドの登録

1. 運用管理クライアントで[Systemwalkerコンソール]を起動します。
2. [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウにします。
3. [ツリー選択]で[ノード一覧]を選択し、ノード一覧ツリーを表示します。
4. 操作メニューを登録します。
   a) [操作]メニューから[操作メニューの登録]を選択します。
   b) [操作メニュー登録]ダイアログボックスで[リモートコマンド]タブを選択し、[追加]ボタンをクリックします。



5. リモートコマンドを設定します。
   [リモートコマンド設定（追加）]ダイアログボックスで、[OK]ボタンをクリックします。
   ここでは、以下のように指定します。
   — ［メニュー項目］:“システム環境変数の表示”
   — [コマンドライン]:“set”



6. リモートコマンドの登録を完了します。
   a) ［操作メニュー登録］ダイアログボックスで、[一覧]に追加されたことを確認し、[OK]ボタンをクリックします。

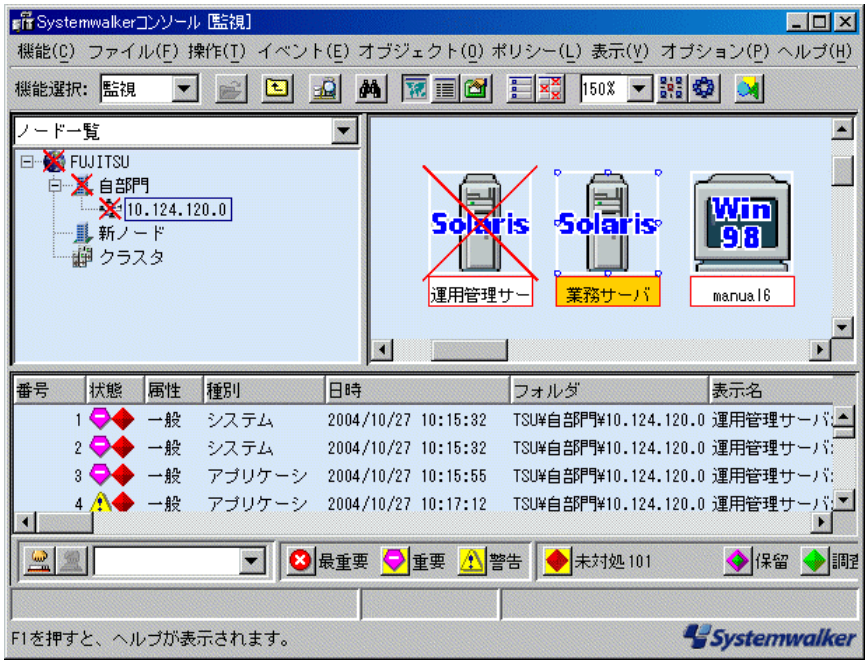
b) 以下のメッセージボックスが表示されるので、[OK]ボタンをクリックします。

c) [Systemwalkerコンソール]を再起動します。

リモートコマンドの実行

1. 運用管理クライアントで、[Systemwalkerコンソール]を起動します。
2. [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウにします。
3. [ツリー選択]で[ノード一覧]を選択し、ノード一覧ツリーを表示します。
4. リモートコマンドの実行先を選択します。
   a) 設定したリモートコマンドを実行するサーバを[監視マップ]から選択します。
   ここでは、以下のように指定します。
   - 監視マップ：[業務サーバ]

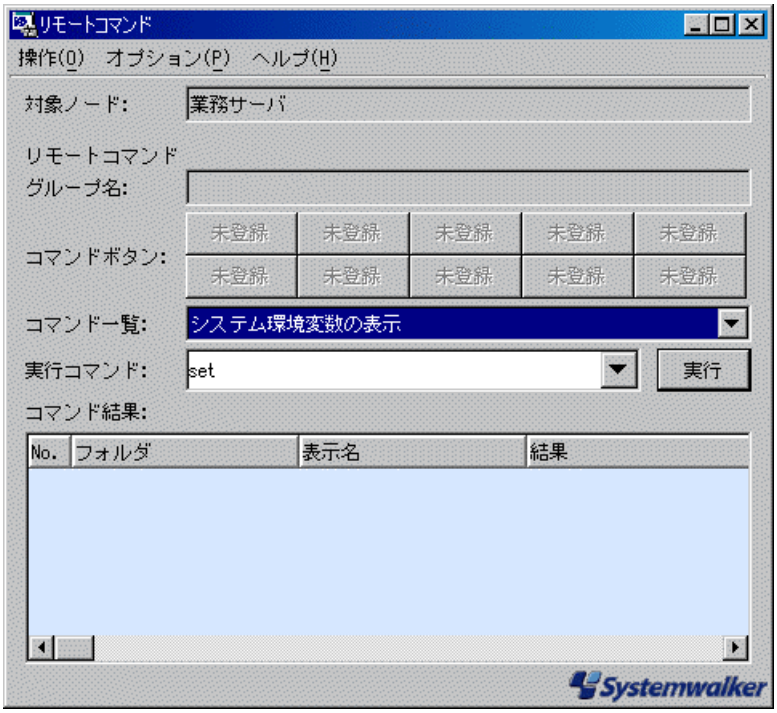
   b) [操作]メニューから[指定オブジェクト]－[リモートコマンド]を選択します。



5. リモートコマンドを実行します。
   a) [リモートコマンド]ウィンドウの[コマンド一覧]ボックスから、

実行するコマンドを選択し、[実行]ボタンをクリックします。
ここでは、以下のように指定します。

- ［コマンド一覧］:［システム環境変数の表示］



6. リモートコマンドを終了します。
   a) ［リモートコマンド］ウィンドウの［コマンド結果］で結果を確認し、終了します。
   b) ［Systemwalkerコンソール［監視］］ウィンドウの［機能］で［Systemwalkerコンソール終了］を選択し、終了します。

リモートコマンドが実行できない場合は、業務サーバ上で以下のコマンドを実行してください。

```
opaconstat －a
```

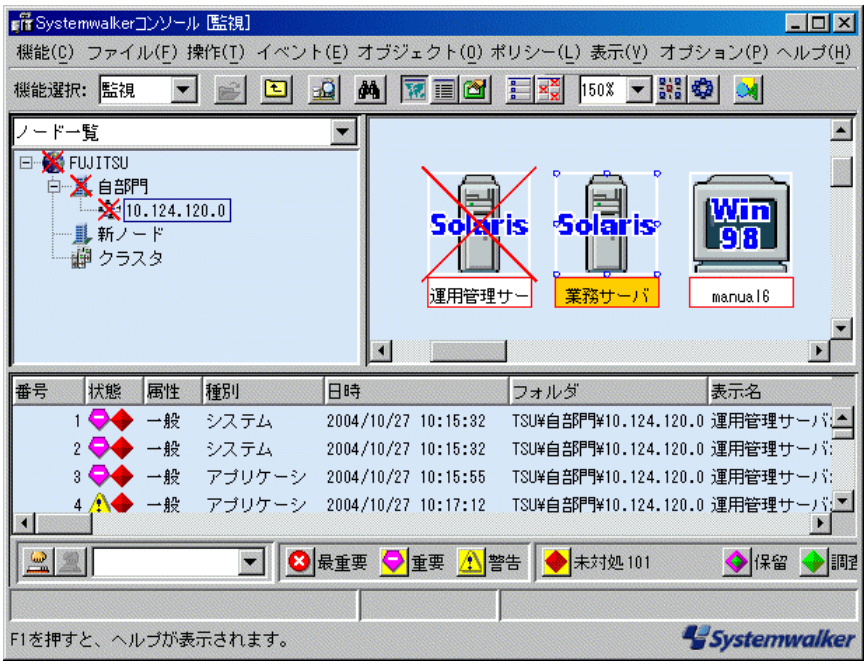
このコマンドにより業務サーバが被監視システムとして認識され、リモートコマンドが可能になります。

3.1.2.2 リモートログインを使用する

被監視サーバにリモートログインして操作を行います。
ここでは、業務サーバに、リモートログインします。

1. ［Systemwalkerコンソール［監視］］ウィンドウの［監視マップ］からノードを選択します。
   ここでは、以下のように指定します。

― 監視マップ：[業務サーバ]



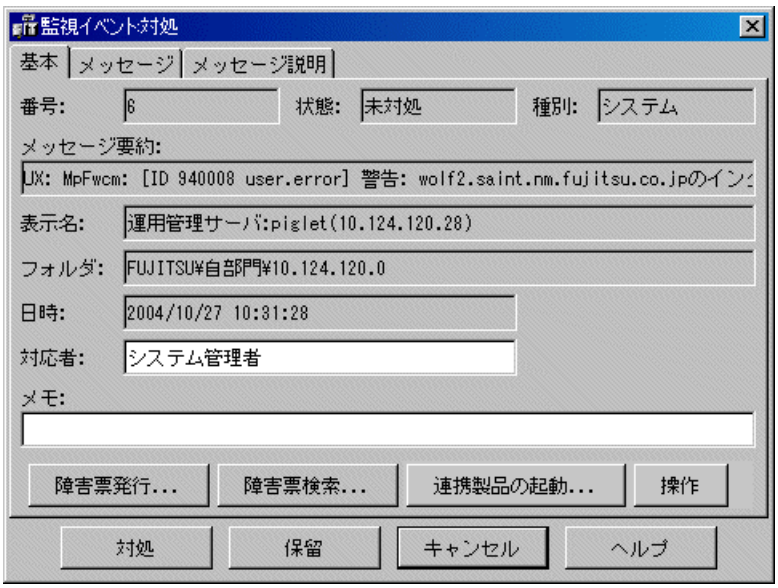
2. [オプション]メニューから[操作ウィンドウの表示]を選択して、[操作]ウィンドウの[telnet]を選択します。
3. [telnet]ウィンドウで、業務サーバのユーザ名とパスワードを入力し、操作を行います。

3.1.3 監視イベントを対処済にする

イベントの原因が判明し、対処後、監視イベントを対処済にします。対処済にするには、1件ずつ処理する方法と、複数の監視イベントを一括して処理する方法があります。ここでは、1件ずつ処理する方法を説明します。複数の監視イベントを一括して処理する場合は、[イベント]メニューから[監視イベントの一括対処]を選択します。詳細については、“Systemwalker Centric Manager 使用手引書 監視機能編”を参照してください。

1. 運用管理クライアントで、Systemwalkerコンソールを起動します。
2. [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウにします。
3. [ツリー選択]で[ノード一覧]を選択し、ノード一覧ツリーを表示します。
4. 対処するイベントを選択します。
   a) 監視イベント一覧のイベントから、対処を行うイベントを選択します。
   b) 以下のどちらかの操作により[監視イベント対処] ダイアログボックスを表示します。
   ― [イベント]メニューから[監視イベントの対処]を選択する。
   ― 対処したいイベントをダブルクリックする。

5. [監視イベント:対処]ダイアログボックスで[基本]タブを選択し、必要な情報を入力し、[対処]ボタンをクリックします。
   また必要に応じて、[メモ]にコメントを入力します。
   ここでは、以下のように指定します。
   ― [対応者]:“システム管理者”



6. 対処済のチェックをします。
   監視イベント一覧のイベントの状態が“未対処”から“対処済”に変わります。

[監視イベント:対処]ウィンドウの[メッセージ説明]タブには、ヘルプデスクの障害票の説明や、ユーザが定義した説明を表示することができます。

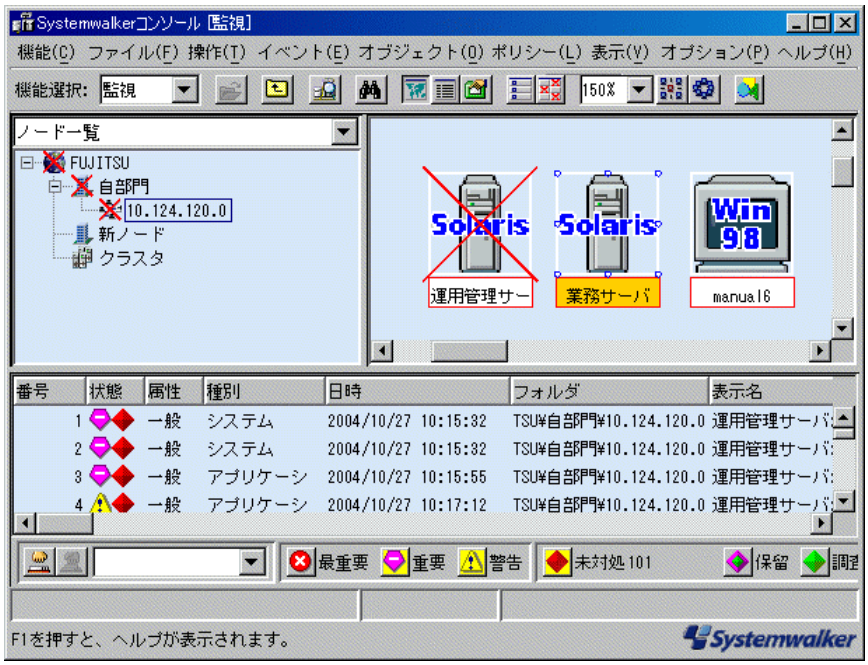
3.2 ノードの稼働状況を監視する

ノードの稼働監視は、SNMPを用いてノードの状態(起動状態/停止状態)を監視し、状態の変化を検出する機能です。監視対象は、ノード単位またはフォルダ単位で定義できます。ここでは、ノードの稼働監視について、以下の順序で説明します。

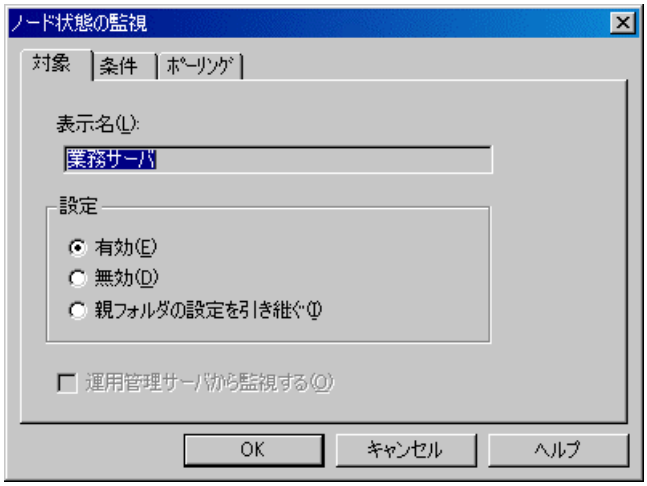
- ノードの稼働監視の定義方法
- ノードの稼働監視時に通知されるメッセージ

ノードの稼働監視の定義方法

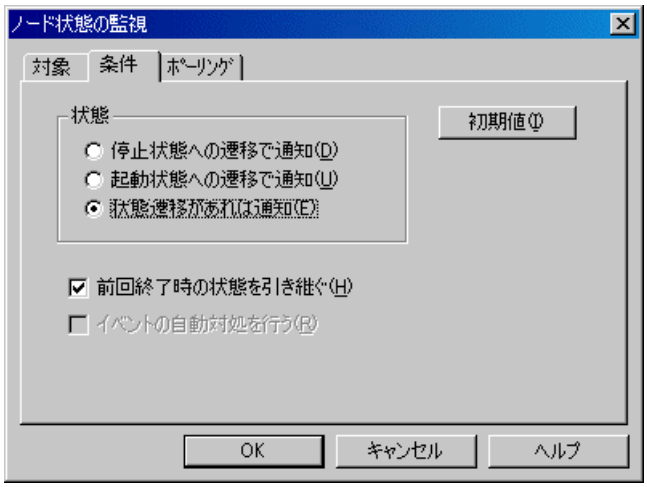
1. 運用管理クライアントでSystemwalkerコンソールを起動します。
2. [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウにします。
3. [ツリー選択]で[ノード一覧]を選択し、ノード一覧ツリーを表示します。
4. 対象ノードを選択します。
   a) [監視マップ]からノードを選択します。
      ここでは、以下のように指定します。
      - 監視マップ：[業務サーバ]
   b) [ポリシー]メニューから[ポリシーの定義]－[ノード]－[ノード状態の監視]－[ノード]を選択します。



5. ノード状態を監視する条件などの詳細を設定します。
   a) [ノード状態の監視]ダイアログボックスで[対象]タブを選択し、設定します。
      ここでは、[表示名]に[業務サーバ]と表示されます。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [設定]：[有効]



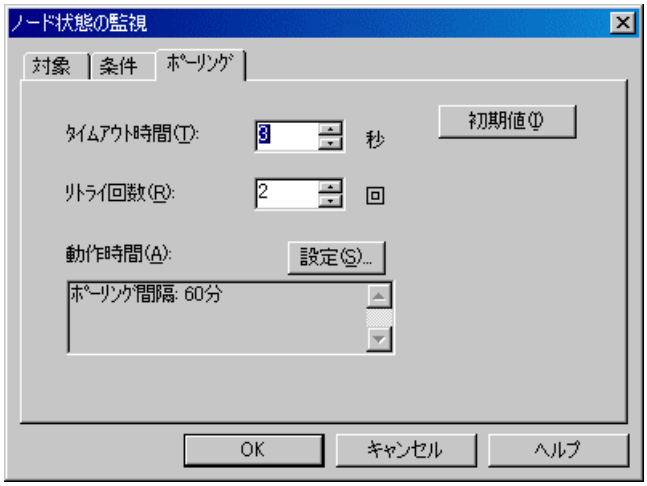
b) [条件]タブでノードの状態を通知する条件を指定します。
ここでは、以下のように指定します。
- [状態]：[状態遷移があれば通知]
- [前回終了時の状態を引き継ぐ]：チェック



c) [ポーリング]タブで、ノードの稼働監視を行うポーリング間隔、および動作時間などを定義し、[OK]ボタンをクリックします。
ここでは、以下のように指定します。
- [タイムアウト時間]：初期値
- [リトライ回数]：初期値

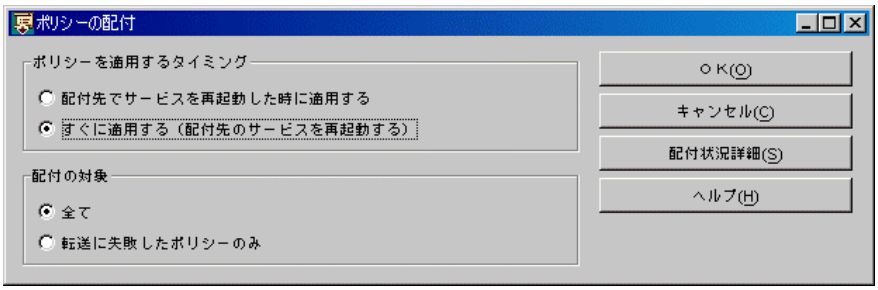
これは、ノードが起動状態から停止状態、または停止状態から起動状態へ変化した時に通知する条件です。

また、以下の2つのノード稼働状態の変化を比較します。
- システム起動後の初回ポーリング時の稼働状態
- 前回起動時の最終ポーリング時の稼働状態



6. [ノード状態の監視]ダイアログボックスの設定を完了します。
   以下のメッセージボックスが表示されます。[OK]ボタンをクリックします。

7. 作成した定義をポリシーとして配付します。
   a) [Systemwalkerコンソール]で、[ポリシー]メニューから[ポリシーの配付]を選択します。
   b) [ポリシーの配付]ダイアログボックスで、[ポリシーを適用するタイミング]と[配付の対象]を選択し、[OK]ボタンをクリックします。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [ポリシーを適用するタイミング]:[すぐに適用する(配付先のサービスを再起動する)]
      - [配付の対象]:初期値



ポリシーの配付に失敗したとき

［監視］ウィンドウの［ポリシー］メニューから［ポリシーの配付状況］を選択します。ポリシー配付の状況が表示されるので、エラーメッセージなどを参照できます。

ノードの稼働監視時に通知されるメッセージ

ノードの稼働監視で通知されるメッセージは、以下のようになります。

- 停止状態→起動状態：ノードとの通信が可能になりました。
- 起動状態→停止状態：ノードとの通信が不可になりました。

3.3 ネットワークの性能を監視する

サーバやネットワーク機器の回線トラフィックを監視する手順を説明します。[性能監視マップ]ウィンドウでは、SNMPプロトコルを使用し、サーバやネットワーク機器の回線トラフィックやCPU使用率などの性能情報を表示できます。さらに、基準値監視によって、しきい値を定義して異常を通知することができます。

ここでは、ネットワークの性能情報を表示する方法について、以下の順序で説明します。

- 3.3.1 ネットワークの性能監視の定義方法
- 3.3.2 ネットワーク性能の監視方法

3.3.1 ネットワークの性能監視の定義方法

性能監視マップは、Systemwalker Centric Managerをインストールしても、標準では表示しません。性能監視マップを表示するため、以下の定義を行います。

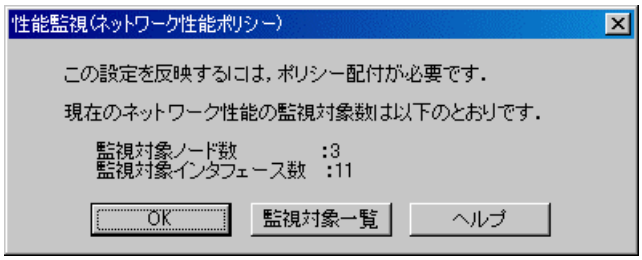
1. 運用管理クライアントで、Systemwalkerコンソールを起動します。
2. [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウにします。
3. [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウで、[ポリシー]メニューから[ポリシーの定義]－[ネットワークの性能]－[全体]を選択します。
   a) [性能監視－全体設定(ネットワーク性能)]ダイアログボックスで監視対象を指定し、[更新]ボタンをクリックします。
   ここでは、以下のように指定します。
   - [性能監視機能]：[ON]
   - [監視対象]：[運用管理サーバ]、[業務サーバ]、[ルータ]
   - そのほかの項目：初期値

参考 **主な項目の初期値**

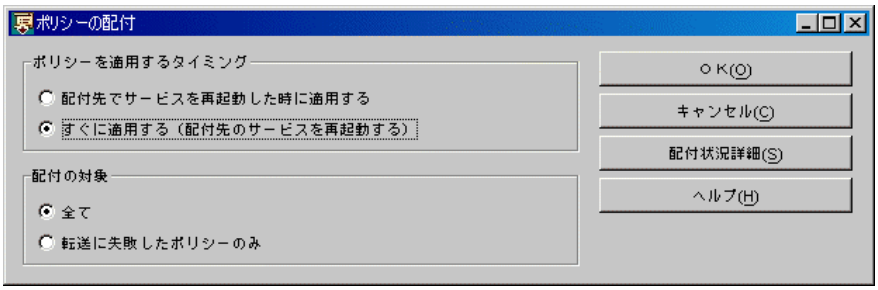
主な項目の初期値は、次のように設定されています。

- ベースライン監視：監視しない
- 構成情報とポリシーの同期・配付：なし

4. 以下のメッセージボックスが表示されます。[OK]ボタンをクリックします。



5. 作成した定義をポリシーとして配付します。
   a) [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウの[ポリシー]メニューから[ポリシーの配付]を選択します。
   b) [ポリシーの配付]ダイアログボックスで、[ポリシーを適用するタイミング]と[配付の対象]を選択し、[OK]ボタンをクリックします。
   ここでは、以下のように指定します。
   - [ポリシーを適用するタイミング]：[すぐに適用する(配付先のサービスを再起動する)]
   - [配付の対象]：初期値



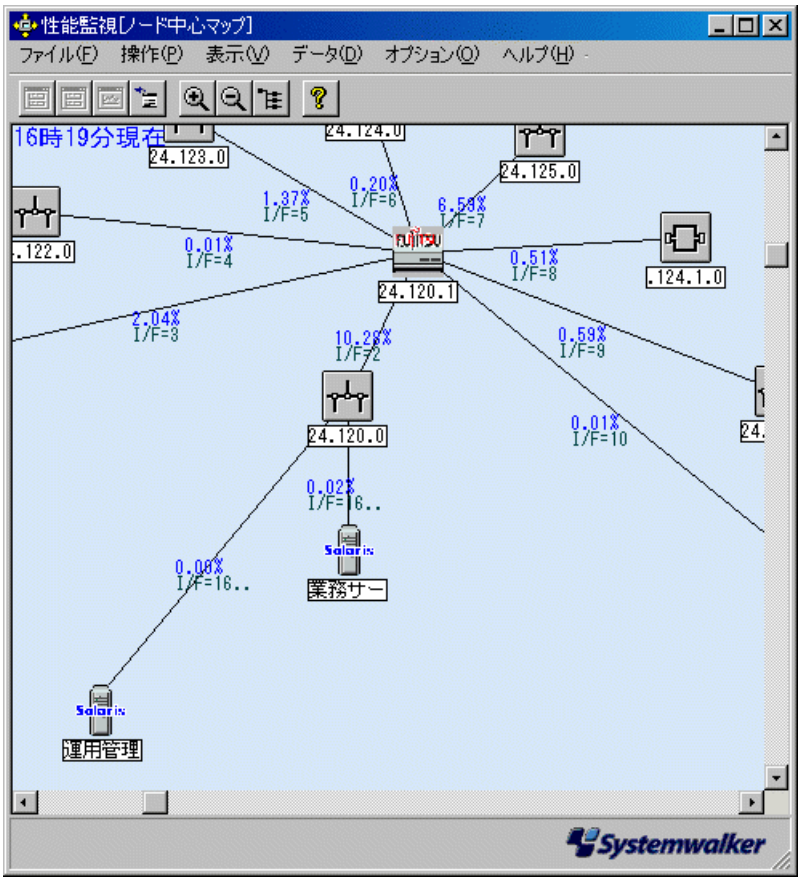
ポイント

性能監視マップは、MIB情報を収集して情報を表示しますが、手動で登録したノードは、情報の収集ができません。そのため、ノード検出を行うことが必要です。ノード検出は、[Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウで[ポリシー]メニューから[ポリシーの定義]－[ノード]－[ノードの検出]－[フォルダ]で行います。

3.3.2 ネットワーク性能の監視方法

ノード中心マップを用いてネットワーク性能を監視する方法を説明します。

1. 運用管理クライアントでSystemwalkerコンソールを起動します。
2. [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウにします。
3. [ツリー選択]で[ノード一覧]を選択し、ノード一覧ツリーを表示します。
4. 監視対象のノードを選択し、ノード中心マップを表示します。
   a) [監視マップ]のノードを選択します。
      ここでは、以下のように指定します。
      - 監視マップ：[業務サーバ]
   b) [操作]メニューから[指定オブジェクト]－[性能監視]－[ノード中心マップ型の表示]を選択します。ノード中心マップでは、選択したノードを中心とした回線使用率を表示します。



5. [ヒストリ表示（トラフィック）]ウィンドウを表示します。
   a) マップ上で回線を選択します。
      ここでは、業務サーバの過去のデータの推移を確認するために、業務サーバに接続された回線を選択します。
   b) 以下のどちらかの方法で、[ヒストリ表示（トラフィック）]ウィ

ンドウを起動し、回線の使用率を表示することができます。

- [ノード中心マップ]ウィンドウで、回線をクリックし、[オプション]メニューから[ヒストリ表示（トラフィック）]を選択する。
- 回線を右クリックし、ポップアップメニューから[ヒストリ表示（トラフィック）]を選択する。

性能監視機能は、定義を行ってからデータの採取を開始するため、定義を行ったばかりの時点で、ヒストリ表示を行っても、有効なデータがない場合があります。

3.4 システムの性能を監視する

サーバのシステム性能を監視する方法には、以下の二つの方法があります。

- 運用管理クライアントから定期的にポーリングを行い、情報を収集する。
- 被監視のサーバ側で自ノードを監視し、しきい値超えを通知する。

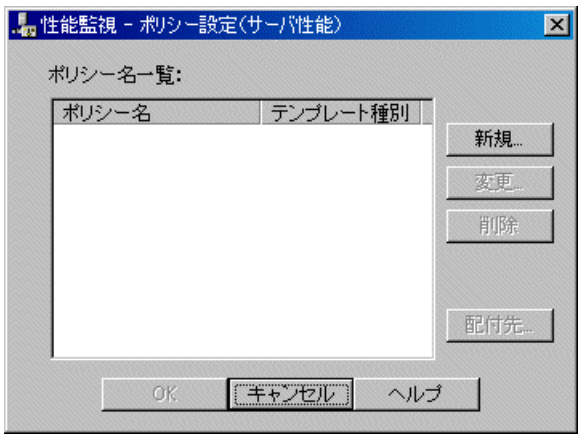
前者の方法は、ネットワーク性能の監視と同様な手順で行います。詳細については“Systemwalker Centric Manager 使用手引書 監視機能編”を参照してください。ここでは、後者の方法についての、以下の順序で説明します。

- 3.4.1 システムの性能を監視するポリシーの定義方法
- 3.4.2 システムの性能を監視するポリシーの配付
- 3.4.3 システムの性能監視時に通知されるメッセージ

3.4.1 システムの性能を監視するポリシーの定義方法

ここでは、CPU使用率のしきい値監視の定義を行います。

1. 運用管理クライアントで、Systemwalkerコンソールを起動します。
2. [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウにします。
3. ポリシーのしきい値設定を行います。
   a) [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウで、[ポリシー]メニューから[ポリシーの定義]－[サーバの性能]を選択します。
   b) [性能監視－ポリシー設定(サーバ性能)]ダイアログボックスで、[新規]ボタンを選択します。

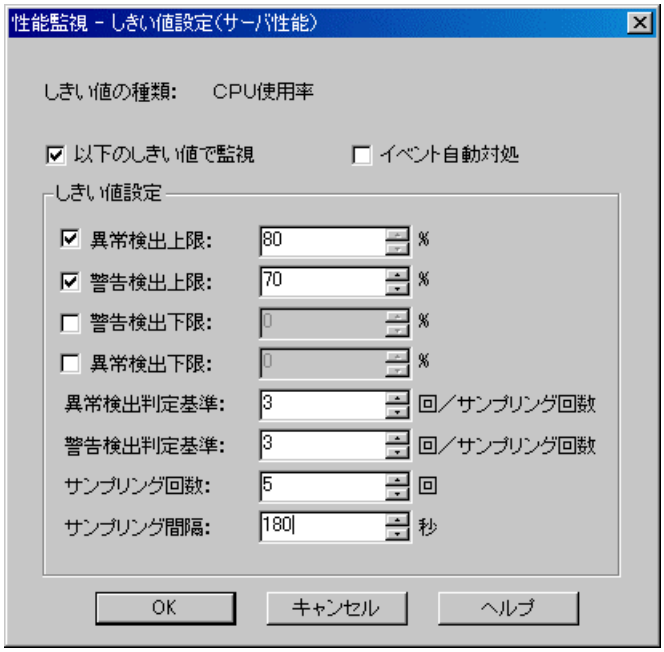


   c) [性能監視－ポリシー編集(サーバ性能)]ダイアログボックスで、以下の指定をし、[設定]ボタンをクリックします。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [ポリシー名]：“ノードのCPU使用率ポリシー”
      - [テンプレート種別]：[Solaris]
      - [しきい値一覧]：[CPU使用率]

d) [性能監視－しきい値設定(サーバ性能)]ダイアログボックスで、ポリシーのしきい値を設定し、[OK]ボタンをクリックします。

ここでは、以下のように指定します。

- [以下のしきい値で監視]:チェックされているか確認します。
- [異常検出上限]:チェック、“80”(%)
- [警告検出上限]:チェック、“70”(%)
- [異常検出判定基準]:“3”(回/サンプリング回数)
- [警告検出判定基準]:“3”(回/サンプリング回数)
- [サンプリング回数]:“5”(回)
- [サンプリング間隔]:“180”(秒)

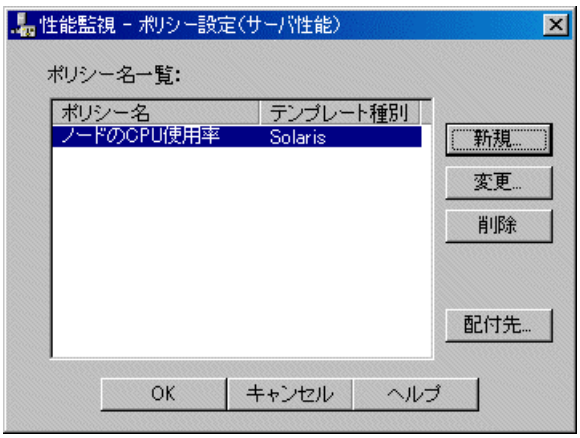


e) [性能監視－ポリシー編集(サーバ性能)]ダイアログボックスで[OK]ボタンをクリックします。

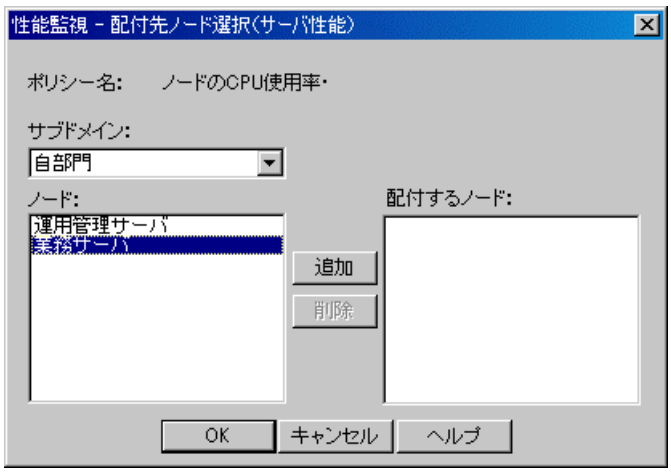
3.4.2 システムの性能を監視するポリシーの配付

ここでは、定義したCPU使用率のしきい値のポリシーの配付を行います。

1. [性能監視－ポリシー設定(サーバ性能)]ダイアログボックスから[ノードのCPU使用率ポリシー]を選択し、[配付先]ボタンをクリックします。



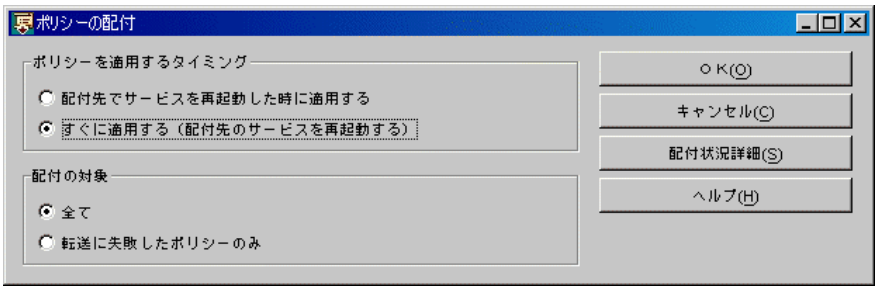
2. [性能監視－配付先ノード選択(サーバ性能)]ダイアログボックスで表示されたノードの中から、[ノードのCPU使用率ポリシー]を適用するノードを指定し、[追加]ボタンをクリックします。
   a) ここでは、以下のように指定します。
      - [ノード]:[業務サーバ]



   b) [配付するノード]に業務サーバが追加されたのを確認し、[OK]ボタンをクリックします。

3. [性能監視－ポリシー設定(サーバ性能)]ダイアログボックスで、[OK]ボタンをクリックします。
4. 以下のメッセージボックスが表示されます。[OK]ボタンをクリックします。

5. 作成した定義をポリシーとして配付します。
   a) [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウの[ポリシー]メニューから[ポリシーの配付]を選択します。
   b) [ポリシーの配付]ダイアログボックスで、[ポリシーを適用するタイミング]と[配付の対象]を選択し、[OK]ボタンをクリックします。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [ポリシーを適用するタイミング]：[すぐに適用する(配付先のサービスを再起動する)]
      - [配付の対象]：初期値



3.4.3 システムの性能監視時に通知されるメッセージ

業務サーバのCPU使用率がしきい値の上限を超えると、[Systemwalkerコンソール]ウィンドウに以下のようなイベントが通知されます。

- 種別：性能監視
- 表示名：業務サーバ:hakone(10.124.120.23)
- メッセージ：UX:MpTrfExA: ERROR：999：監視項目 (Percentage of CPU usage) の値が上方異常レベルを上回りました。
  (資源名：cpu－0,測定値：8838,しきい値：8000,検出回数：3,検出基準回数：3)

3.5 アプリケーションの稼働状況を監視する

アプリケーションの性能の監視では、指定したノード上にあるアプリケーションを自動検出し、検出されたアプリケーションに対して、稼働状況の監視ができます。

ここでは、業務サーバ上のアプリケーションの稼働状況を監視する方法について、以下の順序で説明します。

- 3.5.1 業務管理ツリーの作成
- 3.5.2 アプリケーションの自動検出
- 3.5.3 アプリケーションに対する稼働監視の設定
- 3.5.4 アプリケーションの稼働監視

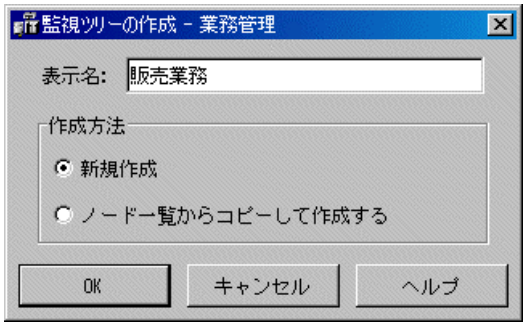
3.5.1 業務管理ツリーの作成

業務として、業務を実行するノードと、その上で動作するアプリケーションを監視する場合を例として説明します。

監視するアプリケーションを業務管理ツリーに追加します。Systemwalkerコンソールに業務管理ツリーを作成していない場合は、まず業務管理ツリーの作成を行います。業務管理ツリーは、管理する業務によりさまざまな形態が考えられます。

ここでは、販売業務を例とした業務管理ツリーを作成します。

1. 運用管理クライアントでSystemwalkerコンソールを起動します。
2. [機能]メニューから[機能選択]－[編集]を選択し、[Systemwalkerコンソール[編集]]ウィンドウを表示します。
3. [ツリー選択]で[業務管理]を選択します。
4. 業務管理ツリーを作成します。
   a) [ファイル]メニューから[監視ツリーの作成]を選択し、[監視ツリーの作成－業務管理]ダイアログボックスを表示します。
   b) [監視ツリーの作成－業務管理]ダイアログボックスで、作成する業務管理ツリーの表示名を指定し、[OK]ボタンをクリックします。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [表示名]:“販売業務”
      - [作成方法]:[新規作成]



5. 業務管理ツリーに業務を追加します。

a) 業務を追加する業務管理ツリーを選択します。
ここでは、以下のように指定します。
- 業務管理ツリー：[販売業務]

b) [オブジェクト]メニューから[業務の作成]を選択します。

c) 業務の詳細を定義します。
[業務作成]ダイアログボックスの[基本情報]タブで以下の指定をし、[OK]ボタンをクリックします。
ここでは以下のように指定します。
- [表示名]：“売上管理”
- そのほかの項目：初期値

d) 必要に応じて、a.～c.を繰り返し、ほかの業務も追加します。

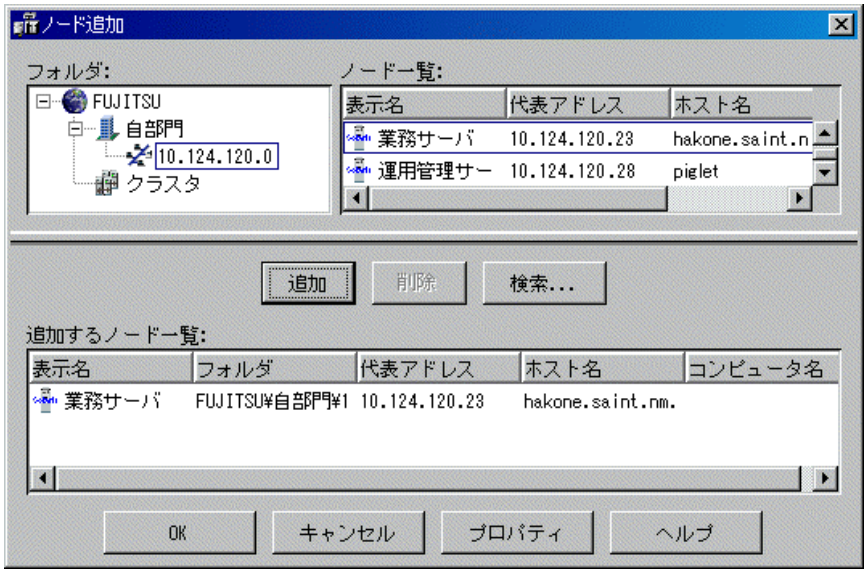
6. 業務を実行するノードを定義します。

a) 業務管理ツリーで対象になる業務を選択します。
ここでは、以下のように指定します。
- 監視ツリー：[売上管理]

b) [オブジェクト]メニューから[追加]－[ノードの追加]を選択します。

c) [ノード追加]ダイアログボックスで、ノードを追加します。
　業務を実行するノードを選択し、[追加]ボタンをクリックします。
　ここでは、以下のように指定します。
　- [ノード一覧]:[業務サーバ]

d) [追加するノード一覧]に[業務サーバ]が追加されたことを確認し、[OK]ボタンをクリックします。



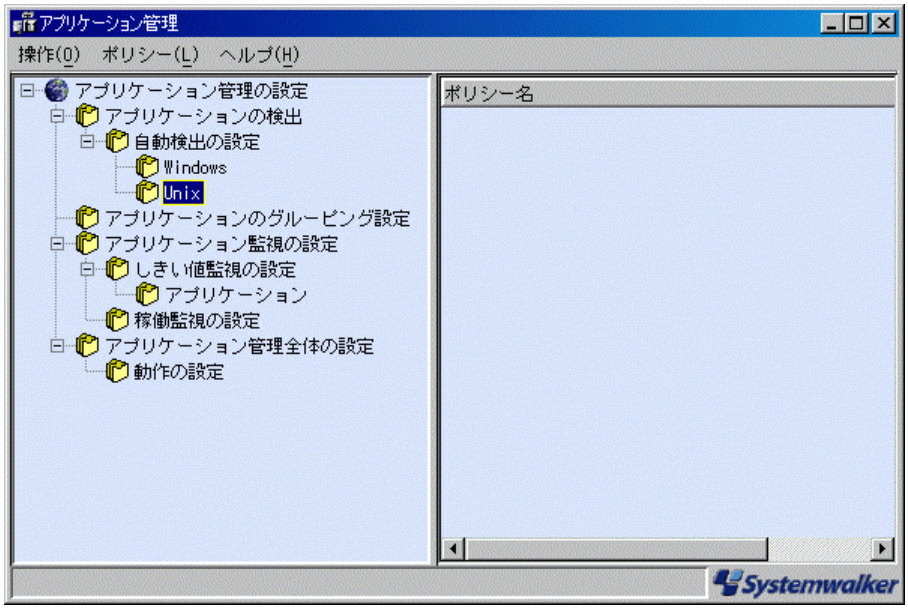
e) 監視マップに業務サーバが追加されます。

3.5.2 アプリケーションの自動検出

監視したいアプリケーションを指定したノードから検出します。

ここでは、“/usr/apl/gprof”を検出します。(ファイル名として、“*”だけを指定することはできません。)

1. 運用管理クライアントでSystemwalkerコンソールを起動します。
2. [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウにします。
3. [ツリー選択]に[業務管理]を選択し、業務管理ツリーを表示します。
4. ポリシーの設定フォルダを選択します。
   a) [ポリシー]メニューから[ポリシーの定義]－[アプリケーションの監視]を選択し、[アプリケーション管理]ウィンドウを表示します。
   b) [アプリケーション管理]ウィンドウの[アプリケーション管理の設定]ツリーからポリシーの設定フォルダを選択します。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [アプリケーションの検出]－[自動検出の設定]－[Unix]



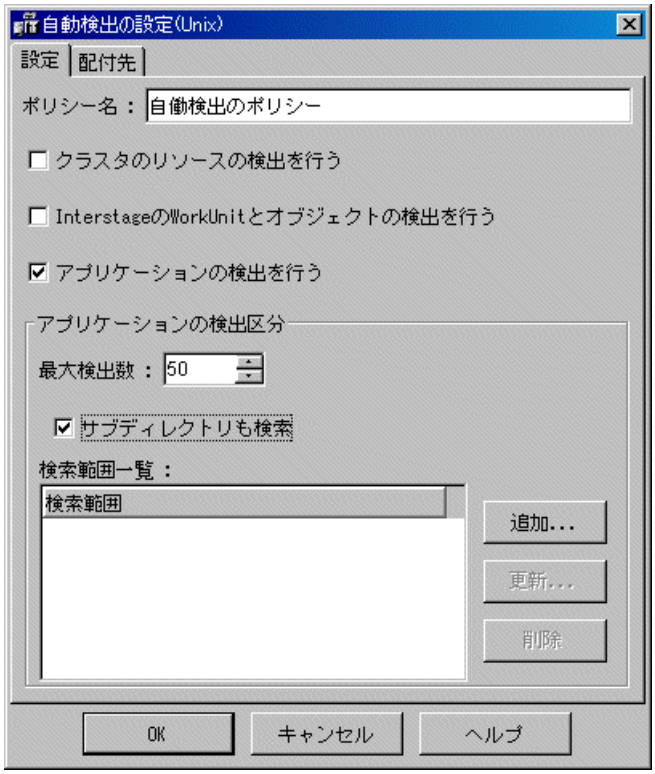
5. ポリシーを定義します。

   a) [ポリシー]メニューから[作成]を選択し、[自動検出の設定(Unix)]ダイアログボックスを表示します。

   b) [自動検出の設定(Unix)]ダイアログボックスの[設定]タブを選択し、[追加]ボタン]をクリックします。

      ここでは、以下のように指定します。

      - [ポリシー名]:“自動検出のポリシー”
      - [アプリケーションの検出を行う]:チェック
      - [サブディレクトリも検索]:チェック



c) [検索範囲入力(Unix)]ダイアログボックスで、アプリケーションのあるフォルダを指定し、[OK]ボタンをクリックします。

ここでは、以下のように指定します。

- [検索範囲]：“/usr/apl/gp*”

6. 配付先を設定します。

a) [自動検出の設定(Unix)]ダイアログボックスの[配付先]タブを表示し、[追加]ボタンをクリックします。

b) [ツリー選択]ダイアログボックスで、配付先のツリーを選択し、[OK]ボタンをクリックします。

ここでは、以下のように指定します。

- [ツリー種別]：[業務管理]
- [ツリー一覧]：[販売業務]

c) [配付先の選択]ダイアログボックスで配付先のサブネットフォルダとノードを選択し、[追加]ボタンをクリックします。

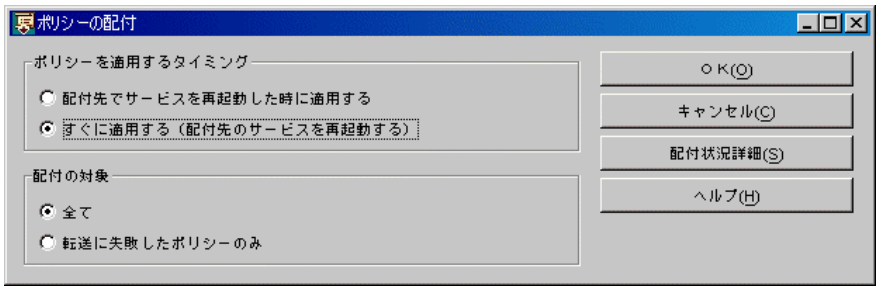
ここでは、以下のように指定します。

- [フォルダ]：[売上管理]
- [ノード一覧]：[業務サーバ]

d) [配付先一覧]で追加されたノードを確認し、[OK]ボタンをクリックします。

7. 設定を完了します。
   [自動検出の設定(Unix)]ダイアログボックスで[OK]ボタンをクリックします。
8. ポリシーを配付し、適用します。
   a) [アプリケーション管理]ウィンドウの[ポリシー]メニューから[ポリシーの配付]を選択します。
   b) ポリシーの配付を確認するメッセージボックスが表示されるので、[はい]ボタンをクリックします。

   c) [ポリシーの配付]ダイアログボックスで、[ポリシーを適用するタイミング]と[配付の対象]を選択し、[OK]ボタンをクリックします。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [ポリシーを適用するタイミング]：[すぐに適用する(配付先のサービスを再起動する)]
      - [配付の対象]：初期値



d) [アプリケーション管理]ウィンドウで[操作]メニューから[終了]を選択し、[アプリケーション管理]ウィンドウを閉じます。

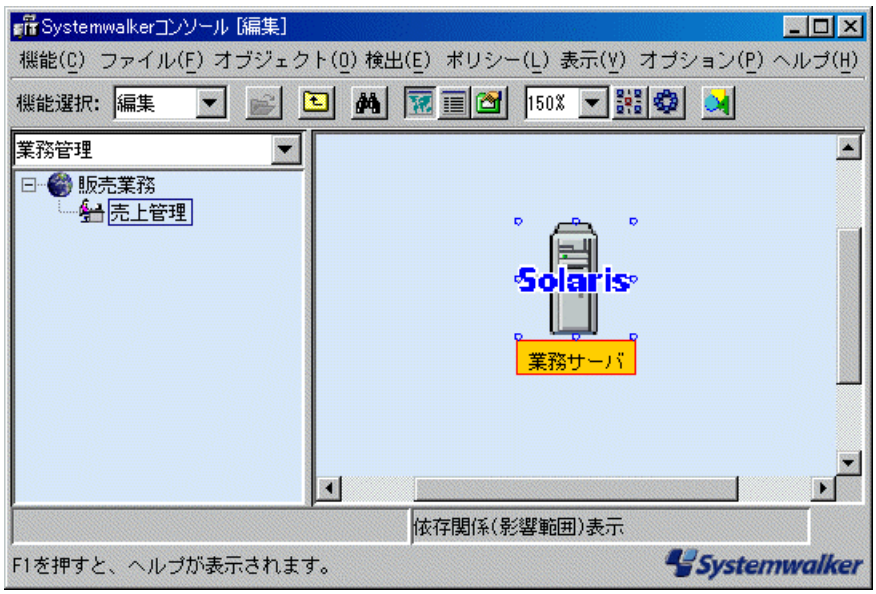
9. アプリケーションを検出します。

a) [Systemwalkerコンソール[編集]]ウィンドウ上で、アプリケーションを検出したいノードを選択します。

ここでは、以下のように指定します。

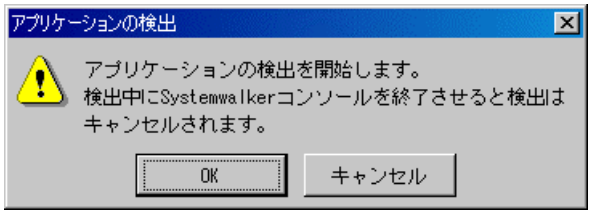
- 監視マップ：[業務サーバ]

b) [検出]メニューから[アプリケーションの検出]を選択します。

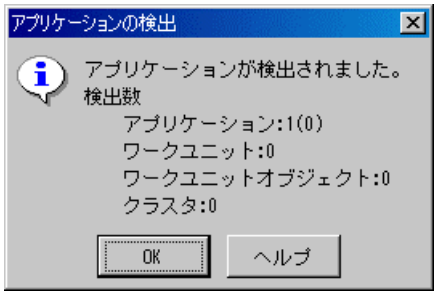


c) [アプリケーション検出]ダイアログボックスで、[OK]ボタンをクリックします。

アプリケーションの検出を開始します。



d) アプリケーションの検出が終了すると、検出結果のメッセージボックスが表示されます。
検出されたアプリケーションを確認し、[OK]ボタンをクリックします。

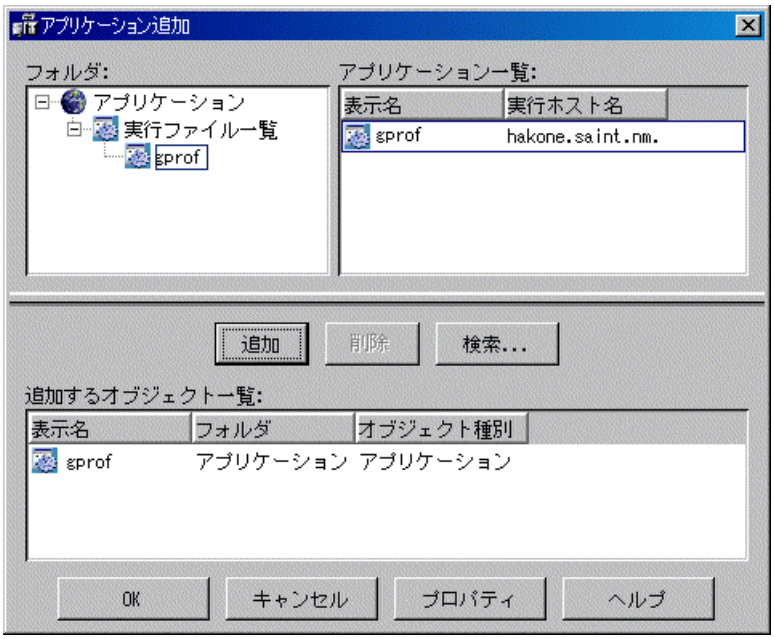


10. 検出したアプリケーションを業務ツリーに追加します。
a) [Systemwalkerコンソール[編集]]ウィンドウの[業務管理ツリー]上でアプリケーションを追加したいフォルダを選択します。
ここでは、以下のように指定します。
- 監視ツリー：[売上管理]

b) [オブジェクト]メニューから[追加]－[アプリケーションの追加]を選択します。

c) [アプリケーション追加]ダイアログボックスで、[フォルダ]から[アプリケーション]－[実行ファイル一覧]－[gprof]を選択します。[アプリケーション一覧]から追加したいアプリケーションを選択し、[追加]ボタンをクリックします。
ここでは、以下のように指定します。
- [アプリケーション一覧]：[gprof]

d) [追加するオブジェクト一覧]に追加さたことを確認し、[OK]ボタンをクリックします。
なお、表示されるダイアログボックス名は、選択したフォルダによって変わります。

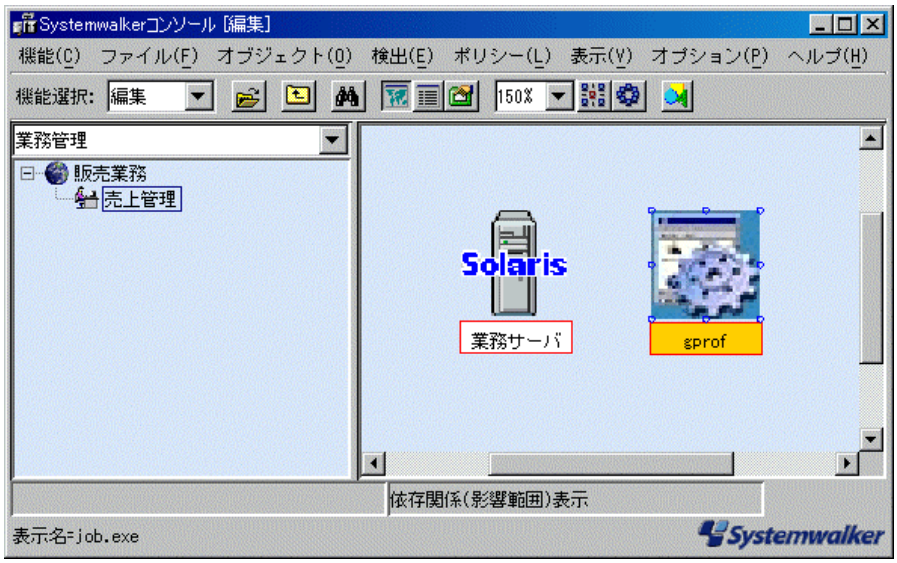


11. 選択したアプリケーションに表示名を設定します。

a) 監視マップ上のアプリケーションを選択します。

ここでは、以下のように指定します。

- 監視マップ：[gprof]



b) [オブジェクト]メニューから[プロパティ]を選択し、[アプリケーションプロパティ]ダイアログボックスを表示します。

c) [アプリケーションプロパティ]ダイアログボックスの[基本情報]タブで、アプリケーションの[表示名]を変更し、[OK]ボタンをクリックします。

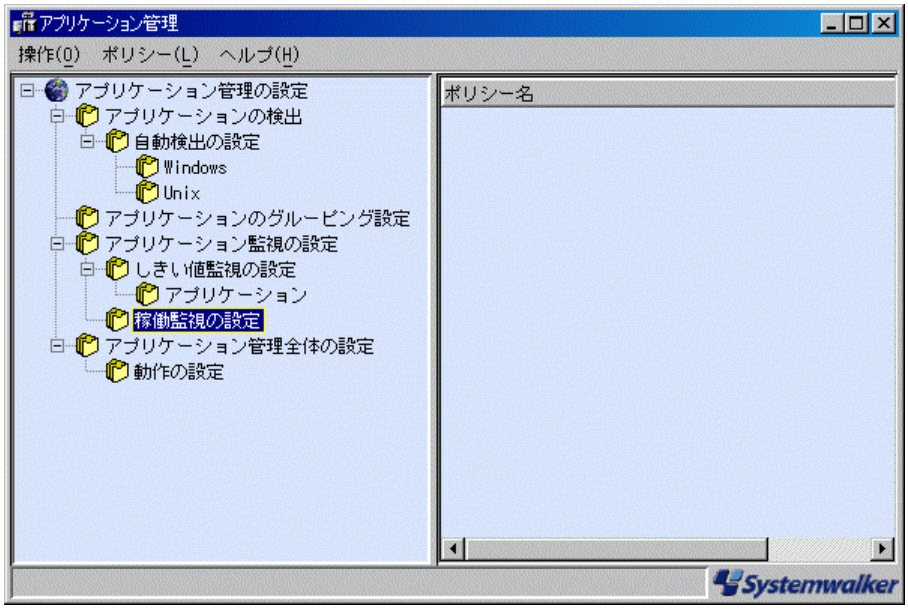
ここでは、以下のように指定します。
- ［表示名］:“売上計算”

3.5.3 アプリケーションに対する稼働監視の設定

監視するアプリケーションを選択し、稼働監視の設定をします。

ここでは、検出した業務サーバ上のアプリケーション“gprof”(表示名：売上計算)に対して稼働監視を設定する手順を説明します。

1. 運用管理クライアントでSystemwalkerコンソールを起動します。
2. [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウにします。
3. [ツリー選択]で[業務管理]を選択し、業務管理ツリーを表示します。
4. ポリシーの設定フォルダを選択します。
   a) [ポリシー]メニューから[ポリシーの定義]－[アプリケーションの監視]を選択します。
   b) [アプリケーション管理]ウィンドウの[アプリケーション管理の設定]ツリーからポリシーの設定フォルダを選択します。
      ここでは、以下のように指定します。
      - ［アプリケーション監視の設定］－［稼働監視の設定］
   c) [ポリシー]メニューから[作成]を選択します。

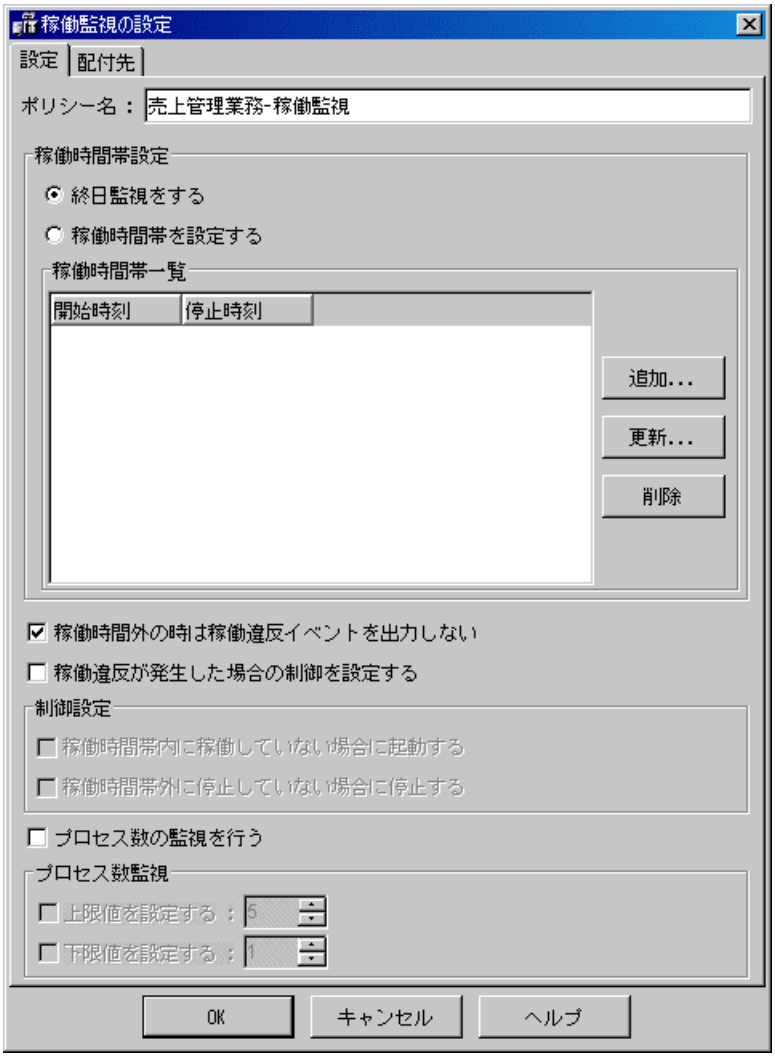


5. ポリシーを定義します。

   a) ［稼働監視の設定］ダイアログボックスの［設定］タブを表示し、以下の指定をします。

      ここでは、以下のように指定します。

      - ［ポリシー名］：“売上管理業務－稼働監視”
      - ［稼働時間帯設定］：［終日監視をする］
      - ［稼働時間以外の時は稼働違反イベントを出力しない］：初期値
      - ［稼働違反が発生した場合の制御を設定する］：チェックしない
      - ［プロセス数の監視を行う］：チェックしない

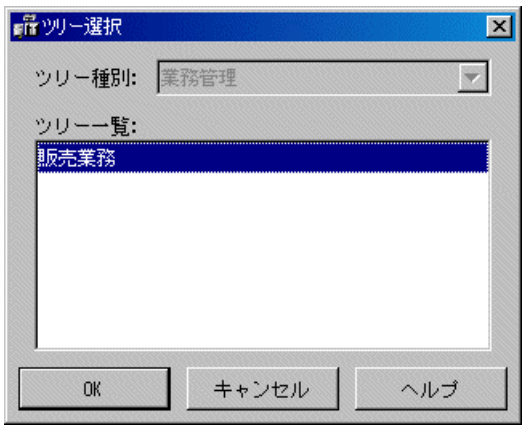


6. 配付先を設定します。
   a) [稼働監視の設定]ダイアログボックスの[配付先]タブを表示し、[追加]ボタンをクリックします。

b) [ツリー選択]ダイアログボックスで、配付先のツリーを選択し、[OK]ボタンをクリックします。

ここでは、以下のように指定します。

- [ツリー一覧]：[販売業務]

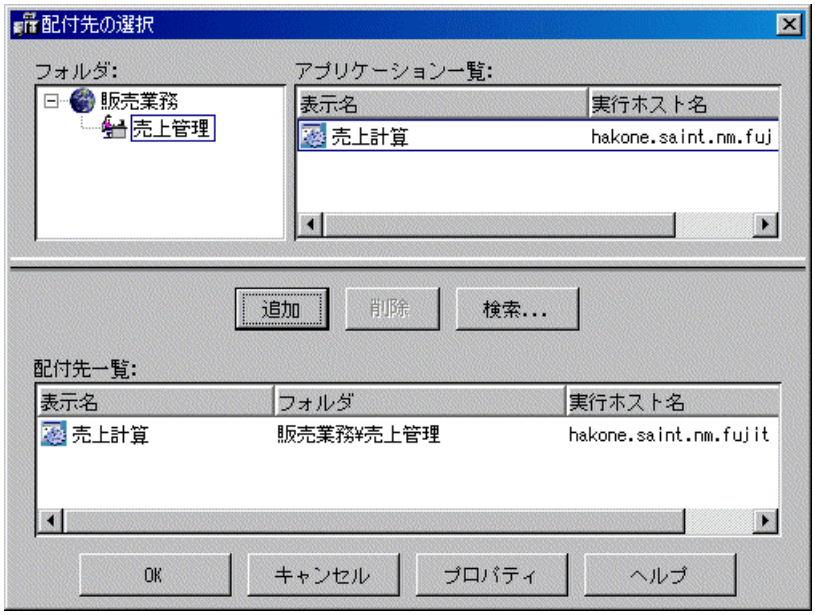


c) [配付先の選択]ダイアログボックスで、配付先のフォルダとアプリケーションを選択し、[追加]ボタンをクリックします。

ここでは、以下のように指定します。

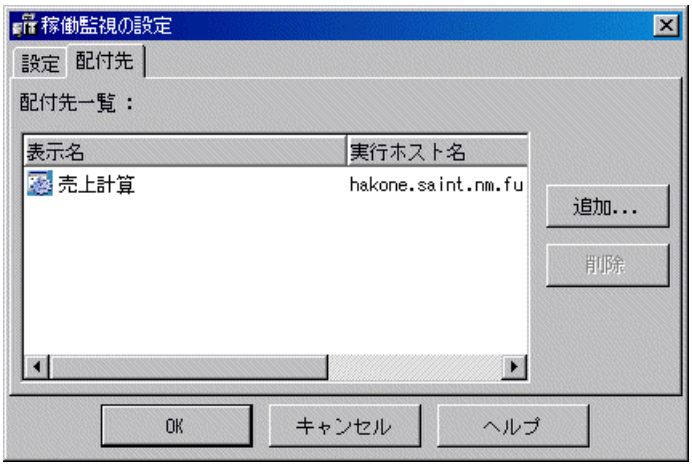
- [フォルダ]：[販売業務]－[売上管理]
- [アプリケーション一覧]：[売上計算]

d) [配付先一覧]に追加されたアプリケーションを確認し、[OK]ボタンをクリックします。



7. 設定を完了します。

[稼働監視の設定]ダイアログボックスで、[OK]ボタンをクリックします。



8. ポリシーを配付し、適用します。

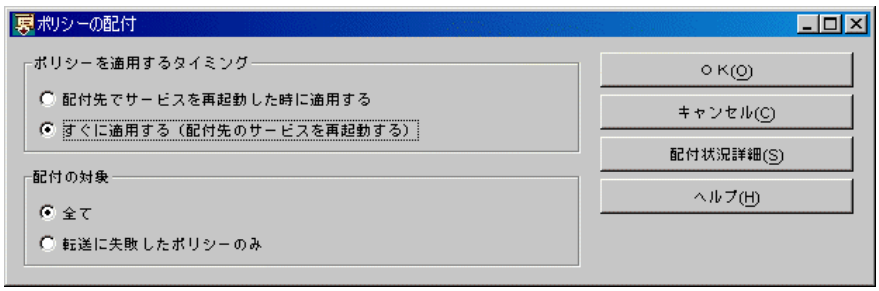
a) [アプリケーション管理]ウィンドウで、[ポリシー]メニューから[ポリシーの配付]を選択します。

b) ポリシーの配付を確認するメッセージボックスが表示されるので、[はい]ボタンをクリックします。

c) [ポリシーの配付]ダイアログボックスで、[ポリシーを適用するタイミング]と[配付の対象]を選択し、[OK]ボタンをクリックします。

ここでは、以下のように指定します。

- [ポリシーを適用するタイミング]：[すぐに適用する(配付先のサービスを再起動する)]
- [配付の対象]：初期値



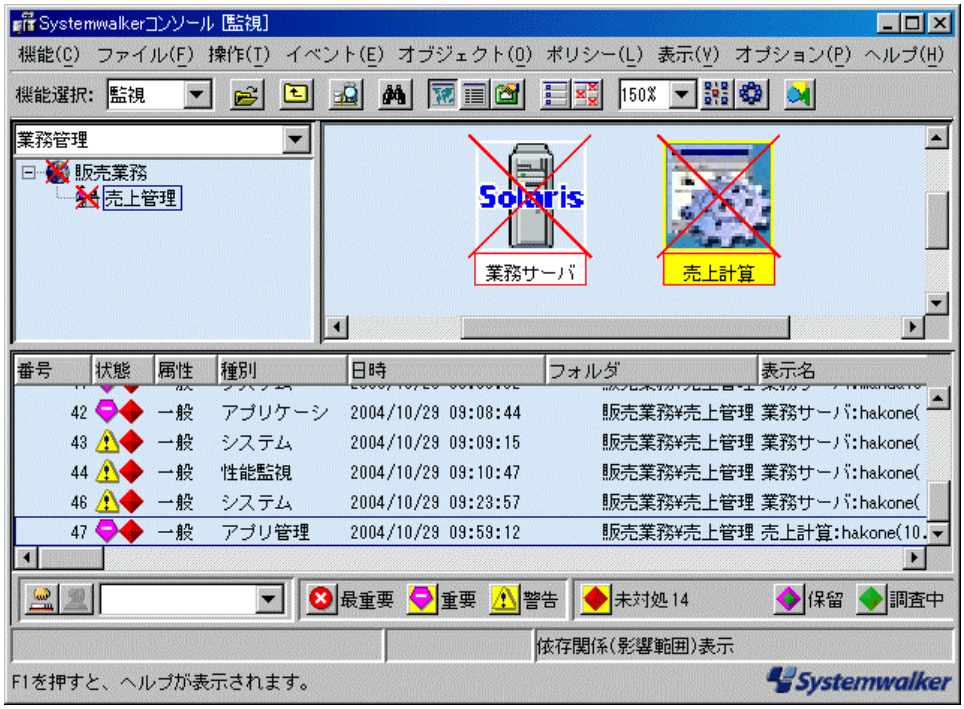
d) ポリシーの配付が終了したら、[アプリケーション管理]ウィンドウで[操作]メニューから[終了]を選択し、[アプリケーション管理]ウィンドウを閉じます。

3.5.4 アプリケーションの稼働監視

指定したアプリケーションを監視します。

ここでは、業務サーバ上のアプリケーション“gprof”（表示名：売上計算）を稼働監視します。

1. 運用管理クライアントでSystemwalkerコンソールを起動します。
2. [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウにします。
3. [ツリー選択]で[業務管理]を選択し、業務管理ツリーを表示します。
4. 業務サーバ上のアプリケーションである“gprof”（表示名：売上計算）が停止すると、運用管理クライアントにイベントが通知されます。
   - 種別：アプリ管理
   - 表示名：売上計算:hakone
   - メッセージ：UX:apagt: エラー: 10010: gprof が 0:00 から 0:00 までの稼働ポリシーに違反しました。 (/usr/apl/gprof)



3.6 監視イベントを監視対象からはずす

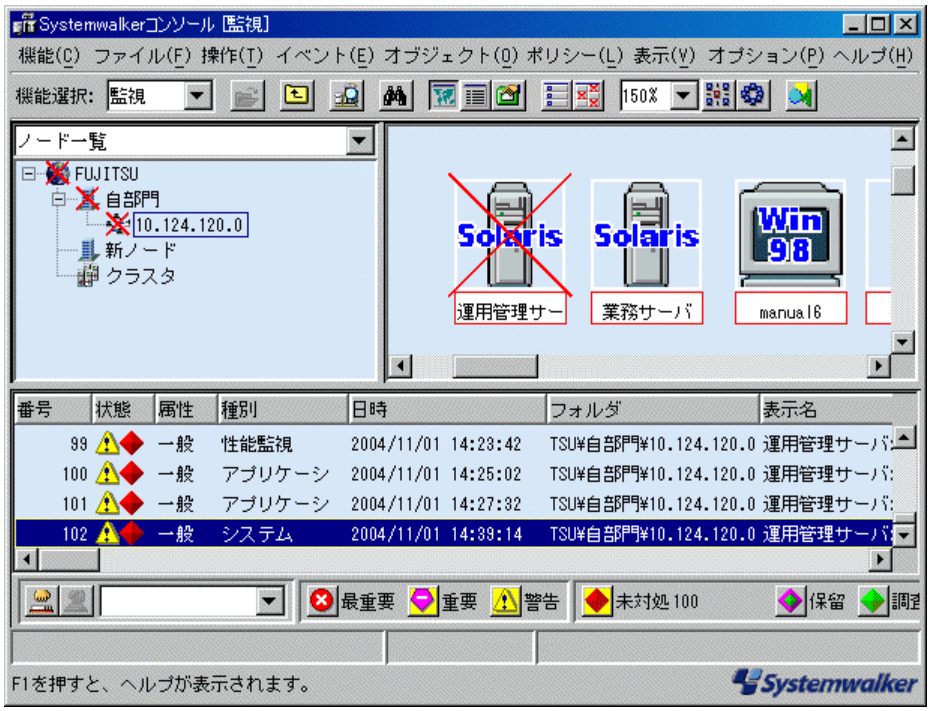
発生した監視イベントの中で、監視する必要のないイベントは、監視イベント一覧に表示しないように定義できます。

定義方法には、以下の二つの方法があります。

- 運用管理サーバに通知されるが表示しない方法
- 被監視サーバ側で運用管理サーバに通知しない方法

ここでは、前者の定義手順について説明します。後者の定義手順は、運用管理サーバで通知の条件のポリシーを作成して、被監視サーバにポリシー配付する方法と、被監視サーバ側でローカルに定義する方法があります。詳細については、“Systemwalker Centric Manager 使用手引書監視機能編”を参照してください。

1. 運用管理クライアントでSystemwalkerコンソールを起動します。
2. [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウを表示します。
3. 監視対象からはずします。
   a) [監視イベント一覧]から、今後、表示が不用な監視イベントを選択します。
   b) [イベント]メニューから[アクション定義の設定(監視対象からはずす)]を選択します。



4. イベントの定義を行います。

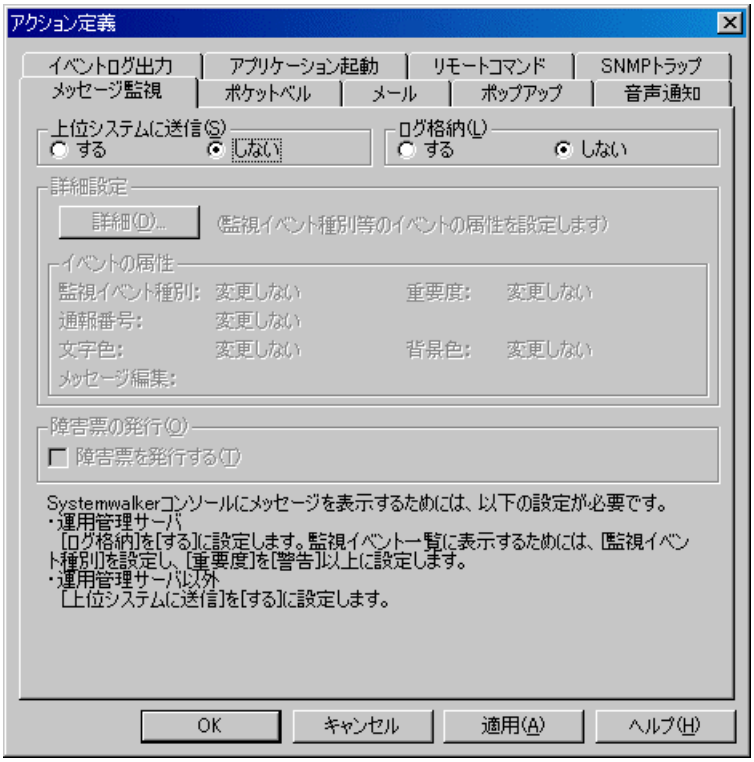
   [イベント監視の条件定義]ダイアログボックスおよび[アクション定義]ダイアログボックスが表示されます。

   a) [アクション定義]ダイアログボックスで、[メッセージ監視]タブ

を選択、以下の指定をし、[OK]ボタンをクリックします。

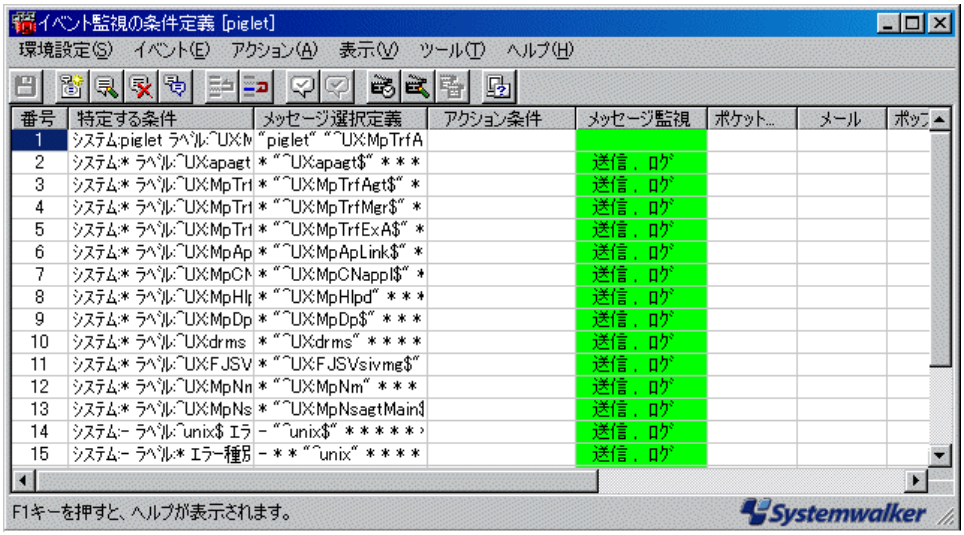
ここでは、以下のように指定します。

- [上位システムに送信]:[しない]
- [ログ格納]:[しない]



5. 定義を保存します。

   [イベント監視の条件定義]ウィンドウで、[環境設定]メニューから[定義の保存]を選択します。ここまでに行った定義が、新しいイベント監視の条件としてリストに追加されます。



6. 処理を完了します。

   [イベント監視の条件定義]ウィンドウで、[環境設定]メニューから[終了]を選択し、ウィンドウを閉じます。定義が完了すると、監視対象からはずすように指定したイベントは、監視イベント一覧に表示されなくなります。

ポイント

メッセージに日時などの可変文字が含まれている場合

メッセージに日時などの可変文字が含まれている場合は、特定する条件を変更することで同様に監視対象からはずします。

監視対象からはずしたイベントを監視する

監視対象からはずしたイベントを監視するには、以下の手順で行います。

a) [スタート]メニューから[プログラム]-[Systemwalker Centric Manager]-[環境設定]-[システム監視設定]を選択し、[システム監視設定]ダイアログボックスを表示します。

b) [システム監視設定]ダイアログボックスで[イベント監視の条件定義]ボタンをクリックし、[イベント監視の条件定義]ウィンドウを表示します。

c) 監視対象からはずした条件を選択した後、[イベント]メニューから[イベントの削除]を選択します。

3.7 監視イベントの対処を自動実行する

発生した監視イベントに応じてコマンドを発行したり、アプリケーションを起動して自動的に対処を行うことができます。イベントが発生したときに、イベントに応じて定義されている対処をアクションといいます。

ここでは、“DBの拡張に失敗しました”というイベントに対して、“/usr/apl/recover.sh”というリモートコマンドを自動実行する手順を説明します。

1. [システム環境設定[接続先設定]]ダイアログボックスを表示します。

   運用管理クライアントで[スタート]メニューから[プログラム]－[Systemwalker Centric Manager]－[環境設定]－[システム監視設定]を選択し、[システム環境設定[接続先設定]]ダイアログボックスを表示します。

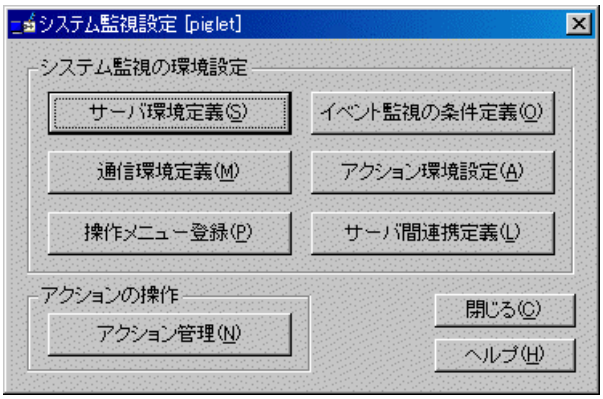
2. 接続先について指定します。

   [システム環境設定[接続先設定]]ダイアログボックスで、[ホスト名]、[ユーザ名]および[パスワード]を指定し、[OK]ボタンをクリックします。

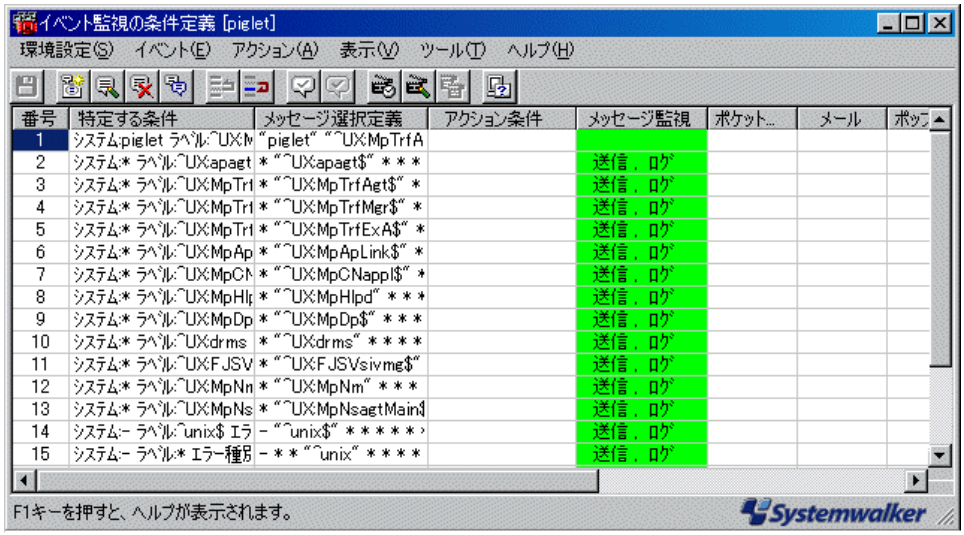
   ここでは、以下のように指定します。

   ― [ホスト名]：“piglet”
   ― [ユーザ名]：“swcm”
   ― [パスワード]：“unyou”

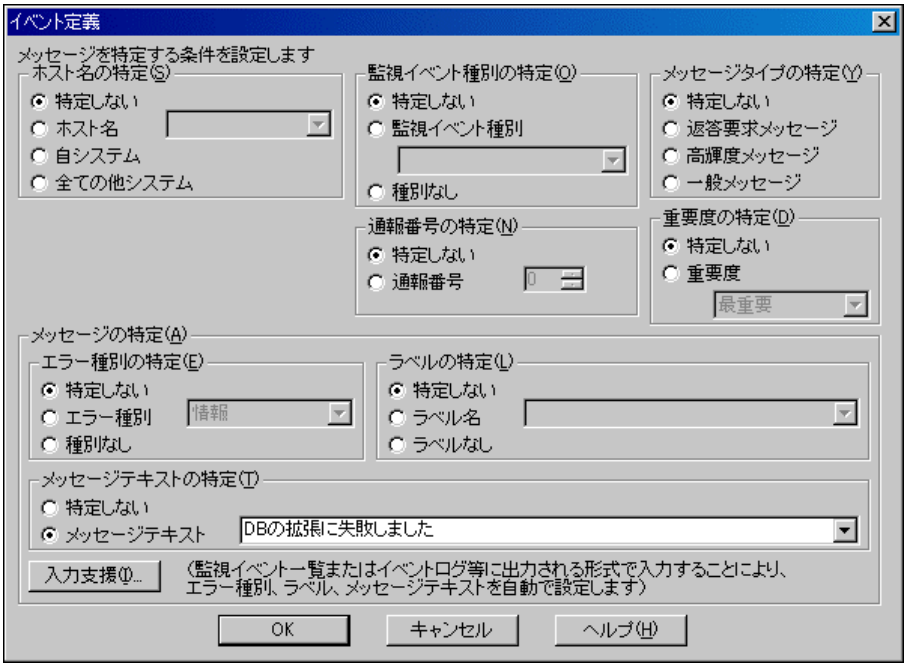
3. ［システム監視設定］ダイアログボックスで、［イベント監視の条件定義］ボタンをクリックします。



4. アクションを定義するイベントを特定します。
   a) ［イベント監視の条件定義］ダイアログボックスで、［イベント］メニューから［イベントの追加］を選択します。



   b) ［イベント定義］ダイアログボックスで、アクションの定義対象となるイベントを特定する条件を設定し、［OK］ボタンをクリックします。
   ここでは、以下のように指定します。
   - ［メッセージテキスト］：“DBの拡張に失敗しました”
   - そのほかの項目：初期値

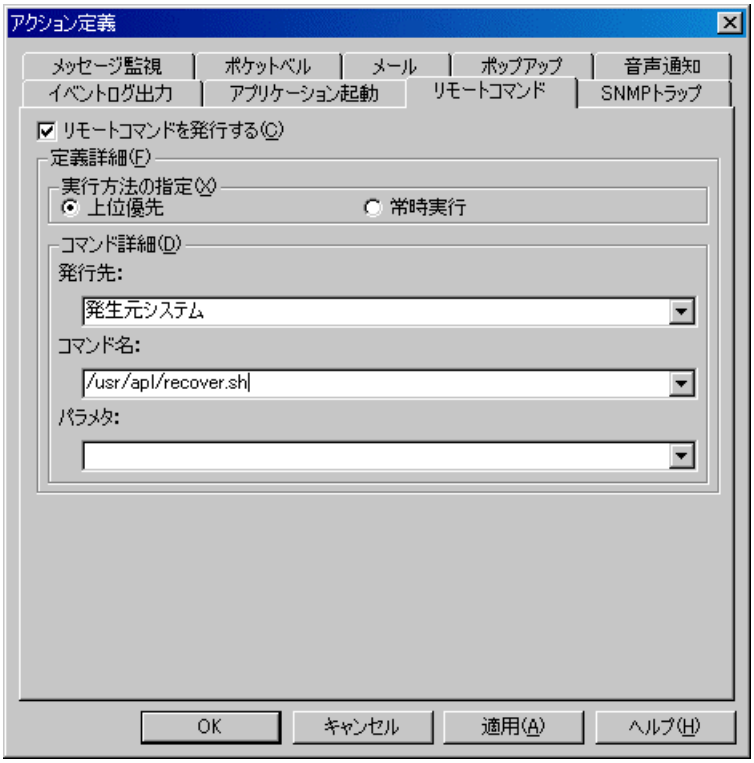


5. アクションを定義します。
   [アクション定義]ダイアログボックスで、必要な情報を設定します。
   ここでは、[メッセージ監視]タブと[リモートコマンド]タブについて設定します。
   a) [イベント監視の条件定義] ダイアログボックスで、[アクション]メニューから[アクションの設定]を選択します。
   b) [アクション定義]ダイアログボックスで、[メッセージ監視]タブの情報を設定します。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [上位システムに送信]：[する]
      - [ログ格納]：[する]
      - そのほかの項目：初期値

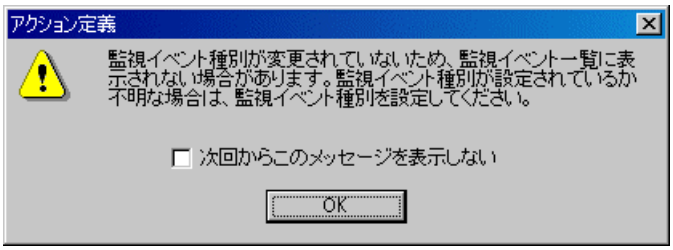
c) [リモートコマンド]タブの情報を設定し、[OK]ボタンをクリックします。

ここでは、以下のように設定します。

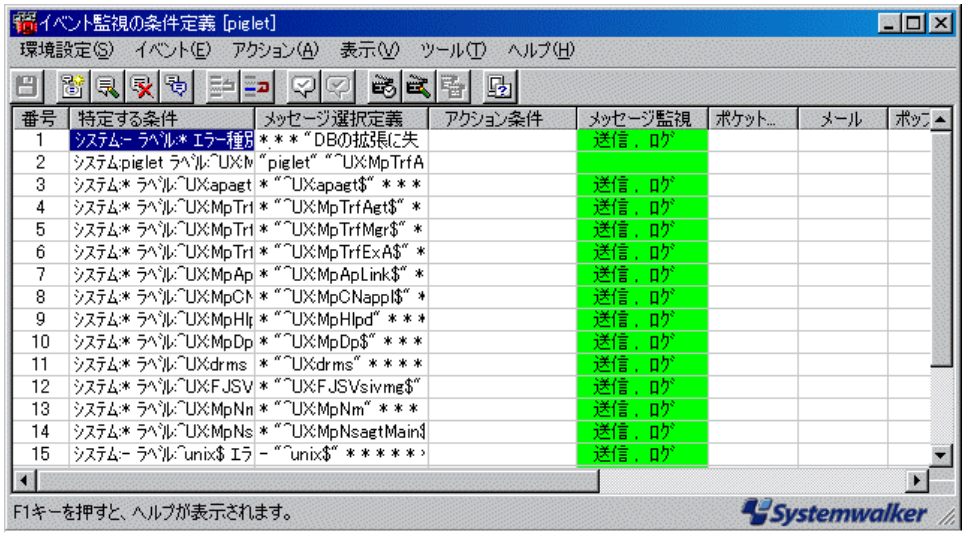
- [リモートコマンドを発行する]：チェック
- [発行先]：“発生元システム”
- [コマンド名]：“/usr/apl/recover.sh”
  (パス名は、コマンドが実行されるシステム上のパス名で指定します。)
- そのほかの項目：初期値



6. 以下のメッセージボックスが表示されます。ここでは、[OK]をクリックします。



7. 定義を保存します。
[イベント監視の条件定義]ウィンドウで、[環境設定]メニューから[定義の保存]を選択します。ここまでに行った定義が、新しいイベント監視の条件としてリストに追加されます。



8. 定義を終了します。
   [イベント監視の条件定義]ウィンドウを閉じます。
   [環境設定]メニューから[終了]を選択します。
   アクションが定義された後、条件を満たすイベントが発生すると、指定したコマンドが自動的に実行されます。

ここでは、リモートコマンドを発行する定義手順を説明していますが、そのほかにも、ポケットベルやメールによる通知を行ったり、重要度の変更を行うことができます。詳細については、“Systemwalker Centric Manager 使用手引書 監視機能編”を参照してください。

3.8 WWWブラウザで監視する

Systemwalker Centric Managerがインストールされていないサーバまたはクライアントでも、ブラウザを使ってコンソール(Systemwalker Webコンソール)として利用することができます。利用できるページ(機能)は、以下のとおりです。

- Systemwalker Webコンソール
- Systemwalker Webコンソール(モバイル版)
- ヘルプデスク
- 資源配付

ここでは、WWWブラウザを用いてイベントを監視する方法について説明します。

WWWサーバの定義

Systemwalker Webコンソールを利用するためには、運用管理サーバにWWWサーバの製品が導入されていることが必要です。また、WWWサーバに対するディレクトリ(エイリアス)の定義を行う必要があります。

ここでは、Apacheを利用した場合の設定方法について説明します。

1. httpd.conf(Solaris OE標準付属のApacheの場合は、/etc/apache配下、それ以外のApacheの場合は、/usr/local/apache/conf配下)内の“ResourceConfig”設定行がコメント化されている場合は、コメントを外します。
2. httpd.conf内に、以下のレコードを設定します。

```
ScriptAlias  /MpScript/              "/opt/systemwalker/inet/scripts/"
Alias /Systemwalker/CentricMGR/      "/opt/FJSVfsjvc/java/classes/"
Alias /SystemWalker/CentricMGR/      "/opt/FJSVfsjvc/java/classes/"
Alias /Systemwalker/                 "/opt/systemwalker/inet/wwwroot/"
Alias /SystemWalker/                 "/opt/systemwalker/inet/wwwroot/"
```

アクセス権の設定について

Systemwalker Centric Managerインストール直後はアクセス権の設定がされておらず、だれでもアクセスできるような設定になっています。アクセスを制限する必要がある場合は、“Systemwalker Centric Manager 導入手引書”を参照し、アクセス権の設定を行ってください。

WWWブラウザでイベントを監視する

Systemwalker Webコンソールの操作手順として、ここでは障害を監視する手順を説明します。そのほかの機能については、“Systemwalker Centric Manager 使用手引書 監視機能編”またはSystemwalker Web連携ページの“ヘルプのページ”を参照してください。また、利用できるブラウザについては、“Systemwalker Centric Manager 解説書”を参照してください。

1. WWWブラウザを起動します。
2. Systemwalker Web連携ページを起動します。
   a) URLとして、“http://運用管理サーバのコンピュータ名またはIPアドレス/Systemwalker/”を指定し、Systemwalker Web連携ページを表示します。

ここでは、以下のように指定します。

- [アドレス]:“http://10.124.120.28/Systemwalker/”

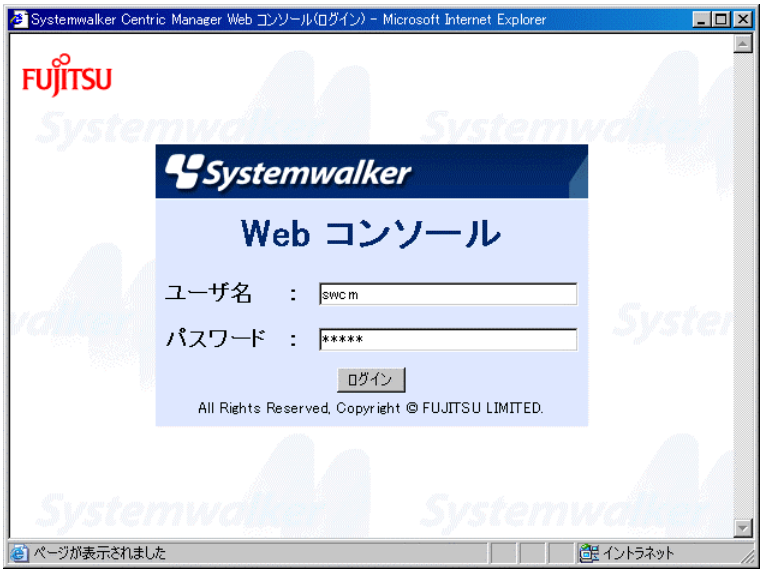
b) Systemwalker Web連携ページで、[Systemwalker Web連携の各機能を使用する]をクリックします。

c) Systemwalker Web連携ページで、[Systemwalker Webコンソール]をクリックします。

d) 以下のメッセージボックスで、[はい]または[いいえ]をクリックすると、ログインページが表示されます。

e) ログインページで、[ユーザ名]および[パスワード]を入力し、[ログイン]ボタンをクリックします。
ここでは、以下のように指定します。

- [ユーザ名]:“swcm”
- [パスワード]:“unyou”



f) Systemwalker Centric Manager Webコンソールページで、ツールバーの[設定メニュー]から[イベント表示設定]を選択します

g) [イベント表示設定]ダイアログボックスで、イベント監視ページで表示する設定を行い、[設定]ボタンをクリックします。
ここでは、以下のように指定します。

- [状態]：すべてチェック

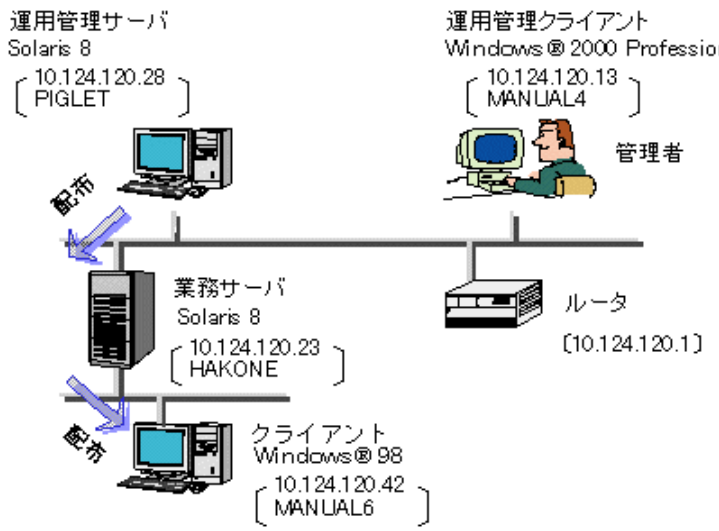
- [重要度]：すべてチェック
- [種別]：すべてチェック
- [イベントを折り返して表示する]：チェック
- [ツリー／オブジェクト一覧のフォルダ／オブジェクトを点灯させない（高速化）]：チェック

h) 以下のメッセージボックスが表示されたら、[OK]ボタンをクリックしてください。

i) Systemwalker Centric Manager Webコンソールページで、イベントの監視、対処を行います。

第4章　資源を配付する

以下のコンピュータ構成を例として、運用管理サーバから業務サーバおよびクライアントへ資源を配付する手順を説明します。



配付する資源は、すでに運用管理サーバ上にあり、業務で使用するファイル資源を業務サーバとクライアントに配付します。

ポイント

資源を配付する機能に関しては、業務サーバと部門管理サーバに機能差はありません。業務サーバの代りに部門管理サーバを使用する場合は、説明の中の“業務サーバ”を“部門管理サーバ”に置き換えてお読みください。

ここでは、運用管理サーバ上の配付資源と、業務サーバ上、クライアント上の資源適用先ディレクトリは、以下のように指定します。
配付資源については、事前に作成しておく必要があります。

- 運用管理サーバ上の配付資源

/etc/hosts

- 業務サーバ上の資源適用先ディレクトリ

  /tmp

- クライアント上の資源適用先ディレクトリ

  c:¥

また、配付する資源の名前は、以下のように指定します。

- 業務名：販売業務
- 資源グループ名：SALESGRP

資源を配付する機能を使用するときの共通事項として、以下の項目について説明します。

- 資源グループ
- 業務
- メンテナンス版数
- 適用
- [資源配付]ウィンドウの起動
- [資源配付]ウィンドウの構成

資源グループ

資源グループとは、プログラムやデータなどの資源をまとめたものです。

業務

業務とは、関連のある複数のプログラムやデータなどの資源(ファイル)をまとめたものです。使用するプログラムやデータは、同時に送ります。資源配付でも、同じ業務で使用するプログラムやデータなどの資源(ファイル)は、業務という単位で管理します。

メンテナンス版数

メンテナンス版数とは、配付する業務、配付先システム、適用のタイミングなどをパッケージングしてまとめたものです。作成したメンテナンス版数が、資源を配付する単位になります。

メンテナンス版数には、個別メンテナンス版数と共通メンテナンス版数があります。

個別メンテナンス版数は、任意のサーバに資源を配付することができます。特定のサーバやその配下のクライアントだけ適用させたい資源を配付する場合に有効です。

共通メンテナンス版数としてまとめられた資源は、すべてのサーバに配付されます。配付はすべてのサーバに対して行われますが、各サーバ、クライアントへの適用はそれぞれの定義に従います。これによって、管理者は、均一のシステムで、どのサーバやクライアントが適用するかを意識しないで、リモート保守をすることができます。

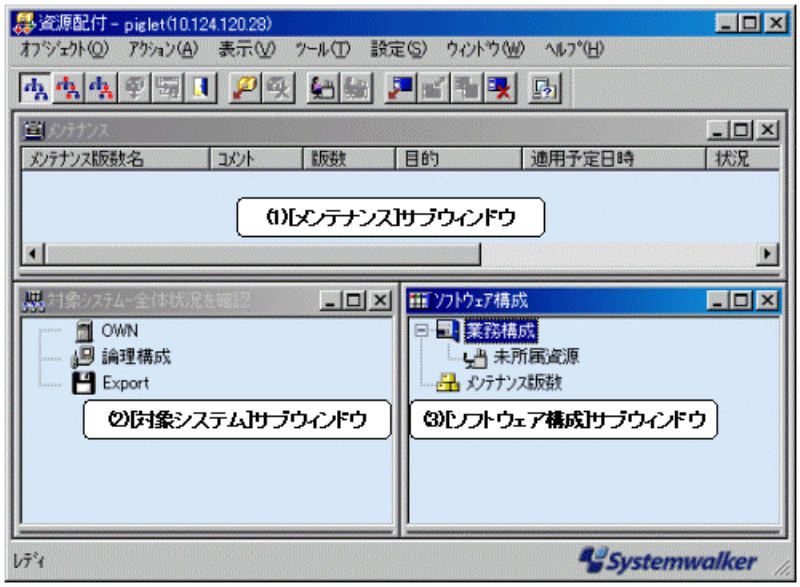
適用

資源の適用とは、配付された資源を定義されたディレクトリにコピーすることです。

[資源配付]ウィンドウの起動

以下のどちらかの操作により、[資源配付]ウィンドウを起動します。

- [スタート]メニューから[プログラム]－[Systemwalker Centric Manager]－[資源配付]を選択する。
- [Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウで[操作]メニューから[資源配付の操作]を選択する。



[資源配付]ウィンドウの構成

[資源配付]ウィンドウは、以下の3つのサブウィンドウから構成されています。

(1) [メンテナンス]サブウィンドウ

資源配付のメンテナンス作業の状態を表示します。

(2) [対象システム]サブウィンドウ

資源を配付するサーバおよびクライアントの配付経路を表示します。

(3) [ソフトウェア構成]サブウィンドウ

資源と業務の構成情報を表示します。

ここでは、以下の処理を行う方法について説明します。

4.1 配付経路を定義する
4.2 資源を登録する
4.3 業務サーバの適用先を定義する
4.4 クライアントの適用先を定義する
4.5 メンテナンス版数を作成する
4.6 業務サーバに資源を配付する
4.7 クライアントに資源を配付する
4.8 資源の配付状況を確認する

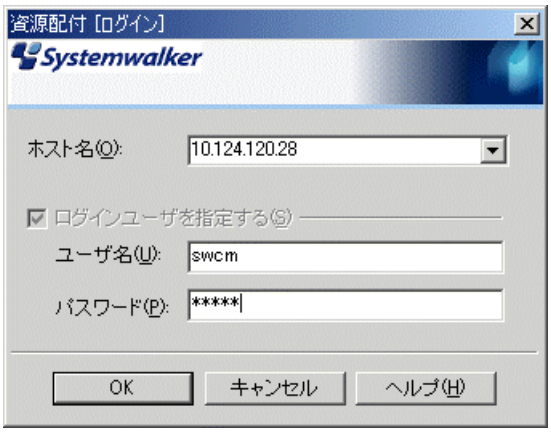
4.1 配付経路を定義する

運用管理サーバから資源を配付する配付経路を定義します。
ここでは、配付先の業務サーバを定義します。

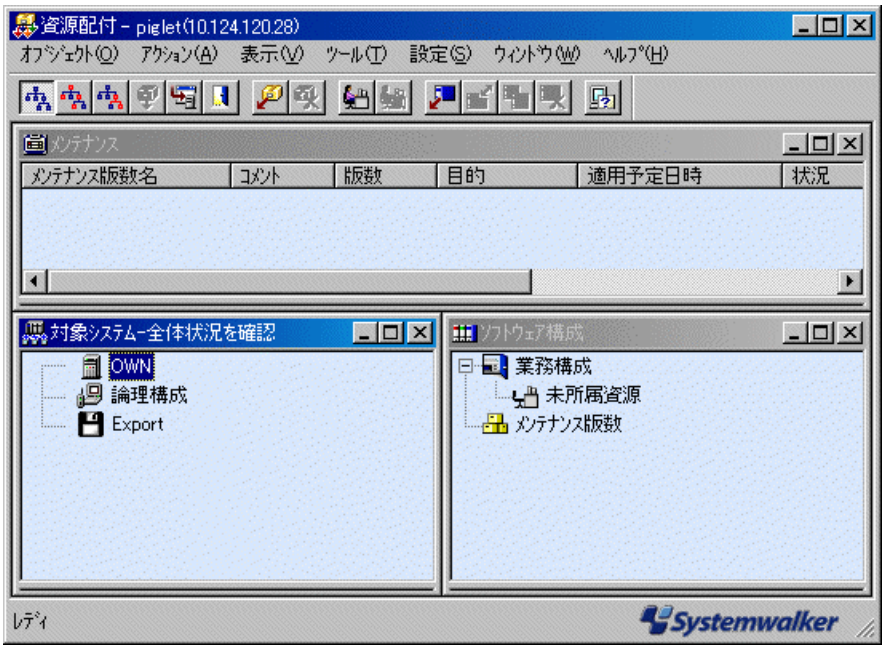
注意

クライアントへの配付経路は、運用管理サーバに、事前に定義することができます。ただし、クライアントが、上位のサーバにアクセスした時点で、そのサーバ上に、クライアントが自動的に登録されるため、ここでは、この機能を利用しません。

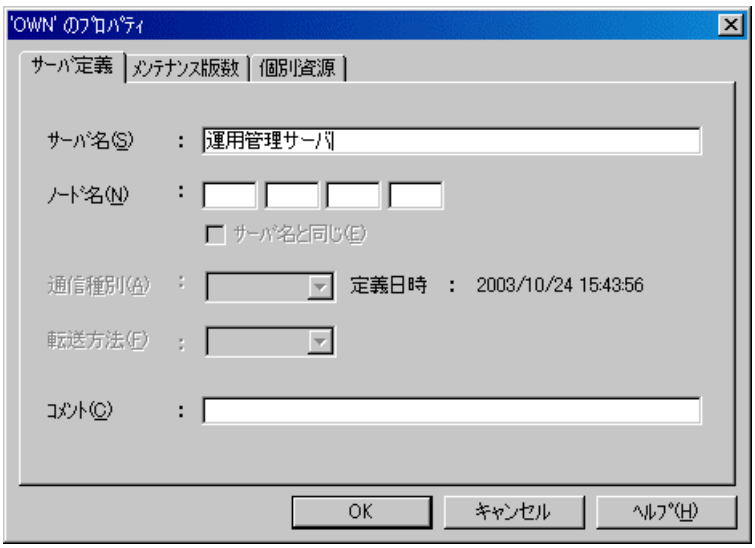
1. 運用管理クライアントで[資源配付]ウィンドウを起動します。
   運用管理サーバにログインし、[資源配付[ログイン]]ダイアログボックスを表示します。[ホスト名]、[ユーザ名]および[パスワード]を入力し、[OK]ボタンをクリックします。
   ここでは、以下のように指定します。
   - [ホスト名]:[10.124.120.28]
   - [ユーザ名]:“swcm”
   - [パスワード]:“unyou”



2. 配付元の運用管理サーバを登録します。
   a) [対象システム]サブウィンドウで、[OWN]を選択します。
   b) [オブジェクト]メニューから[プロパティ]選択します。

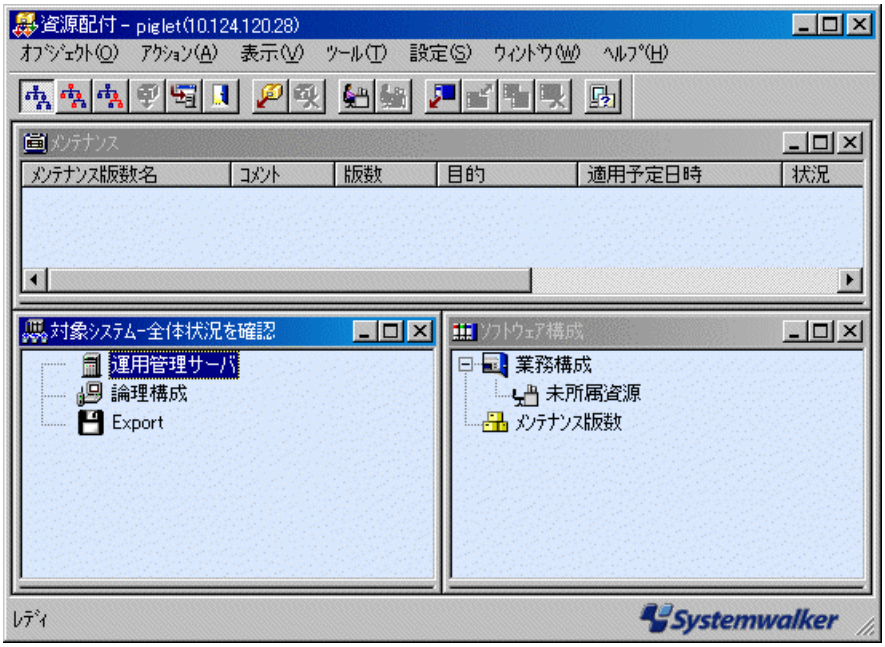


3. [‘OWN’のプロパティ]ダイアログボックスの[サーバ定義]タブを選択します。
   a) [サーバ名]に管理しやすい任意の名前を指定し、[OK]ボタンをクリックします。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [サーバ名]：“運用管理サーバ”
      - そのほかの項目：初期値



4. 配付先の業務サーバを登録します。

a) [対象システム]サブウィンドウで、[運用管理サーバ]を選択します。



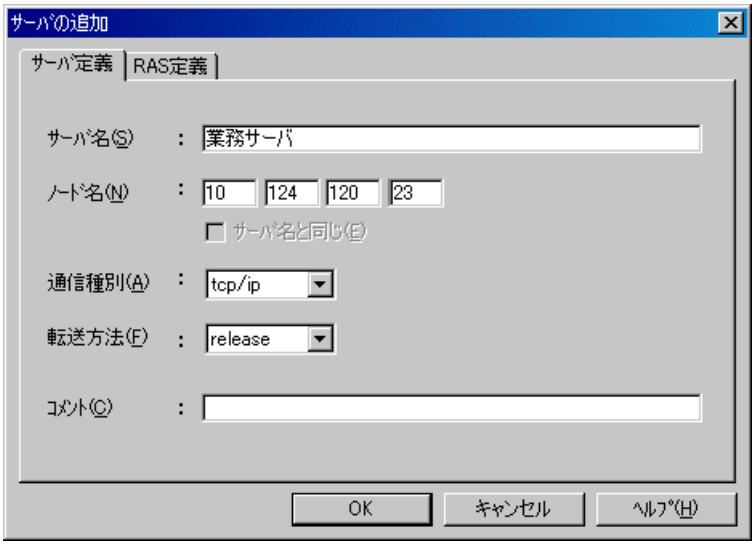
b) 以下のどちらかの方法で、[サーバの追加]ダイアログボックスを表示します。

- [オブジェクト]メニューから[新規作成]－[サーバ]を選択する。
- [対象システム]サブウィンドウで、[運用管理サーバ]を右クリックし、ポップアップメニューから[サーバの追加]を選択する。

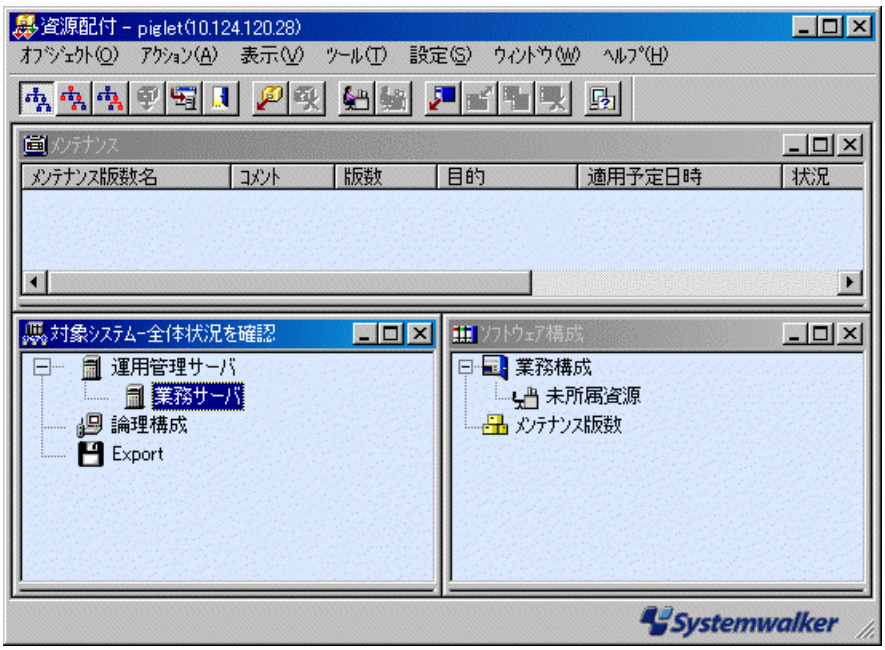
c) [サーバの追加]ダイアログボックスで、[サーバ定義]タブを選択し、[OK]ボタンをクリックします。

ここでは、以下のように指定します。

- [サーバ名]：“業務サーバ”
- [ノード名]：“10.124.120.23”
- そのほかの項目：初期値



d) 定義の終了後、[対象システム]サブウィンドウに、[業務サーバ]が追加されます。



ポイント

ホスト名で設定する場合

ここでは、IPアドレスでの設定を行っていますが、ホスト名で設定を行いたい場合は、[資源配付 サーバ環境設定]ダイアログボックスから

定義の変更を行ってください。

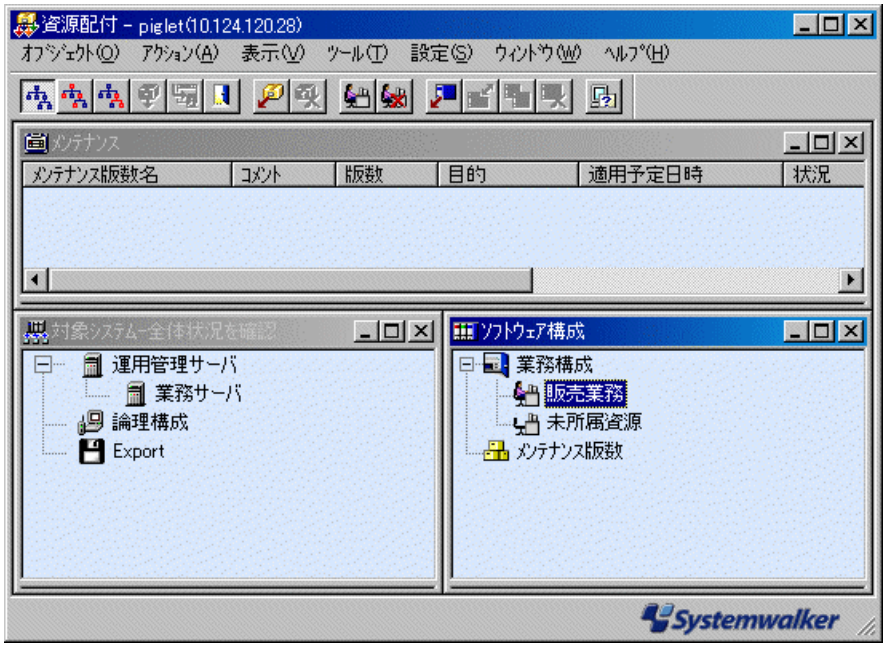
4.2 資源を登録する

運用管理クライアント上で配付する資源を登録する手順を説明します。
業務名、資源グループ名は、以下のように定義します。

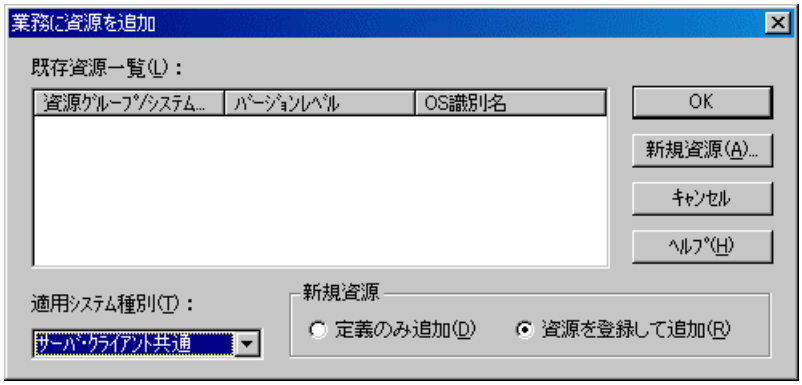
- パス名：/etc/hosts
- 業務名：“販売業務”
- 資源グループ名：“SALESGRP”
- 適用システム：サーバおよびクライアント

1. 運用管理クライアントで[資源配付]ウィンドウを起動します。
2. 業務を追加します。
   a) [アクション]メニューから[業務の追加]を選択します。
   b) [業務の追加]ダイアログボックスで業務を定義し、[OK]ボタンをクリックします。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [業務名]：“販売業務”
      - そのほかの項目：初期値

c) 定義の終了後、[ソフトウェア構成]サブウィンドウに、[販売業務]が追加されます。



3. 業務に資源を登録します。
   a) 資源の登録先を[ソフトウェア構成]サブウィンドウから選択します。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [ソフトウェア構成]サブウィンドウ：[販売業務]
   b) [アクション]メニューから[資源の登録]を選択します。
   c) [業務に資源を追加]ダイアログボックスで、資源を配付するサーバ/クライアントの種別を選択し、[新規資源]ボタンをクリックします。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [適用システム種別]：[サーバ・クライアント共通]
      - そのほかの項目：初期値



d) [資源の登録]ダイアログボックスで登録するファイルの情報を指定し、[次へ]ボタンをクリックします。

ここでは、以下のように指定します。

- [資源種別]：[unix#txt]
- [パス名]：“/etc/hosts”
- [資源を圧縮して登録]：チェックをはずす
- そのほかの項目：初期値

UNIXの資源種別として、一般的なものに以下のものがあります。

- unix#txt：テキストファイルを資源として登録する場合に選択します。
- unix#bnry：バイナリファイルを資源として登録する場合に選択します。

- unix#spt：シェル・スクリプトを資源として登録する場合に選択します。

詳細は、“Systemwalker Centric Manager 使用手引書 資源配付機能編”を参照してください。

資源を圧縮して登録

［資源を圧縮して登録］の機能を使用するには、“Microsoft® Windows® ソフトウェア開発キット”の“COMPRESS”が必要です。

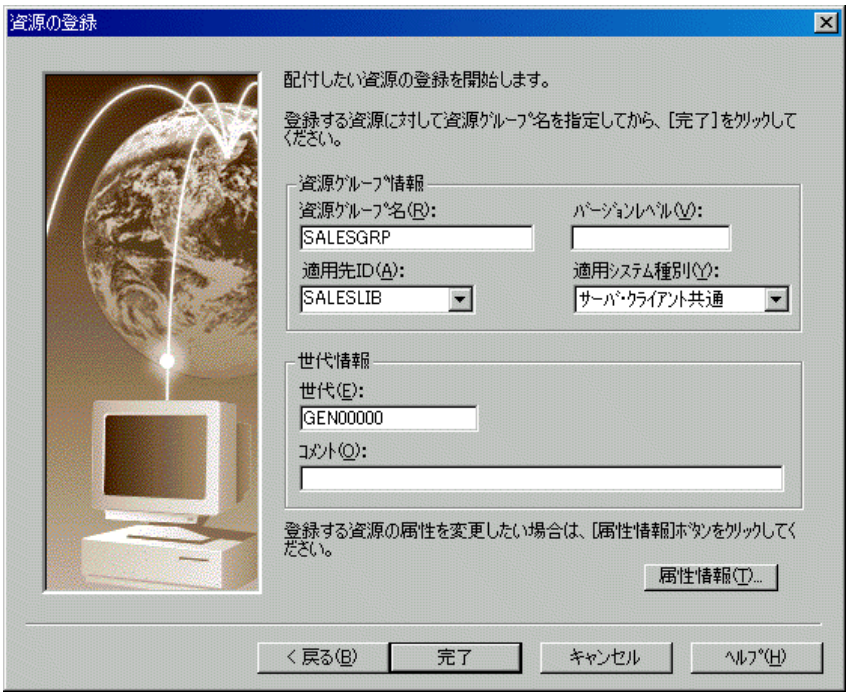
unix#txt以外の形式の配付

unix#txt以外の形式を配付する場合は、データをアップロードしてください。詳細は、“Systemwalker Centric Manager 使用手引書 資源配付機能編”を参照してください。

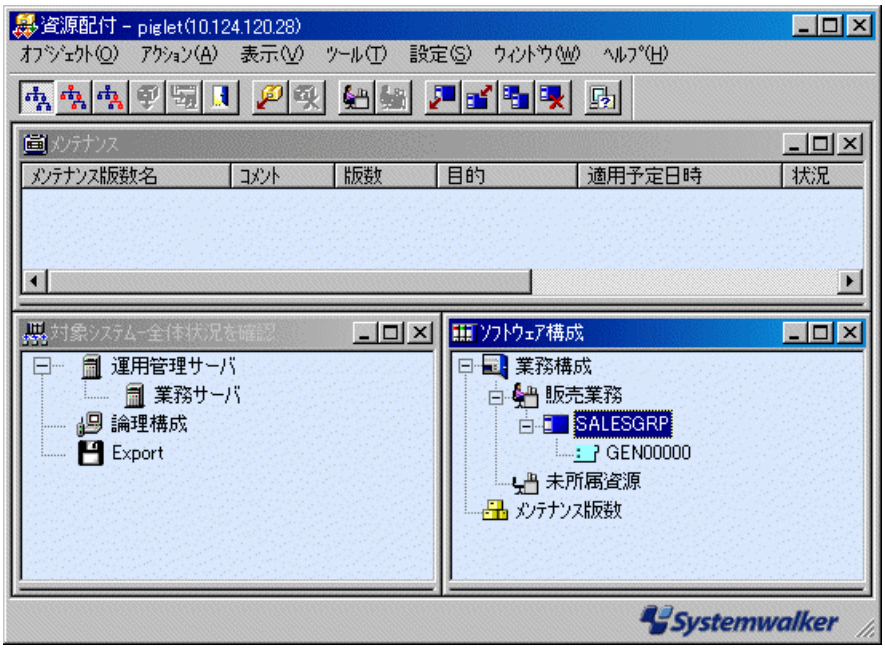
e) ［資源の登録］ダイアログボックスで、資源グループ情報を指定し、［完了］ボタンをクリックします。

ここでは、以下のように指定します。

- ［資源グループ名］：“SALESGRP”
- ［適用先ID］：“SALESLIB”
- そのほかの項目：初期値



f) 資源の登録の終了後、［ソフトウェア構成］サブウィンドウに、［SALESGRP］が追加されます。



ここで指定した“適用先ID”は、業務サーバ上に資源を適用するために必要です。詳細は、“4.3 業務サーバの適用先を定義する”を参照してください。

4.3 業務サーバの適用先を定義する

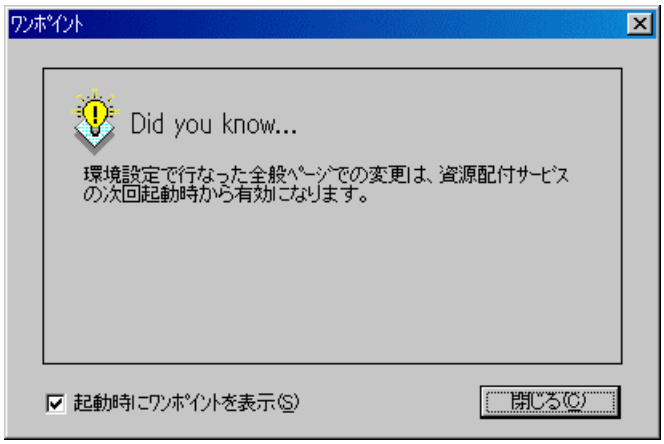
業務サーバの適用先の定義手順を説明します。業務サーバの定義は、業務サーバ自身で行う方法と運用管理クライアントから行う方法の2とおりの方法があります。ここでは、運用管理クライアントから定義する手順を説明します。

業務サーバに対して資源を適用する場合は、“適用先ID”の設定が必要です。“適用先ID”とは、資源を適用するディレクトリにつける識別子のことです。ここで設定したディレクトリに、配付された資源が格納されます。

以下の操作を運用管理クライアント上で行います。

適用先ディレクトリは、実際に存在するディレクトリを指定してください。

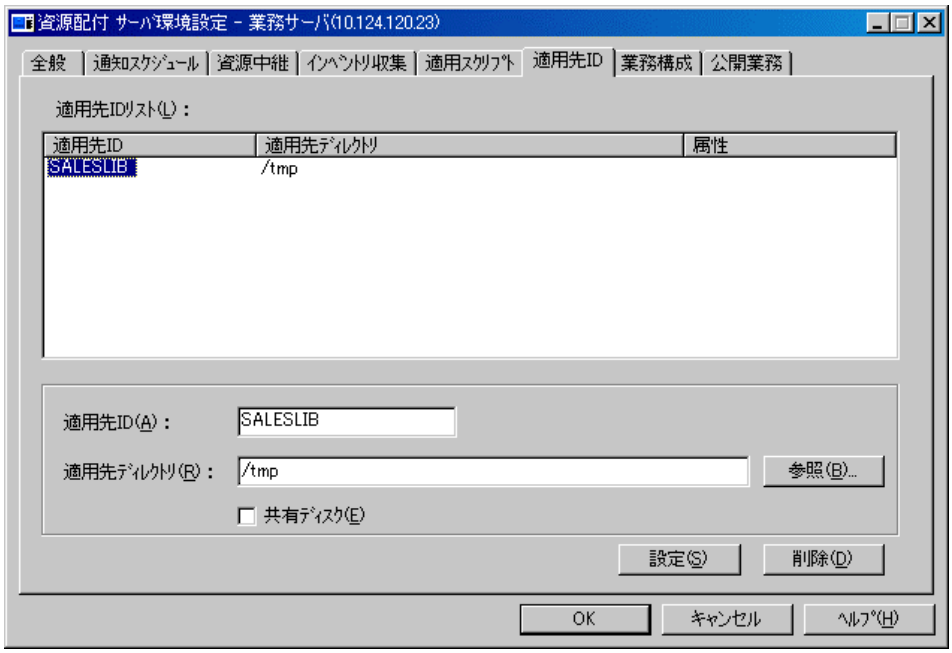
1. 運用管理クライアントで[資源配付]ウィンドウを起動します。
2. [対象システム]サブウィンドウで、適用先を定義するサーバを選択します。
   a) ここでは、以下のように指定します。
      - [対象システム]サブウィンドウ：[業務サーバ]
   b) [設定]メニューから[ポリシー]－[サーバ環境]を選択します。
   c) 以下のダイアログボックスで、[閉じる]ボタンをクリックします。



3. [資源配付－サーバ環境設定]ダイアログボックスで、[適用先ID]タブを選択し、適用先を定義します。
   a) 適用先IDと適用先ディレクトリを指定し、[設定]ボタンをクリックします。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [適用先ID]：“SALESLIB”
      - [適用先ディレクトリ]：“/tmp”

      指定したディレクトリは、“SALESLIB”として定義されます。適用先IDとして“SALESLIB”が定義されている資源は、このディレクトリに適用されます。

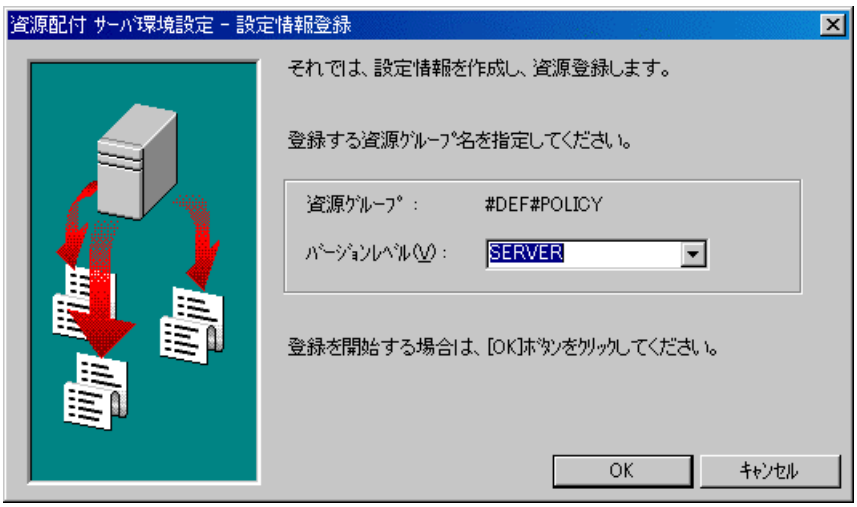
b) [適用先IDリスト]に指定した適用先IDが追加されたことを確認し、[OK]ボタンをクリックします。



c) [資源配付 サーバ環境設定ー設定情報登録]ダイアログボックスで資源グループ名を登録し、[OK]ボタンをクリックします。

ここでは、以下のように指定します。

- [バージョンレベル]：初期値



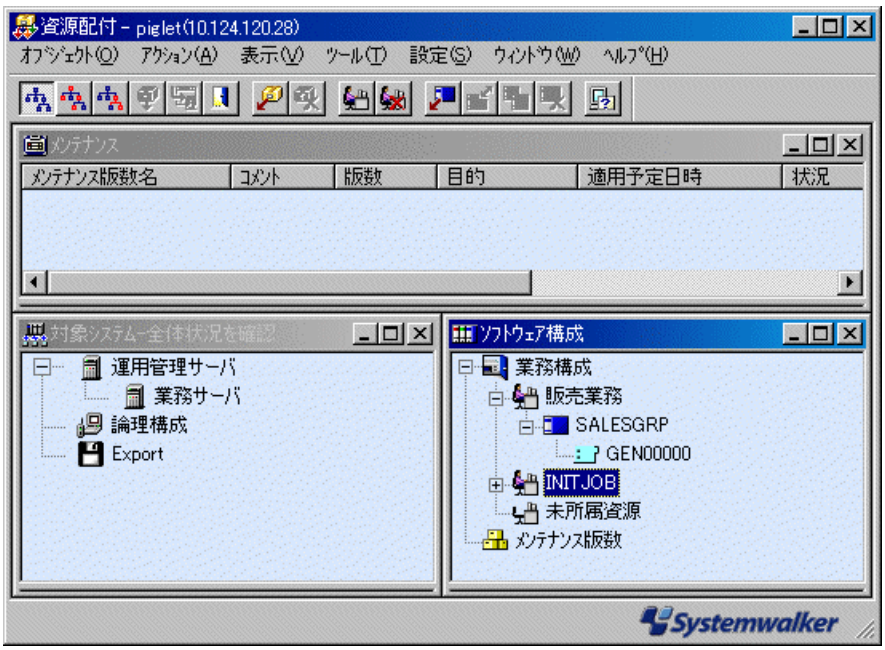
4. 業務サーバの設定情報の設定を完了します。

a) 以下のメッセージボックスが表示されます。設定した情報が資源として登録されたことを確認し、[OK]ボタンをクリックします。

［ソフトウェア構成］サブウィンドウを最新の情報に更新する方法

［資源配付］ウィンドウで［ソフトウェア構成］サブウィンドウを選択した状態で、［表示］メニューから［ローカル情報で更新］を選択します。

b) 設定情報の終了後、［ソフトウェア構成］サブウィンドウに、［INITJOB］が追加されます。



［資源配付－サーバ環境設定］ダイアログボックスの各定義を反映するには、設定した定義(ポリシー)をサーバに配付する必要があります。

ポリシーは、“INITJOB”という業務を配付することにより、定義内容を配付先システム上に反映させることができます。ここでは、ポリシーだけを配付しないで、資源と一緒に配付する手順を説明しますが、ポリシーだけの配付も可能です。

INITJOBは、ポリシーを配付するための専用の業務名です。ほかの用途では使用できません。

4.4 クライアントの適用先を定義する

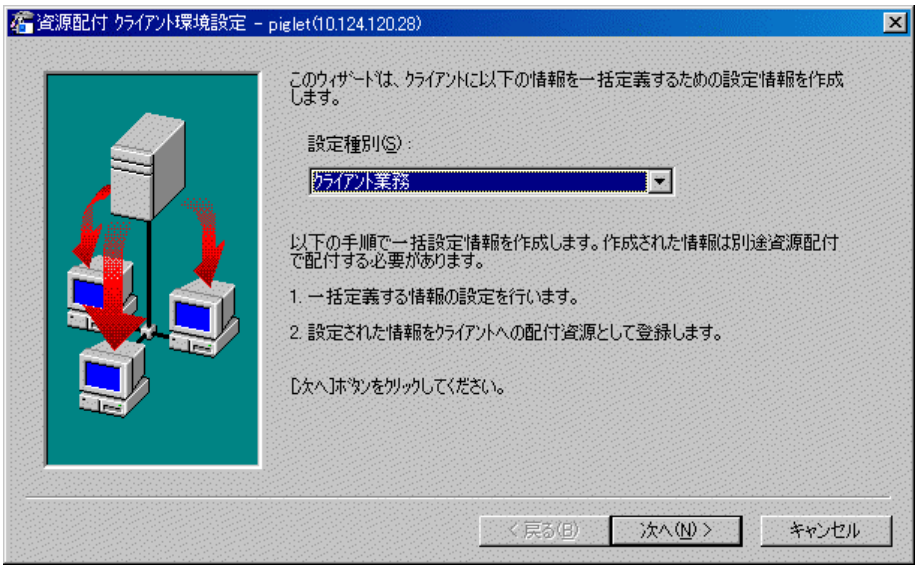
クライアントが上位サーバから資源をダウンロードするときは、業務名またはメンテナンス版数名によって、ダウンロードする資源を指定します。ここでは、業務名を指定したダウンロードが行えるように、クライアントに業務情報を定義する手順を説明します。

また、クライアントの定義は、クライアント自身で行う方法と運用管理クライアントから行う方法があります。ここでは、運用管理クライアントから定義する手順を説明します。

1. 運用管理クライアントで[資源配付]ウィンドウを起動します。
2. [設定]メニューから[ポリシー]－[クライアント環境]を選択します。
3. [資源配付 クライアント環境設定]ダイアログボックスで、設定種別を選択し、[次へ]ボタンをクリックします。

   ここでは、以下のように指定します。

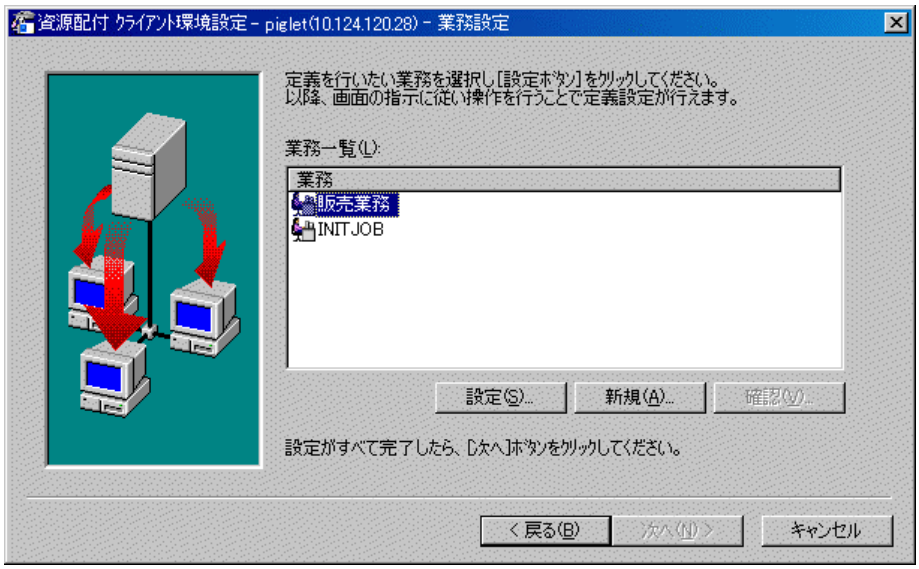
   ― [設定種別]：[クライアント業務]



4. [資源配付 クライアント環境設定－業務設定]ダイアログボックスで、[業務一覧]のリストからクライアントに適用する業務を選択し、[設定]ボタンをクリックします。

   ここでは、以下のように指定します。

   ― [業務一覧]：[販売業務]



5. クライアントでの適用方法について定義します。
   a) [クライアント業務設定ーステップ1]ダイアログボックスで、業務を適用するクライアントの範囲を指定し、[次へ]ボタンをクリックします。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [全クライアント共通の設定で定義]：選択

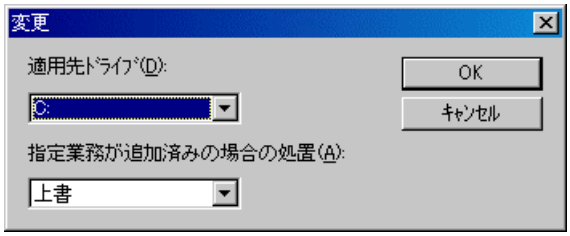
   b) [クライアント業務設定ーステップ2]ダイアログボックスで、処理を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [業務の追加/変更]：チェック

c) [クライアント業務設定－ステップ3]ダイアログボックスで、[変更]ボタンをクリックし、適用先の設定を行います。

d) [変更]ダイアログボックスで情報を指定し、[OK]ボタンをクリックします。

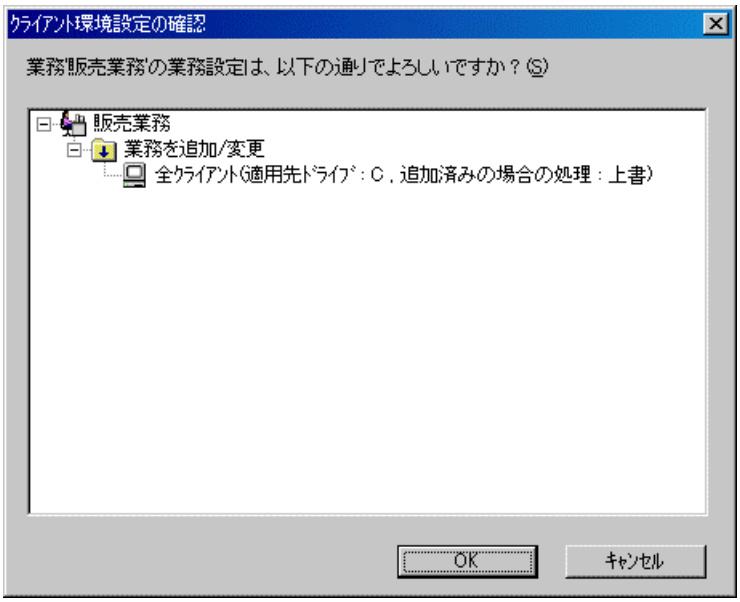
ここでは、以下のように指定します。

- [適用先ドライブ]：“c:”
- そのほかの項目：初期値

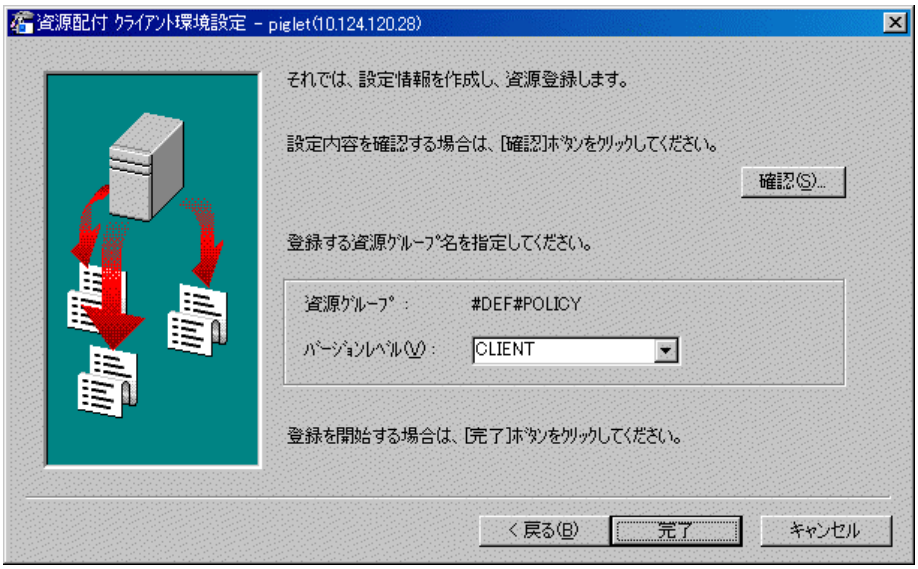


e) [クライアント業務設定－ステップ3]ダイアログボックスで、[完了]ボタンをクリックします。

f) [クライアント環境設定の確認]ダイアログボックスで、設定した内容を確認し、[OK]ボタンをクリックします。



6. [資源配付 クライアント環境設定－業務設定]ダイアログボックスで、[次へ]ボタンをクリックします。
7. [クライアント環境設定の確認]ダイアログボックスで、設定した内容を確認し、[OK]ボタンをクリックします。
8. [資源配付 クライアント環境設定]ダイアログボックスで、[完了]ボタンをクリックします。



9. 業務設定用のポリシーの作成を終了します。
以下のメッセージボックスが表示されます。設定した情報が資源として登録されたことを確認し、[OK]ボタンをクリックします。

[ソフトウェア構成]サブウィンドウを最新の情報に更新する方法

[資源配付]ウィンドウで[ソフトウェア構成]サブウィンドウを選択した状態で、[表示]メニューから[ローカル情報で更新]を選択します。

業務設定をクライアントに適用するには、ポリシーを配付する必要があります。

ポリシーは、“INITJOB”という業務名を配付することで適用できます。ここでは、ポリシーだけを配付しないで資源と一緒に配付する手順を説明しますが、ポリシーだけの配付も可能です。

INITJOBは、ポリシーを配付するための専用の業務名です。ほかの用途では使用できません。

4.5 メンテナンス版数を作成する

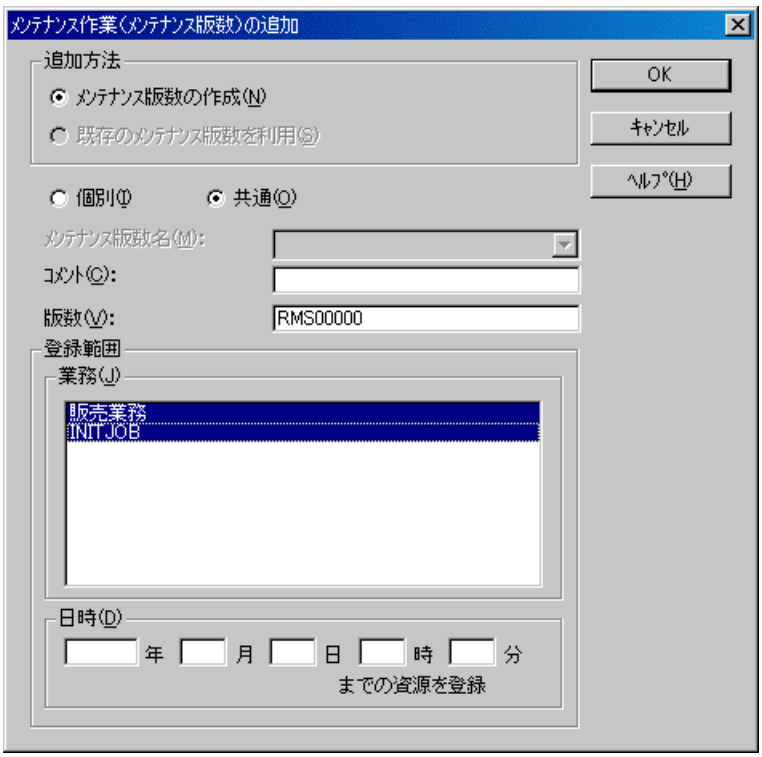
配付する業務、配付先システム、適用のタイミングなどをパッケージングして、メンテナンス版数を作成します。作成したメンテナンス版数が、資源を配付する単位になります。

以下の操作を運用管理クライアントで行い、メンテナンス版数を作成します。

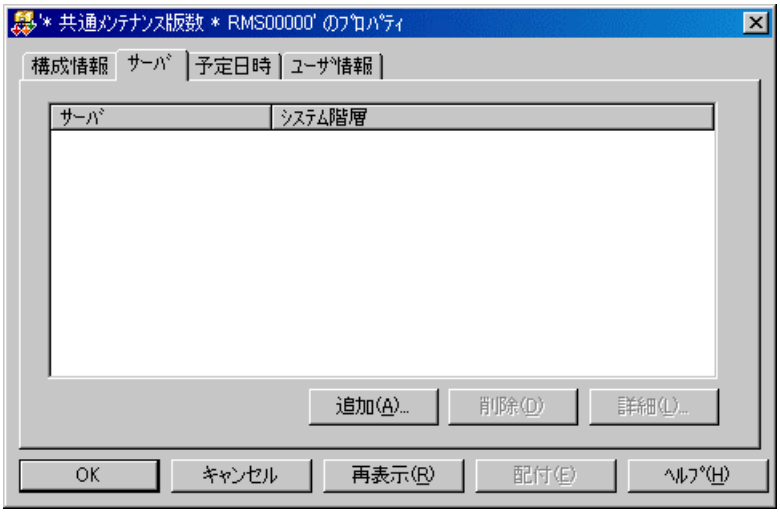
1. 運用管理クライアントで[資源配付]ウィンドウを起動します。
2. [メンテナンス]サブウィンドウを選択し、[アクション]メニューから[メンテナンス作業の追加]－[メンテナンス版数]を選択します。
3. [メンテナンス作業(メンテナンス版数)の追加]ダイアログボックスで、各項目を設定し、[OK]ボタンをクリックします。

   ここでは、以下のように指定します。

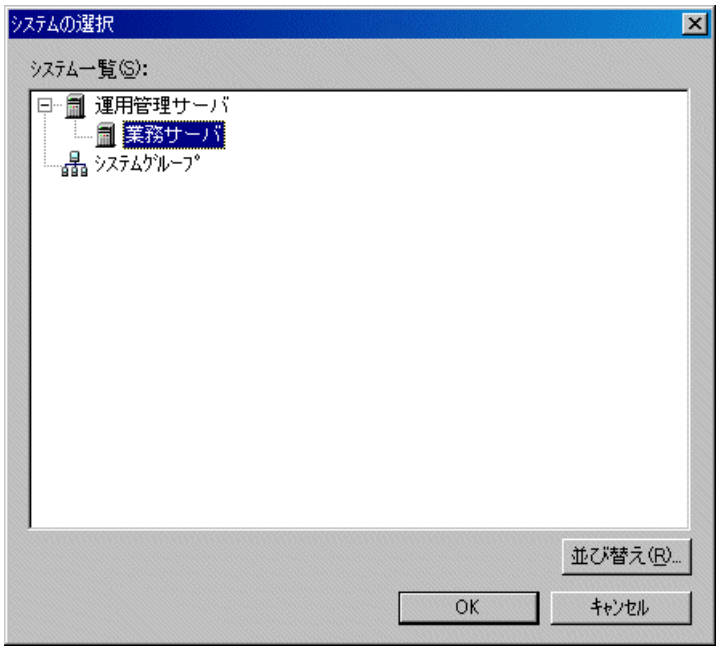
   ― [共通]：選択
   ― [業務]：[販売業務]、[INITJOB]
   ― そのほかの項目：初期値



4. [‘＊共通メンテナンス版数＊RMS00000’のプロパティ]ダイアログボックスで、[サーバ]タブを選択します。[追加]ボタンをクリックし、配付先を定義します。



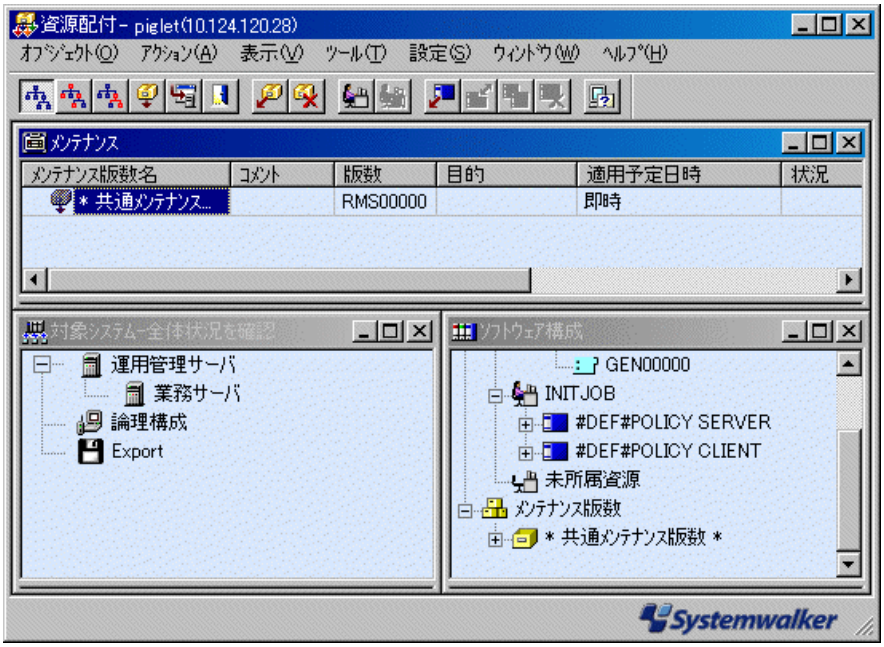
a) [システムの選択]ダイアログボックスで、宛先となるサーバを選択し、[OK]ボタンをクリックします。
ここでは、以下のように指定します。
- [システム一覧]：[業務サーバ]



b) [宛先の追加]ダイアログボックスで、登録範囲を指定し、[OK]ボタンをクリックします。
   - [配下全てを含む]：選択

5. [‘＊共通メンテナンス版数 ＊RMS00000’のプロパティ]ダイアログボックスで、[予定日時]タブを選択します。適用予定日時を定義し、[OK]ボタンをクリックします。
   a) ここでは、以下のように指定します。
      - [適用種別]：[即時]
      - そのほかの項目：初期値

b) メンテナンス版数の登録の終了後、[メンテナンス]サブウィンドウに、[共通メンテナンス版数]が追加されます。



ポイント

版数について

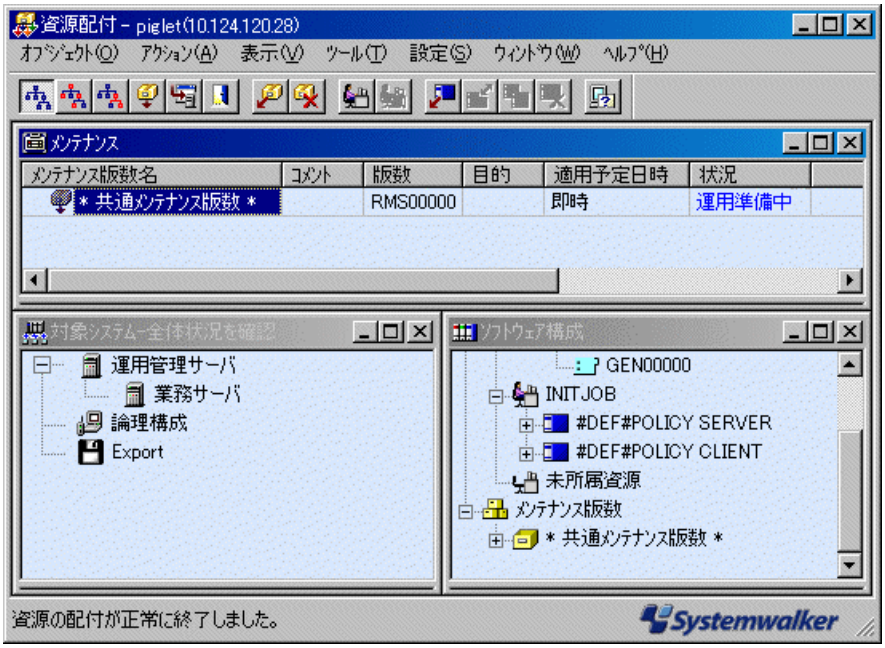
メンテナンス作業を作成する時に、版数名を管理者がわかりやすい半角英数字8バイト以内の任意の名前を指定する事ができます。また、何も指定しない場合には、版数に初期値(RMS00000)が自動的に指定されます。

4.6 業務サーバに資源を配付する

作成したメンテナンス版数を業務サーバに配付します。
以下の操作を運用管理クライアント上で行います。

1. 運用管理クライアントで、[資源配付]ウィンドウを起動します。
2. [メンテナンス]サブウィンドウで、配付する資源を選択します。
   a) ここでは、以下のように指定します。
      - [メンテナンス]サブウィンドウ：[*共通メンテナンス版数 *RMS00000]
   b) [アクション]メニューから[資源の配付]を選択します。
3. [資源の配付]ダイアログボックスで、設定内容を確認し、[OK]ボタンをクリックします。
   資源の配付を開始します。

4. 配付結果を確認します。
   配付の終了後、[資源配付]ウィンドウの左下部分に、[資源の配付が正常に終了しました]というメッセージが表示されます。また、[メンテナンス]サブウィンドウの[状況]欄に、[運用準備中]と表示されます。



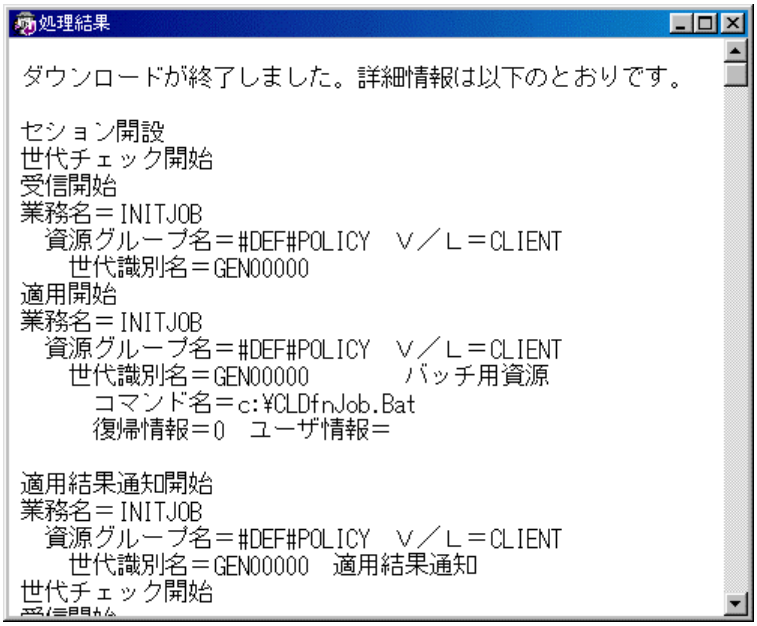
5. [資源配付]ウィンドウを終了します。
   [オブジェクト]メニューから[終了]を選択すると、メッセージボックスが表示されます。[OK]ボタンをクリックします。

4.7 クライアントに資源を配付する

業務サーバからクライアントに資源をダウンロードします。ダウンロードの指示は強制配付機能を使用して運用管理サーバから行うこともできますが、ここではクライアントからダウンロードの指示を出し、配付資源を適用させる手順を説明します。強制配付機能については、“Systemwalker Centric Manager 使用手引書 資源配付機能編”を参照してください。

1. クライアントで、[スタート]メニューから[プログラム]－[Systemwalker Centric Manager]－[資源配付クライアントダウンロード]を選択し、ダウンロードを開始します。
2. 処理結果を確認します。

   ダウンロードの終了後、[処理結果]ウィンドウが表示されます。



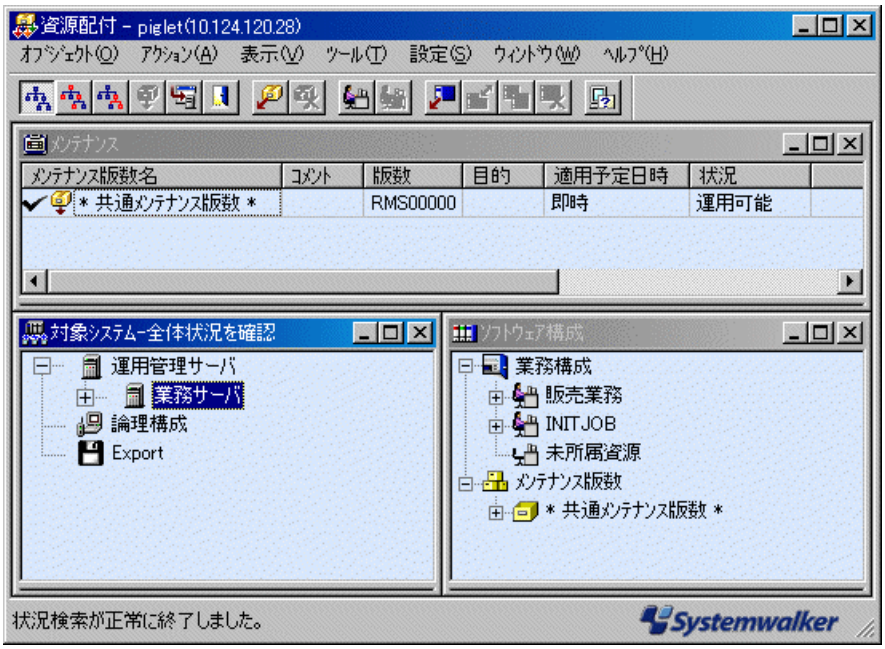
クライアントのダウンロードを、システム起動時やWindows®へのログオン時に実行させたり、運用管理サーバからの指示で実行させることもできます。

4.8 資源の配付状況を確認する

配付した資源の適用状況を確認します。

以下の操作を運用管理クライアント上で行うことで、配付が完了していることが確認できます。

1. 運用管理クライアントで[資源配付]ウィンドウを起動します。
2. [対象システム]サブウィンドウで、配付状況を確認するサーバを選択します。
   a) ここでは、以下のように指定します。
      - [対象システム]サブウィンドウ：[業務サーバ]
   b) [アクション]メニューから[指定サーバの状況検索:全情報]を選択します。
3. 配付結果を確認します。
   業務サーバとクライアントで、配付した資源の適用が完了していれば、[メンテナンス] サブウィンドウで、配付したメンテナンス版数に印が付き、[状況]欄が[運用準備中]から[運用可能]に変わります。



ポイント

[状況]が[運用可能]に変わらなかった場合は、さまざまな原因が考えられます。例えば、業務サーバに複数台のクライアントが接続されている場合は、すべてのクライアントから適用完了通知がなければ、[運用可能]にはなりません。また、配付/適用の過程で異常が起きている可能性もあります。詳細については、“Systemwalker Centric Manager 使用

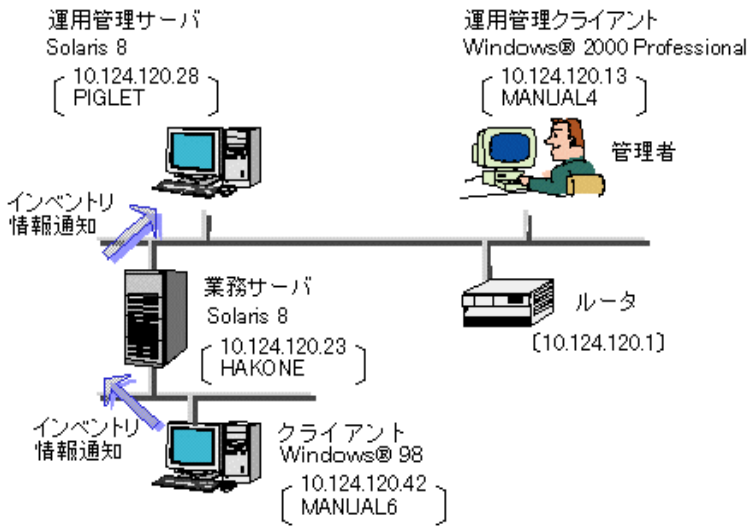
手引書 資源配付機能編”を参照してください。

第5章　システムの構成情報を収集する

インベントリ情報(システムの構成情報)を収集する手順について説明します。ここでは、クライアントのインベントリ情報を収集する方法について説明します。

5.1 業務サーバのインベントリ通知スケジュールを定義する
5.2 クライアントのインベントリ収集スケジュールを定義する
5.3 通知スケジュール定義を業務サーバとクライアントに配付する
5.4 インベントリ情報を参照する

以下の構成を例として、クライアントのインベントリ情報を業務サーバ経由で運用管理サーバに通知します。



以下の条件で、クライアントのインベントリ情報を収集します。

- クライアント

  毎週木曜日の9時にインベントリ情報の収集を行い、業務サーバに通知します。

- 業務サーバ

  毎週木曜日の10時にクライアントのインベントリ情報を運用管理サーバに通知します。

なお、クライアントのインベントリ情報は、資源をダウンロードする場合の上位のサーバに送ります。ここでは、クライアントの上位のサーバ(業務サーバ)の定義は、インストール時に資源配付の定義としてすでに行われていることとします。

また、運用管理サーバにも、インベントリを中継するサーバの定義が必要です。この定義も資源配付と共通なので、[資源配付]ウィンドウの[対象システム]サブウィンドウに中継するサーバ(業務サーバ)が、すでに定義されていることとします。中継するサーバの定義は、“4.1 配付経路を定義する”を参照してください。

5.1 業務サーバのインベントリ通知スケジュールを定義する

クライアントのインベントリ情報を中継するための業務サーバの定義を行います。

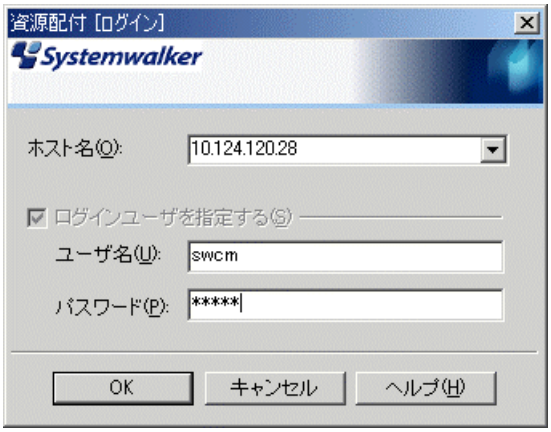
以下の操作を運用管理クライアントで行います。

1. 運用管理クライアントで[資源配付]ウィンドウを起動します。

   運用管理サーバにログインし、[資源配付[ログイン]]ダイアログボックスを表示します。[ホスト名]、[ユーザ名]および[パスワード]を入力し、[OK]ボタンをクリックします。

   ここでは、以下のように指定します。

   - [ホスト名]：[10.124.120.28]
   - [ユーザ名]：“swcm”
   - [パスワード]：“unyou”



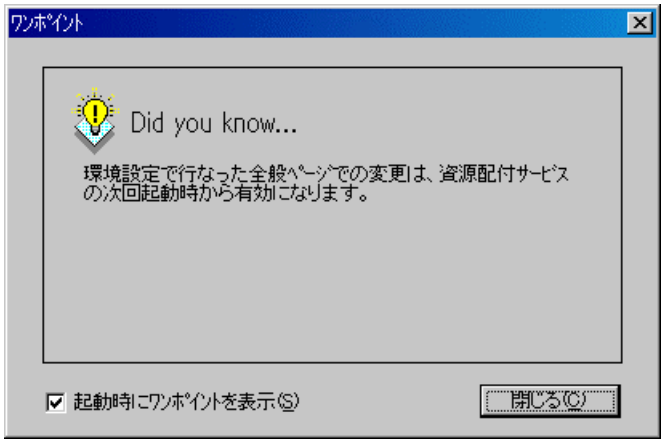
2. [対象システム]サブウィンドウからインベントリ情報を中継するサーバを選択します。

   a) ここでは、以下のように指定します。

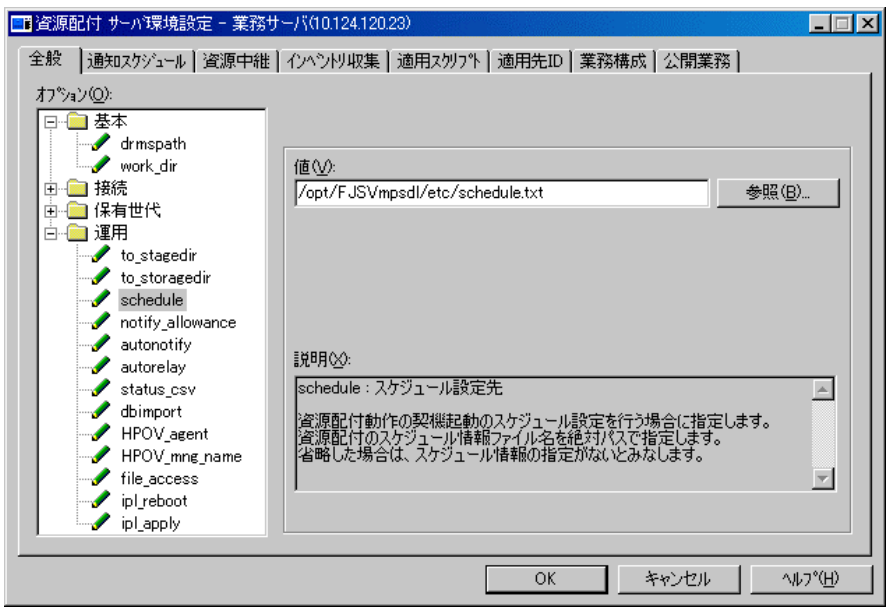
      - [対象システム]サブウィンドウ：[業務サーバ]

   b) [設定]メニューから[ポリシー]－[サーバ環境]を選択します。

   c) 以下のダイアログボックスで、[閉じる]ボタンをクリックします。



3. [資源配付 サーバ環境設定]ダイアログボックスの[全般]タブを選択し、通知スケジュールの定義を格納するファイルのパス名を指定します。
   a) [オプション]のツリーから[運用]－[schedule]を選択します。
   b) [値]に通知スケジュールの定義を格納するファイルのパス名を指定します。
      ここでは、以下のように指定します。
      - [値]：“/opt/FJSVmpsdl/etc/schedule.txt”

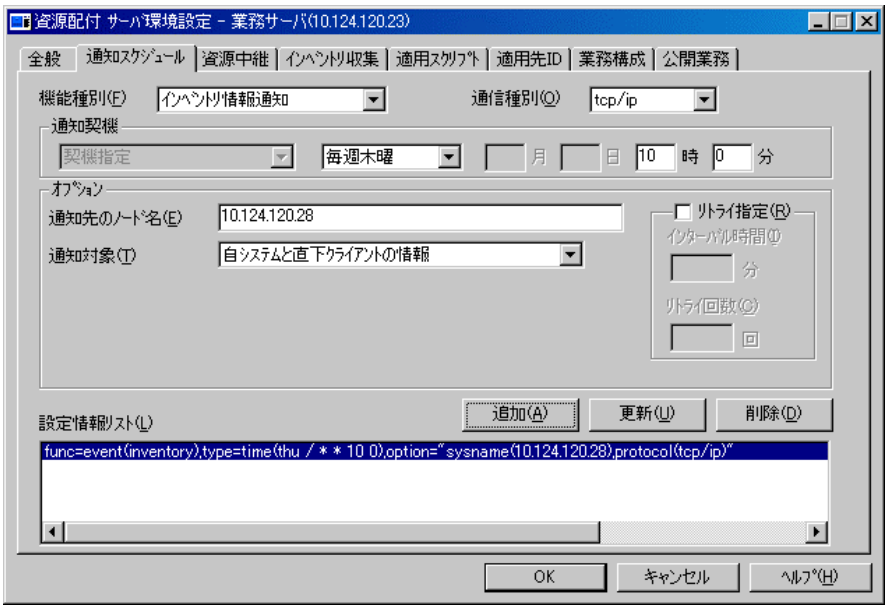


4. [通知スケジュール]タブを選択し、インベントリ情報を通知する時間や通知先を定義し、[追加]ボタンをクリックします。
   a) ここでは、以下のように指定します。
      - [機能種別]：[インベントリ情報通知]
      - [通知契機]：[毎週木曜]“10”時“00”分
      - [通知先ノード名]：“10.124.120.28”（運用管理サーバ）

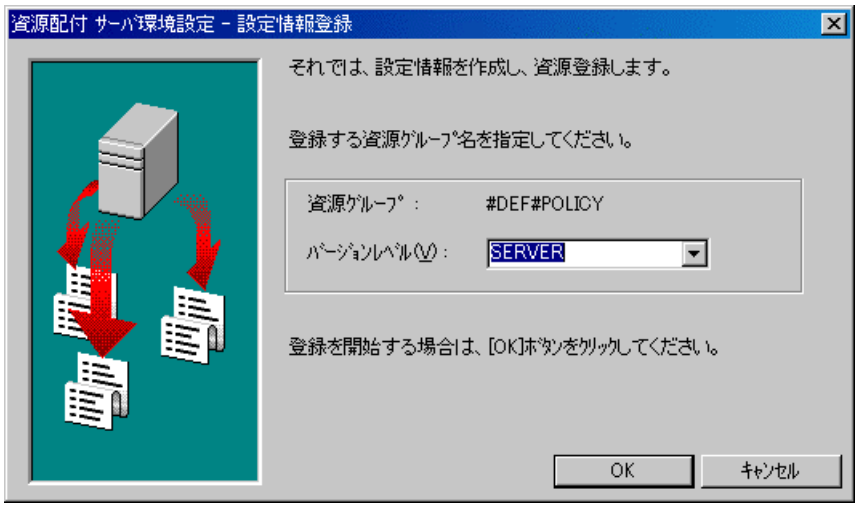
- そのほかの項目：初期値

b) [設定情報リスト]にノードが追加されたのを確認し、[OK]ボタンをクリックします。

なお、インベントリ情報の通知には、30分以上の時間がかかります。通知契機を状況に合わせて、指定してください。



5. [資源配付 サーバ環境設定－設定情報登録]ダイアログボックスが表示されます。登録を開始する場合は、[OK]ボタンをクリックします。



6. 業務サーバの設定情報の登録を完了します。
以下のメッセージボックスが表示されます。設定した情報が資源として登録されたことを確認し、[OK]ボタンをクリックします。

ヒント **[ソフトウェア構成]サブウィンドウを最新の情報に更新する方法**

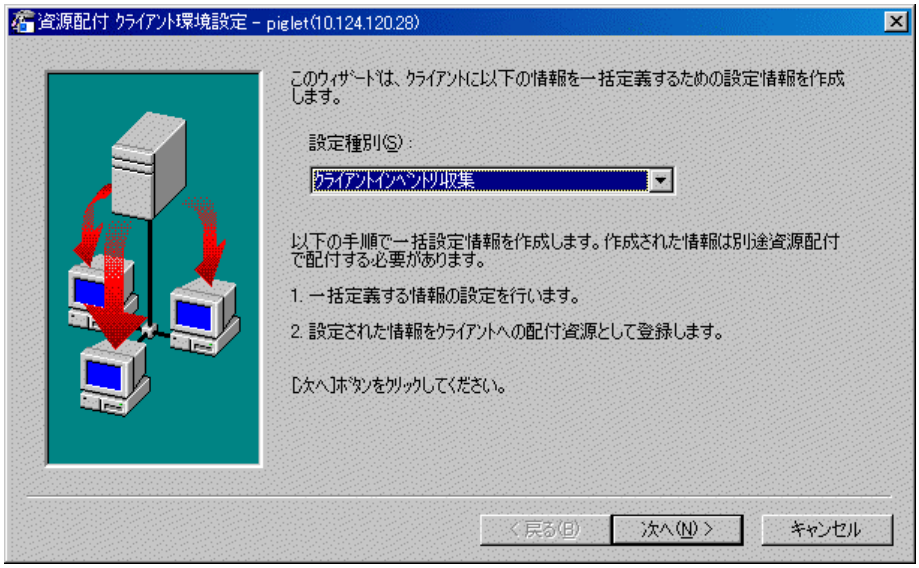
[資源配付]ウィンドウで[ソフトウェア構成]サブウィンドウを選択した状態で、[表示]メニューから[ローカル情報で更新]を選択します。

7. [資源配付]ウィンドウを終了します。

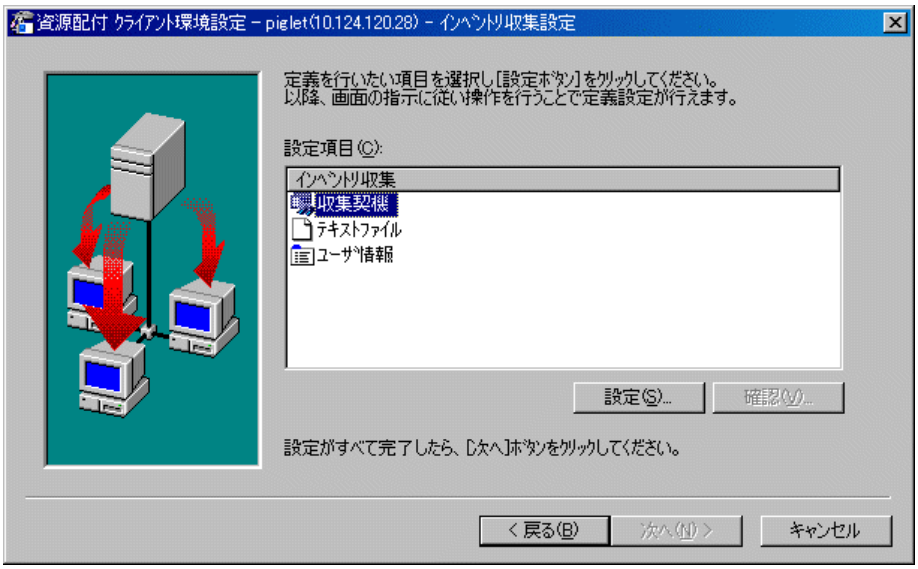
5.2 クライアントのインベントリ収集スケジュールを定義する

クライアントのインベントリ情報を収集するスケジュールの定義を行います。
以下の操作を運用管理クライアントで行います。

1. 運用管理クライアントで[資源配付]ウィンドウを起動します。
2. [設定]メニューから[ポリシー]－[クライアント環境設定]を選択します。
3. [資源配付 クライアント環境設定]ダイアログボックスの設定種別を選択し、[次へ]ボタンをクリックします。
   ここでは、以下のように指定します。
   ― [設定種別]：[クライアントインベントリ収集]



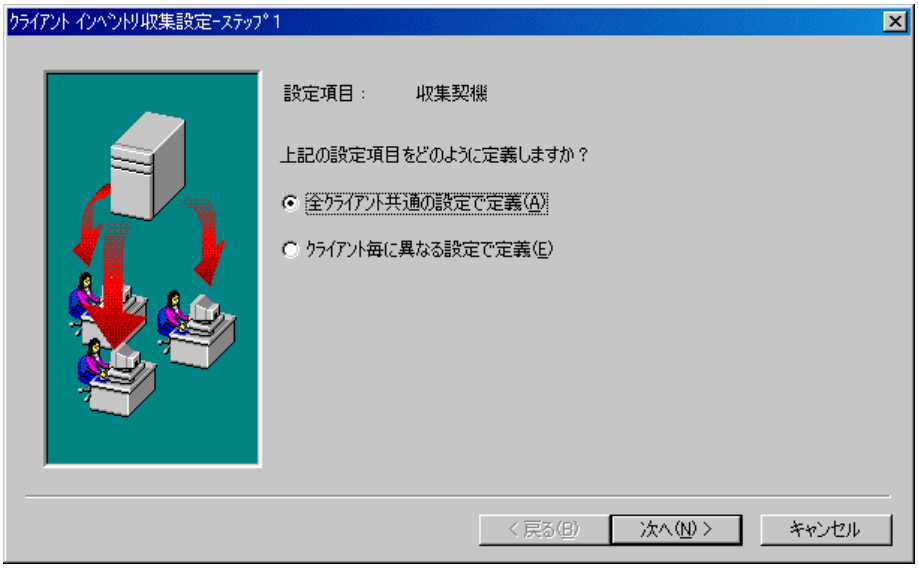
4. [クライアント環境設定－インベントリ収集設定]ダイアログボックスで、定義する項目を選択し、[設定]ボタンをクリックします。
   ここでは、以下のように指定します。
   ― [設定項目]：[収集契機]



5. インベントリ収集契機について定義します。

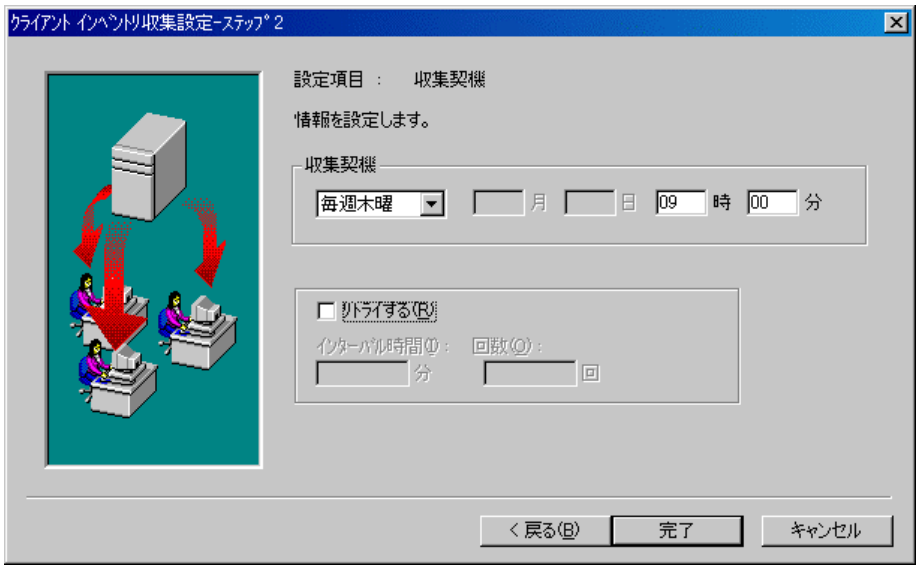
a) [クライアント インベントリ収集設定－ステップ1]ダイアログボックスで、設定項目を定義し、[次へ]ボタンをクリックします。ここでは、以下のように指定します。

- [全クライアント共通の設定で定義]：選択

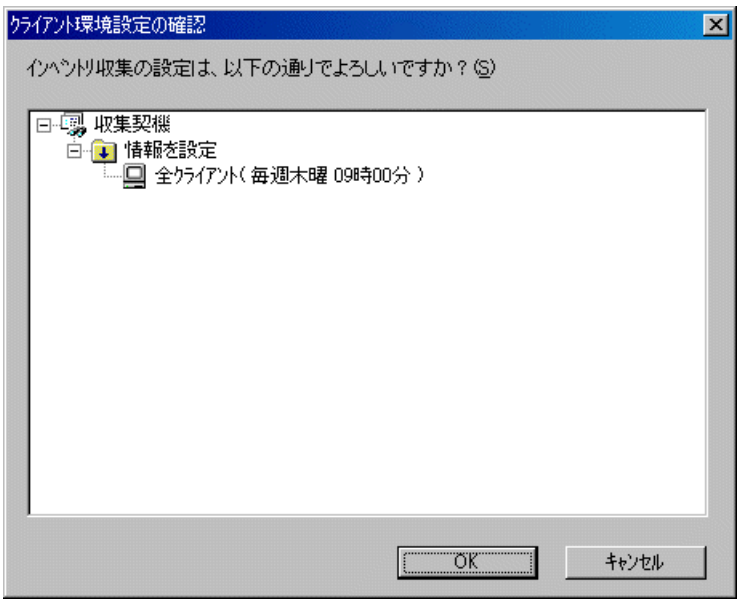


b) [クライアントインベントリ収集設定－ステップ2]ダイアログボックスで、[収集契機]を指定し、[完了]ボタンをクリックします。ここでは、以下のように指定します。

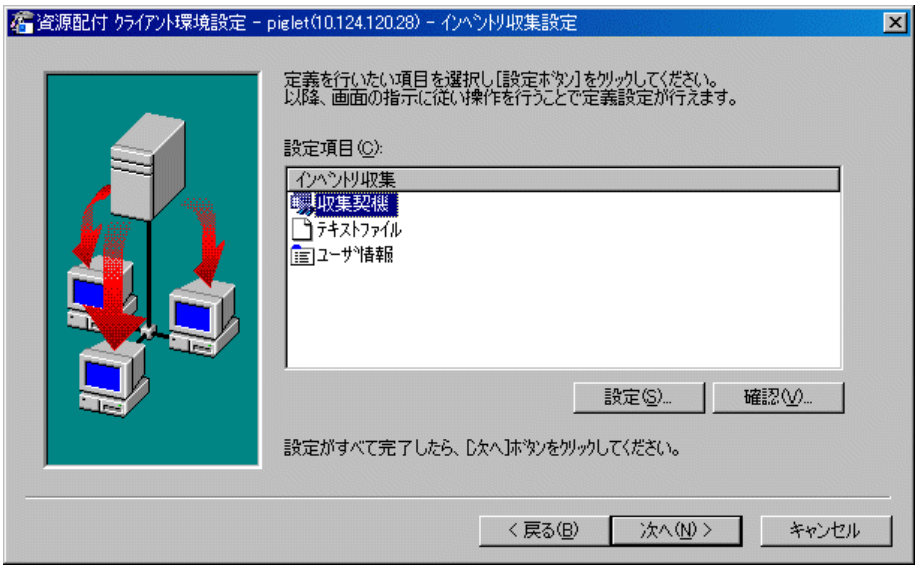
- [収集契機]：[毎週木曜]“09”時“00”分



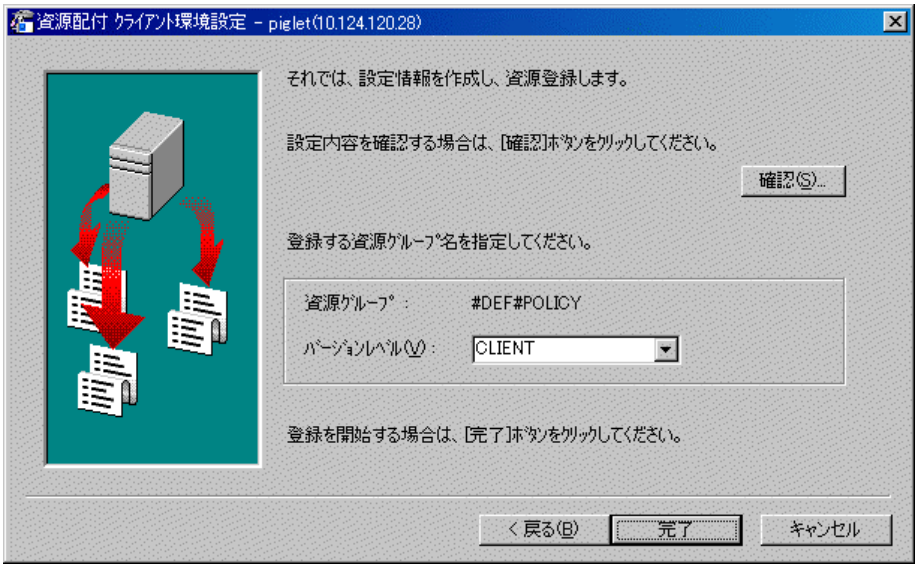
6. [クライアント環境設定の確認]ダイアログボックスで、設定内容を確認し、[OK]ボタンをクリックします。



7. [資源配付 クライアント環境設定]ダイアログボックスで、[次へ]ボタンをクリックします。



8. [クライアント環境設定の確認]ダイアログボックスで、設定内容を確認し、[OK]ボタンをクリックします。
9. [資源配付 クライアント環境設定]ダイアログボックスで、[完了]ボタンをクリックします。



10. ポリシーの作成を完了します。
    a) 以下のメッセージボックスが表示されます。設定した情報が資源として登録されたことを確認し、[OK]ボタンをクリックします。

[ソフトウェア構成]サブウィンドウを最新の情報に更新する方法

[資源配付]ウィンドウで[ソフトウェア構成]サブウィンドウを選択した状態で、[表示]メニューから[ローカル情報で更新]を選択します。

5.3 通知スケジュール定義を業務サーバとクライアントに配付する

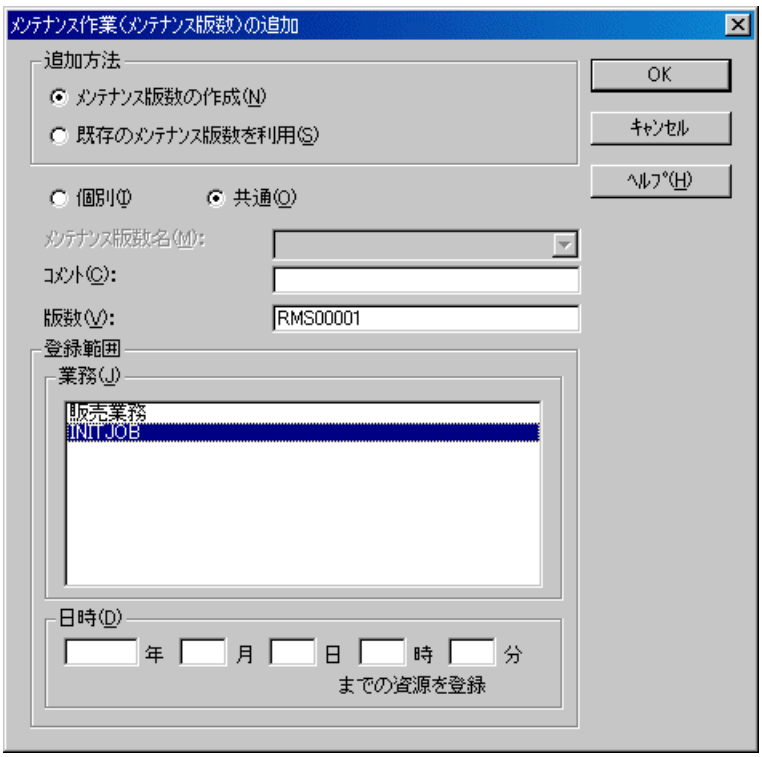
以下の手順で、通知スケジュール定義を業務サーバとクライアントに配付します。

- 通知スケジュール定義をサーバに配付する
- スケジュール定義をクライアントに適用する
- スケジュール定義の配付状況を確認する

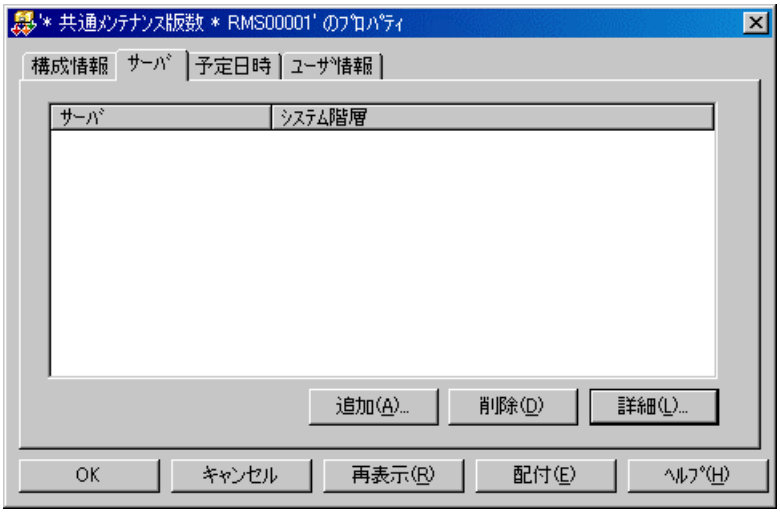
通知スケジュール定義をサーバに配付する

以下の操作を運用管理クライアントで行います。

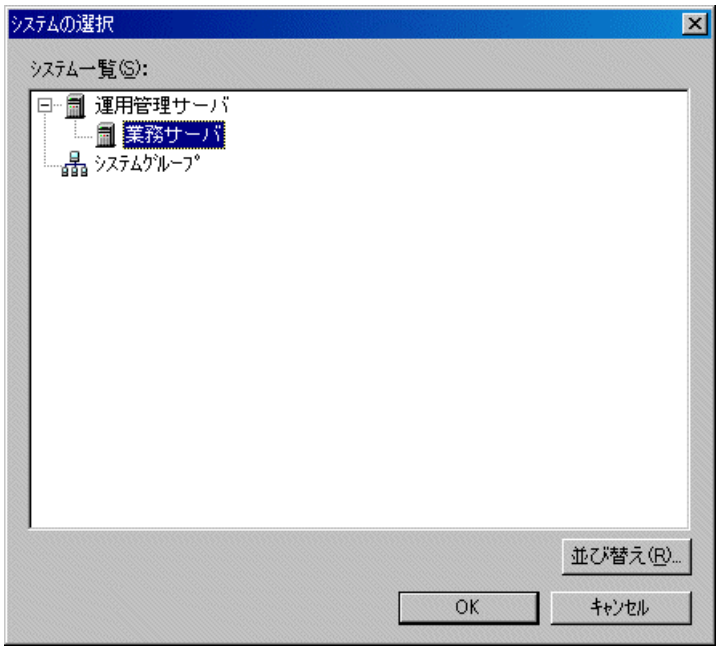
1. 運用管理クライアントで[資源配付]ウィンドウを起動します。
2. [メンテナンス]サブウィンドウを選択し、[アクション]メニューから[メンテナンス作業の追加]－[メンテナンス版数]を選択します。
3. [メンテナンス作業(メンテナンス版数)の追加]ダイアログボックスで、各項目を設定し、[OK]ボタンをクリックします。
   ここでは、以下のように指定します。
   - [共通]：選択
   - [業務]：[INITJOB]
   - そのほかの項目： 初期値



4. 配付先を定義します。
[‘＊共通メンテナンス版数＊RMS00001’のプロパティ]ダイアログボックスの[サーバ]タブを選択し、[追加]ボタンをクリックします。

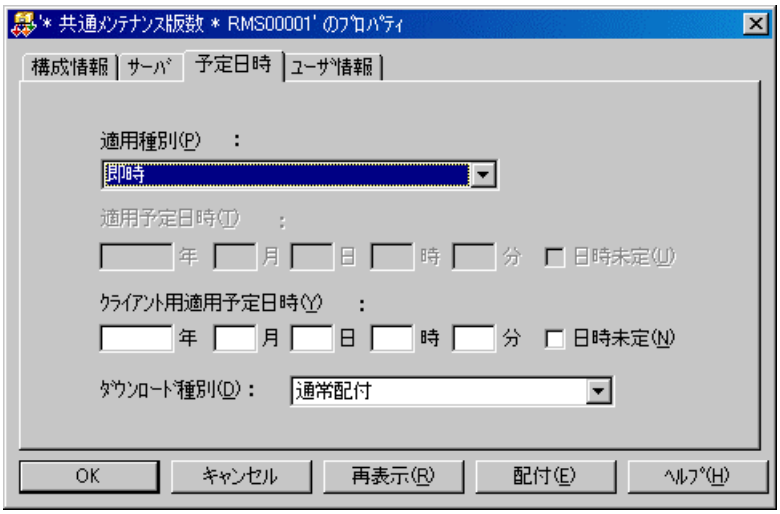


a) [システムの選択]ダイアログボックスで、宛先となるサーバを選択し、[OK]ボタンをクリックします。
ここでは、以下のように指定します。
- [システム一覧]：[業務サーバ]

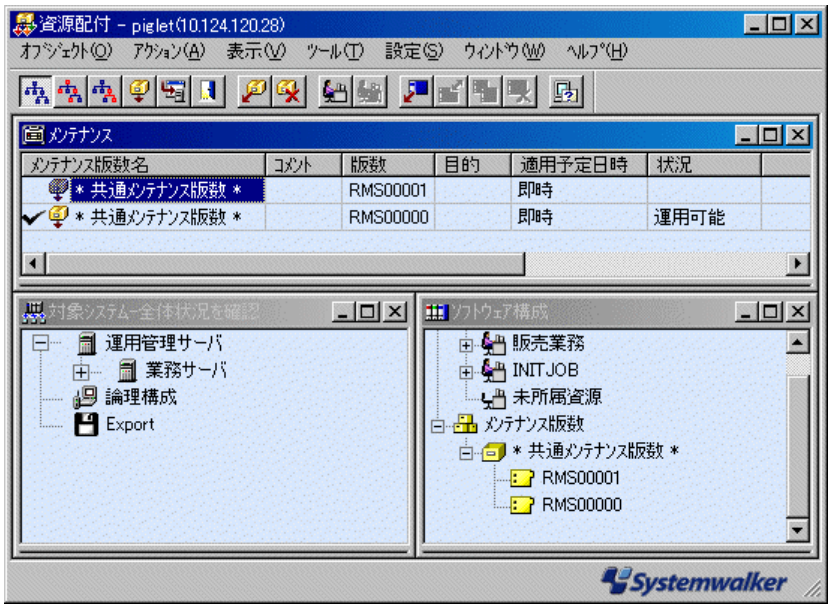


b) [宛先の追加]ダイアログボックスで、登録範囲を選択し、[OK]ボタンをクリックします。
ここでは、以下のように指定します。
- [登録範囲]：[配下全てを含む]

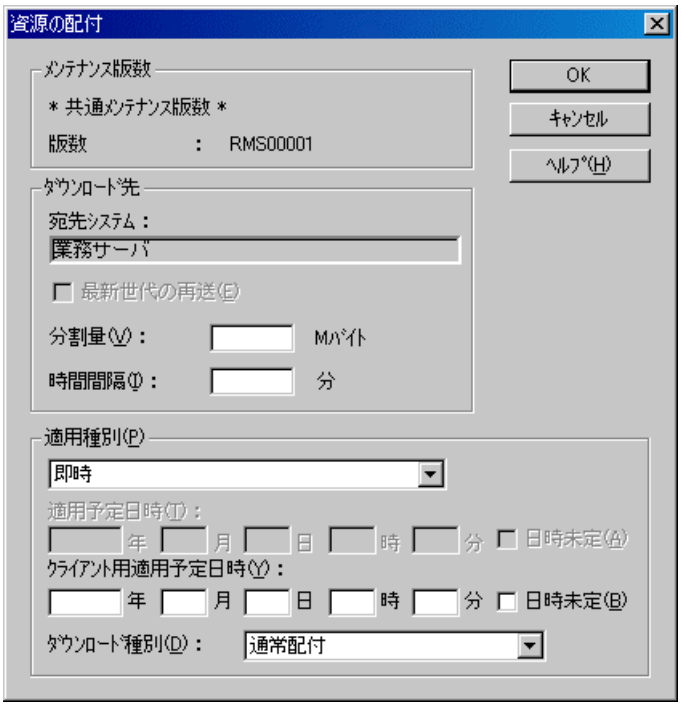
5. [‘＊共通メンテナンス版数 ＊RMS00001’のプロパティ]ダイアログボックスで[予定日時]タブを選択します。適用予定日時を定義し、[OK]ボタンをクリックします。
a) ここでは、以下のように指定します。
- [適用種別]：[即時]
- そのほかの項目：初期値



b) メンテナンス版数の登録の終了後、[メンテナンス]サブウィンドウに、[共通メンテナンス版数]が追加されます。

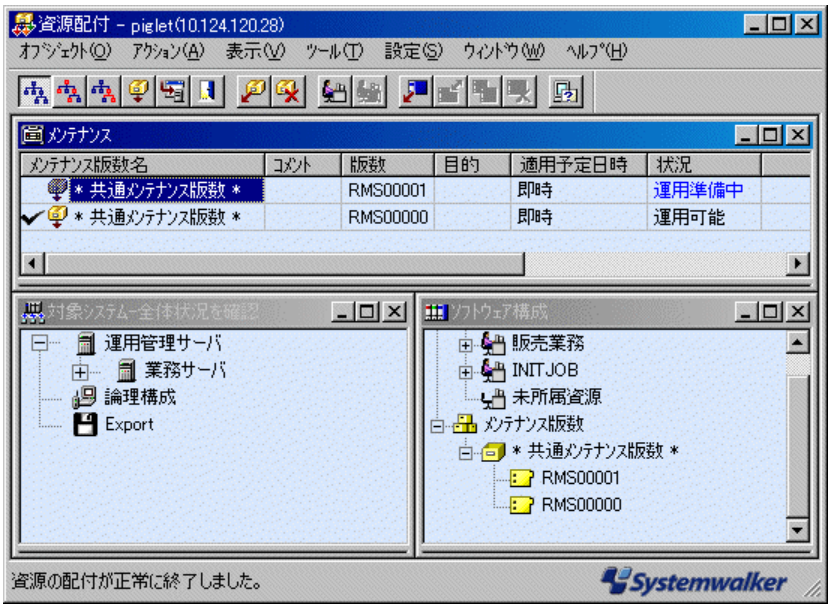


6. ［メンテナンス］サブウィンドウで、配付する資源を選択します。
   a) ここでは、以下のように指定します。
      - ［メンテナンス］サブウィンドウ：[*共通メンテナンス版数 *RMS00001]
   b) ［アクション］メニューから[資源の配付]を選択します。
7. ［資源の配付］ダイアログボックスで設定内容を確認し、[OK]ボタンをクリックします。



8. 配付結果を確認します。

   配付の終了後、[資源配付]ウィンドウの左下部分に、[資源の配付が正常に終了しました]というメッセージが表示されます。また、[メンテナンス]サブウィンドウの[状況]欄に[運用準備中]と表示されます。



スケジュール定義をクライアントに適用する

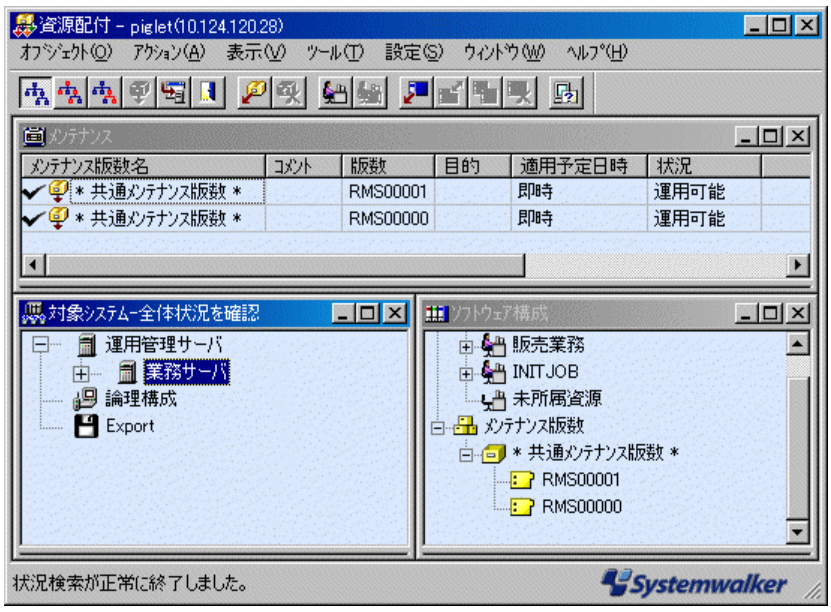
以下の操作をクライアントで行います。

1. クライアントで[スタート]メニューから[プログラム]－[Systemwalker Centric Manager]－[資源配付クライアントダウンロード]を選択し、ダウンロードを開始します。
2. 処理結果を確認します。
   ダウンロードの終了後、[処理結果]ウィンドウが表示されます。

スケジュール定義の配付状況を確認する

以下の操作を運用管理クライアントで行います。

1. 運用管理クライアントで[資源配付]ウィンドウを起動します。
2. [対象システム]サブウィンドウで配付状況を確認するサーバを選択します。
   a) ここでは、以下のように指定します。
      - [対象システム]サブウィンドウ：[業務サーバ]
   b) [アクション]メニューから[指定サーバの状況検索：全情報]を選択します。
3. 配付結果を確認します。
   業務サーバとクライアントで、配付した資源の適用が完了していれば、[メンテナンス] サブウィンドウで、配付したメンテナンス版数に印が付き、[状況]欄が[運用準備中]から[運用可能]に変わります。



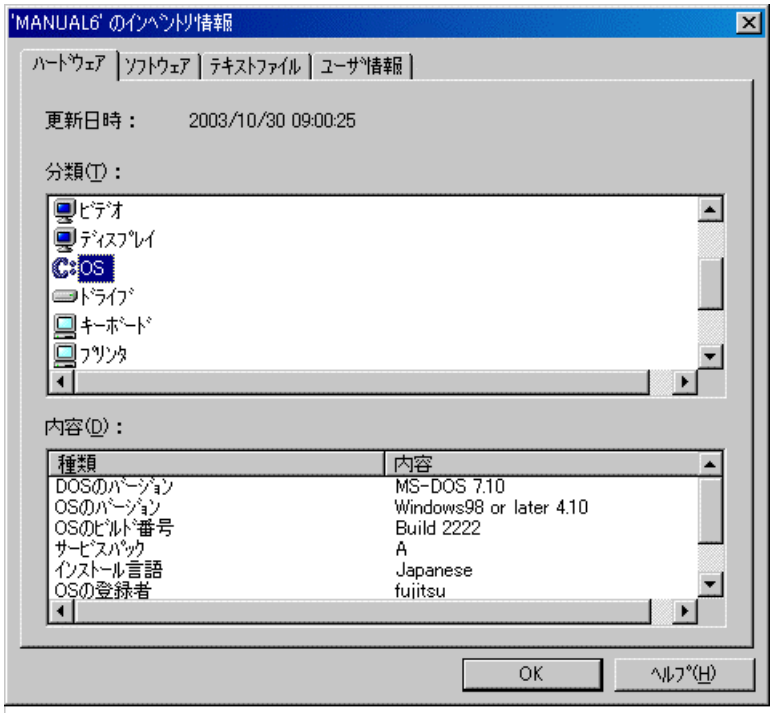
資源配付では、定義した時刻から30分間の任意の時刻にインベントリ

情報が通知されます。これによって、大量のクライアントに同じ時刻を指定してもサーバへの通知時間が重ならない仕組みになっています。そのため、サーバから運用管理サーバへの通知時間は、クライアント収集時刻から30分以降の時刻を指定してください。

5.4 インベントリ情報を参照する

クライアントのインベントリ情報を参照します。
以下の操作を運用管理クライアントで行います。

1. 運用管理クライアントで[資源配付]ウィンドウを起動します。
2. [対象システム]サブウィンドウでインベントリ情報を確認するサーバを選択します。
   a) ここでは、以下のように指定します。
      - [対象システム]サブウィンドウ：[manual6]（クライアント）
   b) [表示]メニューから[インベントリ]を選択し、[インベントリ情報]ダイアログボックスを表示します。



注意

インベントリ情報は、収集した情報が業務サーバから運用管理サーバに通知されてから、参照できます。定義を行った直後では、情報が参照できない場合があります。

付録A　システム環境構築例

Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバをインストールする時の参考として、パーティション作成例について説明します。

A.1　データベースパーティション作成例

ここで説明する実行例は、以下に示す条件のシステムでパーティションを作成するものです。

- システムに一つのコントローラ（ディスク）だけがある。
- root、swap以外のパーティションはフォーマットされていない。

パーティションの作成について

実際にパーティションを作成する場合は、システムに合わせて、実行例で示す入力値を変更する必要があります。実行例と同じ入力値でパーティションを作成すると、データが破壊される場合がありますので注意してください。

1. formatコマンドを実行します。

   formatコマンドを実行するには、スーパユーザの権限(root権限)が必要です。

   a) formatコマンドを実行します。

      コマンドを実行し、disk一覧を表示します。

      以下に、diskが一つの場合の表示例を示します。

```
# format
Searching for disks...done

AVAILABLE DISK SELECTIONS:
       0. c0t0d0 <ST34342A cyl 8892 alt 2 hd 15 sec 63>
          /pci@1f,0/pci@1,1/ide@3/dad@0,0
```

   b) ディスク番号を指定します。

      disk一覧の番号を指定します。以下の例では、“0”を指定します。

      番号を指定し、FORMAT MENUを表示します。

```
Specify disk (enter its number): 0
selecting c0t0d0
No defect list found
 [disk formatted, no defect list found]
Warning: Current Disk has mounted partitions.

FORMAT MENU:
        disk       - select a disk
        type       - select (define) a disk type
        partition  - select (define) a partition table
        current    - describe the current disk
        format     - format and analyze the disk
        repair     - repair a defective sector
        show       - translate a disk address
        label      - write label to the disk
        analyze    - surface analysis
        defect     - defect list management
        backup     - search for backup labels
        verify     - read and display labels
        save       - save new disk/partition definitions
        volname    - set 8-character volume name
        !<cmd>     - execute <cmd>, then return
        quit
```

2. partitionコマンドを実行します。

   a) partitionコマンドを実行します。

      コマンドを実行し、PARTITION MENUを表示します。

```
format> partition

PARTITION MENU:
        0      - change `0' partition
        1      - change `1' partition
        2      - change `2' partition
        3      - change `3' partition
        4      - change `4' partition
        5      - change `5' partition
        6      - change `6' partition
        7      - change `7' partition
        select - select a predefined table
        modify - modify a predefined partition table
        name   - name the current table
       print  - display the current table
       label  - write partition map and label to the disk
        !<cmd> - execute <cmd>, then return
        quit
```

   b) パーティションを確認します。

      printコマンドを実行し、現在のパーティションを確認します。

```
partition> print

Current partition table (original):
Total disk cylinders available: 8892 + 2 (reserved cylinders)

Part      Tag    Flag     Cylinders         Size            Blocks
  0       root    wm       0 -  4189       2.01GB    (4190/0/0)    4223520
  1       swap    wu    4190 -  5231     512.86MB    (1042/0/0)    1050336
  2     backup    wu       0 - 17659       8.49GB    (17660/0/0) 17801280
  3 unassigned    wm       0                0        (0/0/0)           0
  4 unassigned    wm       0                0        (0/0/0)           0
  5 unassigned    wm       0                0        (0/0/0)           0
  6 unassigned    wm       0                0        (0/0/0)           0
  7 unassigned    wm       0                0        (0/0/0)           0
```

3. RDB管理情報専用パーティションを作成します。

a) パーティションを指定します。

以下の例では、パーティション3を指定します。

```
partition> 3
Part      Tag    Flag     Cylinders        Size            Blocks
  3 unassigned    wm       0                0          (0/0/0)          0
```

b) パーティションIDタグを指定します。

“usr”を指定します。

```
Enter partition id tag[unassigned]: usr
```

c) パーティションパーミッションフラグを指定します。

“wm”を指定します。

```
Enter partition permission flags[wm]: wm
```

d) 開始シリンダを指定します。

以下の例では、2.のprintコマンドで確認した未使用シリンダの先頭“5232”を指定します。

```
Enter new starting cyl[0]: 5232
```

e) パーティションサイズを指定します。

“300.0mb”を指定します。

```
Enter partition size[0b, 0c, 0.00mb, 0.00gb]: 300.00mb
```

f) パーティションサイズを指定します。

printコマンドを入力し、現在のパーティションを確認します。

```
partition> print

Current partition table (unnamed):
Total disk cylinders available: 8892 + 2 (reserved cylinders)

Part      Tag    Flag     Cylinders        Size            Blocks
  0       root    wm       0 -  4189      2.01GB    (4190/0/0)    4223520
  1       swap    wu    4190 -  5231    512.86MB    (1042/0/0)    1050336
  2     backup    wu       0 - 17659      8.49GB    (17660/0/0) 17801280
  3        usr    wm    5232 -  5809    300.23MB    (678/0/0)      645024
  4 unassigned    wm       0                0       (0/0/0)             0
  5 unassigned    wm       0                0       (0/0/0)             0
  6 unassigned    wm       0                0       (0/0/0)             0
  7 unassigned    wm       0                0       (0/0/0)             0
```

4. RDBディクショナリ用パーティションを作成します。

a) パーティションを指定します。

以下の例では、パーティション4を指定します。

```
partition> 4
Part      Tag    Flag     Cylinders        Size            Blocks
  4 unassigned    wm       0                0          (0/0/0)          0
```

b) パーティションIDタグを指定します。

“usr”を指定します。

```
Enter partition id tag[unassigned]: usr
```

c) パーティションパーミッションフラグを指定します。

“wu”を指定します。

```
Enter partition permission flags[wm]: wu
```

d) 開始シリンダを指定します。

以下の例では、3.のprintコマンドで確認した未使用シリンダの先頭“5810”を指定します。

```
Enter new starting cyl[0]: 5810
```

e) パーティションサイズを指定します。

“100.00mb”を指定します。

```
Enter partition size[0b, 0c, 0.00mb, 0.00gb]: 100.00mb
```

f) パーティションを確認します。

printコマンドを入力し、現在のパーティションを確認します。

```
partition> print
Current partition table (unnamed):
Total disk cylinders available: 8892 + 2 (reserved cylinders)

Part      Tag    Flag     Cylinders         Size            Blocks
  0       root    wm       0 -  4189       2.01GB    (4190/0/0)    4223520
  1       swap    wu    4190 -  5231     512.86MB    (1042/0/0)    1050336
  2     backup    wu       0 - 17659       8.49GB    (17660/0/0) 17801280
  3        usr    wm    5232 -  5809     300.23MB    (678/0/0)      645024
  4        usr    wu    5810 -  6056     100.13MB    (226/0/0)      215008
  5 unassigned    wm       0                0        (0/0/0)             0
  6 unassigned    wm       0                0        (0/0/0)             0
  7 unassigned    wm       0                0        (0/0/0)             0
```

5. データベーススペース用パーティションを作成します。

a) パーティションを指定します。

以下の例では、パーティション5を指定します。

```
partition> 5
Part      Tag    Flag     Cylinders         Size            Blocks
  5 unassigned    wm       0                0        (0/0/0)             0
```

b) パーティションIDタグを指定します。

“usr”を指定します。

```
Enter partition id tag[unassigned]: usr
```

c) パーティションパーミッションフラグを指定します。

“wu”を指定します。

```
Enter partition permission flags[wm]: wu
```

d) 開始シリンダを指定します。

以下の例では、4.のprintコマンドで確認した未使用シリンダの先頭“6057”を指定します。

```
Enter new starting cyl[0]: 6057
```

e) パーティションサイズを指定します。

“134.00mb”を指定します。

```
Enter partition size[0b, 0c, 0.00mb, 0.00gb]: 134.00mb
```

f) パーティションサイズを指定します。

printコマンドを入力し、現在のパーティションを確認します。

```
partition> print
Current partition table (unnamed):
Total disk cylinders available: 8892 + 2 (reserved cylinders)

Part      Tag    Flag     Cylinders         Size            Blocks
  0       root    wm       0 -  4189       2.01GB    (4190/0/0)   4223520
  1       swap    wu    4190 -  5231     512.86MB    (1042/0/0)   1050336
  2     backup    wu       0 - 17659       8.49GB    (17660/0/0) 17801280
  3        usr    wm    5232 -  5809     300.23MB    (678/0/0)     645024
  4        usr    wu    5810 -  6056     100.13MB    (226/0/0)     215008
  5        usr    wu    6057 -  6353     134.13MB    (298/0/0)     291506
  6 unassigned    wm       0               0        (0/0/0)            0
  7 unassigned    wm       0               0        (0/0/0)            0
```

6. labelコマンドを実行します。

ジオメトリにパーティション情報を記録するために、labelコマンドを実行します。

“Ready to label disk,continue?”に対して、“y”を指定します。

```
partition> label
Ready to label disk, continue? y
```

7. パーティションの作成を終了します。

a) partitionを終了します。

quitコマンドを実行し、FORMAT MENUを表示します。

```
partition> quit

FORMAT MENU:
        disk       - select a disk
        type       - select (define) a disk type
        partition  - select (define) a partition table
        current    - describe the current disk
        format     - format and analyze the disk
        repair     - repair a defective sector
        show       - translate a disk address
        label      - write label to the disk
        analyze    - surface analysis
        defect     - defect list management
        backup     - search for backup labels
        verify     - read and display labels
        save       - save new disk/partition definitions
        volname    - set 8-character volume name
        !<cmd>     - execute <cmd>, then return
        quit
```

b) formatを終了します。

もう一度quitコマンドを実行し、シェルのプロンプトを表示します。

```
format> quit

#
```

索引

A

Autorunによるインストール.....29

F

FATファイルシステムでフォーマットされているドライブにインストールする場合.....29

I

INITJOB.....129, 135

L

LANGを設定する.....19

O

opaconstatコマンド.....37

S

SNMPエージェントをインストールする.....17
Systemwalker Webコンソール.....108
Systemwalker Centric Managerとは.....2
Systemwalker Centric Managerの概要...1
[Systemwalkerコンソール[監視]]ウィンドウを表示する.....57
Systemwalkerコンソールの画面構成.....55
[Systemwalkerコンソール[編集]]ウィンドウを表示する.....57
Systemwalkerコンソールを起動する.....55

W

WWWサーバ.....108
WWWサーバ製品をインストールする...19
WWWブラウザで監視する.....108

あ

アクション.....102
アセスメント.....3
アプリケーションに対する稼働監視の設定.....92
アプリケーションの稼働監視.....98
アプリケーションの稼働状況を監視する81
アプリケーションの自動検出.....84
アンインストール.....9

い

イベントが発生した場合.....59
イベントの監視方法.....58
イベントの原因を調査する.....61
イベントを監視する.....58
インストール.....20
インストール後の作業.....51
インストール種別.....30, 40
インストール種別とインストールされる機能.....47
インストール前の作業.....11
インストールを実施する.....9
インベントリ情報.....145
インベントリ情報を参照する.....163

う

運用管理クライアントのインストール...29
運用管理クライアントのセットアップ...51
運用管理サーバのインストール.....20
運用管理サーバのホスト名設定での注意事項.....51

お

オプションウィンドウ.....57

か

環境作成.....24
監視.....2
監視イベント.....60
監視イベント一覧.....57
[監視イベント種別]ウィンドウ.....57, 59

監視イベント種別の絞り込み 59
監視イベント詳細の参照 60
監視イベントの対処状況 60
監視イベントの対処を自動実行する..... 102
監視イベントを監視対象からはずす..... 99
監視イベントを対処済にする 67
監視する 55
監視ツリー..... 56
監視マップ..... 56
管理アカウントを作成する 17

き

記述範囲 7
機能概要 4
業務..... 114
業務管理ツリーの作成..... 81
業務サーバに資源を配付する 140
業務サーバのインストール..... 39
業務サーバのインベントリ通知スケジュールを定義する 147
業務サーバの適用先を定義する..... 126

く

クライアントに資源を配付する..... 142
クライアントのインストール 47
クライアントのインベントリ収集スケジュールを定義する..... 151
クライアントの適用先を定義する 130

こ

構成情報の管理..... 4, 7

し

資源グループ 114
資源の配付状況を確認する 143
資源配付 4, 7
[資源配付]ウィンドウの起動..... 115
[資源配付]ウィンドウの構成..... 115
資源を登録する..... 121
資源を配付する..... 113
システム環境構築例..... 165
システムの構成情報を収集する..... 145
システムの性能監視時に通知されるメッセージ 80
システムの性能を監視する..... 77
システムの性能を監視するポリシーの定義方法 77
システムの性能を監視するポリシーの配付..... 79
システムパラメタをチューニングする ... 13
障害監視 4, 7
障害復旧 3, 5, 7

そ

[操作]ウィンドウ 57

つ

通知先へは必要な時だけ接続する 37
通知スケジュール定義を業務サーバとクライアントに配付する 156
ツリー選択..... 56

て

データベースパーティション作成例..... 165
データベースパーティションを作成する 13
データベース領域を見積もる 11
適用..... 114
適用先ID..... 126
デプロイメント..... 2

ね

ネットワーク性能の監視方法 75
ネットワークの構成情報(ノード)の自動検出..... 52
ネットワークの性能監視の定義方法..... 73
ネットワークの性能を監視する..... 73

の

ノード中心マップ 75
ノードのイベントを監視する 58
ノードの稼動監視時に通知されるメッセージ..... 72
ノードの稼動監視の定義方法 69
ノードの稼働状況を監視する 69

は

配付.....2
配付経路を定義する.....116

ひ

評価.....3, 5, 8

ふ

フレームワーク.....3

ほ

ポリシー運用.....5

め

メンテナンス版数.....114
メンテナンス版数を作成する.....136

も

モニタリング.....2

ら

ライフサイクル・マネージメント.....2

り

リカバリ.....3
リモートコマンドの実行.....65
リモートコマンドの登録.....63
リモートコマンドを使用する.....61
リモートログインを使用する.....66